

2020 年度
日本語教育実習（国内）
報告書

愛知県立大学日本語教員課程

報告書刊行によせて

2020 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により、日本語教育実習は例年とは大きく異なる環境で実施されました。実習生は外国語学部 17 名、日本文化学部 2 名の計 19 名です。

すべての実習の授業は、インターネットによる遠隔で実施され、例年行っている日本語ボランティア教室での活動には参加することができませんでした。また、地域で外国人支援を行っている施設や教育機関の訪問見学もできませんでした。一方で、オンラインによる遠隔授業の導入により教育方法が拡がり、これまで想像もしていなかった活動につながりました。

報告書には、ベトナムの日本語教育機関で学ぶ日本語学習者との会話実践や、他大学の学生との交流、また県外に住む実習修了生との交流など、新しい取り組みについて紹介しています。さらに、例年行っている地域の日本語教室の調査プロジェクトの報告会は、オンラインで実施したおかげで、地域の日本語学習支援者にもご参加いただくことができました。第 2 部には、学生の地域日本語教室の調査報告を掲載していますので、ぜひご覧いただければと思います。

2020 年度の日本語教育実習生は、活動を進める上で多くの困難に直面しましたが、そのぶん、いつもより多様な経験を積むことができたと思います。今年度、実習実施に際してご協力くださった地域のみなさま、たくさんの学びの機会を与えてくださったことに本当に感謝いたします。

またこの新型コロナウイルス感染症拡大が収まり、人々が自由に交流できるようになることを心から願っています。

日本語教員課程担当

愛知県立大学外国語学部国際関係学科教授 東弘子・宮谷敦美

2020 年度 日本語教育実習(国内) 履修者一覧

〔実習生〕

太田 梨理香	外国語学部ヨーロッパ学科フランス語圏専攻	4 年
高木 史佳	外国語学部ヨーロッパ学科フランス語圏専攻	4 年
吉田 夕華	外国語学部ヨーロッパ学科フランス語圏専攻	4 年
小林 明日香	外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻	4 年
鈴木 陽香	外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻	4 年
原 優花	外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻	4 年
清水 優花	外国語学部国際関係学科	4 年
寺澤 百香	外国語学部国際関係学科	4 年
花井 美咲	外国語学部国際関係学科	4 年
菊本 悠未	日本文化学部国語国文学科	4 年
後藤 未奈	外国語学部中国学科	4 年
中村 千咲	外国語学部国際関係学科	4 年
吉野 愛菜	外国語学部国際関係学科	4 年
近藤 来夢	日本文化学部国語国文学科	3 年
稲垣 葵	外国語学部国際関係学科	3 年
内野 雄斗	外国語学部国際関係学科	3 年
寺田 栞菜	外国語学部国際関係学科	3 年
宮本 笑莉	外国語学部国際関係学科	3 年
若山 拓生	外国語学部国際関係学科	3 年

〔SA (Student Assistant)、TA (Teaching Assistant)〕

朝長 珠理	外国語学部中国学科	4 年
原田 真緒	日本文化学部国語国文学科	4 年
三輪田 桂衣	日本文化学部国語国文学科	4 年
木戸 志緒子	国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程	2 年

〔担当教員〕

東 弘子	外国語学部国際関係学科	教授
宮谷 敦美	外国語学部国際関係学科	教授

〔外部講師〕

有森 丈太郎	トロント大学東アジア学科 准教授
川崎 直子	愛知産業大学短期大学 准教授
松本 一子	愛知淑徳大学非常勤講師
米勢 治子	愛知県立大学非常勤講師、東海日本語ネットワーク副代表

2020 年度 日本語教育実習（国内）報告書

目次

本書刊行によせて	i
2020 年度 日本語教育実習（国内）履修者一覧	ii

I 国内実習の 1 年間

1. 一年間の活動の全体像と Facebook の発信	2
2. ITM 日本語学習支援活動	5
3. 日本語教育実習生と修了生のつどい	10
4. 大阪大学授業見学と京都産業大学とのディスカッション	12
5. 地域日本語教室調査	16
6. 協定大学の留学生対象クラスの授業見学	18
7. TNN 日本語ボランティア研修	22
8. 子どもの日本語教育	26
9. ジェンダーと日本語教育	29

II 地域日本語教室調査プロジェクト

1. 黒川日本語教室	34
2. あいち国際プラザ にほんご教室	37
3. NPO 法人名古屋ろう国際センター日本語教室	40
4. 国際留学生会館日本語学習会	44
5. 犬山日本語教室	47
6. 特定非営利活動法人シェイクハンズ	50
7. ひよこの会日本語教室	53
8. NPO 法人にわたりの会	55
9. ウェルカム日本語教室	58
10. 日進市国際交流協会日本語教室	60
11. みよし市日本語講座	63

12. 東郷町日本語教室	・ ・ ・ ・ ・	66
13. 豊田市国際交流協会 TIA にほんごひろば	・ ・ ・ ・ ・	69
14. 碧南市日本語教室	・ ・ ・ ・ ・	72
15. 豊川市国際交流協会日本語教室	・ ・ ・ ・ ・	75
16. にほんごきょうしつ・豊橋ふれあい日本語教室	・ ・ ・ ・ ・	78
17. 新城市日本語教室	・ ・ ・ ・ ・	81
18. 四日市市多文化共生サロン	・ ・ ・ ・ ・	83
19. ワイワイにほんご・たいこうやま	・ ・ ・ ・ ・	86

Ⅲ 私たちの学び	・ ・ ・ ・ ・	91
-----------------	-----------	----

I 国内実習の 1 年間

1. 一年間の活動の全体像と Facebook の発信

内野雄斗

1. 全体スケジュール

以下に、今年度の実習の年間スケジュールを示します。コロナウイルスの影響で 2020 年度の始業が 5 月からになり、実習授業も全てオンラインで実施されました。基本は水曜日の 5 限に開講されましたが、土曜日に活動することもありました。

前期

5 月 13 日	ガイダンス
5 月 20 日	遠隔日本語学習支援プロジェクト
5 月 27 日	ITM 日本語学習支援活動①
6 月 3 日	ITM 日本語学習支援活動②
6 月 10 日	ITM 日本語学習支援活動③
6 月 17 日	支援活動のふりかえり
6 月 20 日	ベトナム人日本語教師へのインタビュー
6 月 24 日	インタビュー内容の共有
6 月 27 日	日本語教育実習修了生との交流会
7 月 1 日	大阪大学日本語日本文化教育センター授業見学の準備
7 月 7 日	大阪大学日本語日本文化教育センター授業見学
7 月 14 日	大阪大学日本語日本文化教育センターと京都産業大学の学生とのディスカッション
7 月 22 日	地域における日本語学習支援の概要
7 月 29 日	地域日本語教室調査の準備
8 月 5 日	地域における日本語学習支援調査発表

後期

9 月 14 日	日本語ボランティア研修
10 月 8 日	後期ガイダンス
10 月 11 日	日本語ボランティア研修（聴講）
10 月 15 日	地域日本語教室調査の発表①
10 月 22 日	地域日本語教室調査の発表②
10 月 29 日	地域日本語教室調査の発表③
11 月 5 日	県大日本語クラス見学について
11 月 19 日	日本語クラス参加の疑問点・課題を話し合う
11 月 26 日	日本語クラス参加での気づき
12 月 2 日	TNN の活動と役割
12 月 5 日	日本語ボランティアシンポジウム
12 月 9 日	子どもの日本語教育について
12 月 16 日	子どもの日本語教育について
12 月 23 日	日本語教育と性差について
1 月 20 日	活動報告書について
1 月 27 日	一年のまとめ

2. 日本語教育実習のメンバー

今年度の実習は21名（4年：15名、3年：6名）のメンバーで始まりました。学科別では国際関係が10名、スペインが4名、フランスが3名、英米が1名、中国が1名、国語国文が2名でした¹。男子学生は僕含め2名でしたが、皆さん明るくて、楽しく実習に参加することができました。

担当教員は、国際関係学科の東弘子先生と宮谷敦美先生です。また、外部講師として米勢治子先生も参加してくださいました。日本語教育のスペシャリストなので、鋭い視点から指摘が飛んでくることがありますが、常に明るくて困ったことがあればアドバイスもしっかりとしてくださいるので、実習がとてもやりがいを感じられるものになっています。

SA（スチューデントアシスタント）として3名の先輩が実習を補助してくれました。また、僕が今後のキャリアについて悩んでいる時に、実習を経験した先輩として親身になって相談にのってくれました。そのような優しくて頼れる先輩が実習をサポートしてくれます。

3. 授業スタイル

今年度の活動は全てオンラインで実施しました。授業スタイルは主に「座学スタイル」と「実践スタイル」に分かれています。座学スタイルでは日本語教育に携わっている方々のお話を聞いたり、日本語教育における支援、多文化共生などについて学びました。実践スタイルでは、日本語学習者とのクラス活動、日本語教師の方との交流、留学生の日本語クラスを見学・支援するなどの活動をしました。また、夏休みには実習生が、実際に地域の日本語教室の調査に赴き、夏休み明けにその調査結果についてのプレゼンテーションを行いました。

授業内では議論をしたり、発表したりする機会が多かったです。そのため、伝える力や考える力が鍛えられました。日本語教育だけでなく、学生生活や今後のキャリアにも生きてくるスキルを身につけることができます。

4. オンラインだからこそできたこと

僕自身、オンラインでの実施ということで当初は「内容が少し薄くなってしまうのではないかな」などの不安がありましたが、実際はそんなことはありませんでした。オンラインでも教授法やクラス運営の工夫について学ぶことができました。さらに海外で日本語教師として働いている方と交流したり、県大以外の大学の日本語クラス見学や日本語教育を学んでいる学生との意見交換をすることもできました。オンラインだと遠隔地にいるより多くの方と、簡単につながることで、より多角的な視点からの意見や考えを得ることができるので、むしろ多くのことが学べるのではないのかなと思いました。

また、実習では実際に教室に赴いて活動することはできませんでしたが、自ら地域の日本語ボランティア教室に参加してみたり、インターネットやSNSを利用して日本語教育の活動をする

¹ 途中で履修をとりやめた学生が2名います。

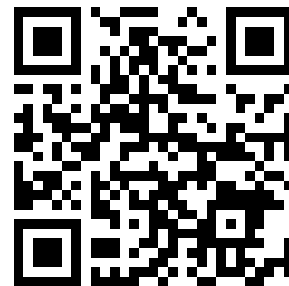
こともできるので、実習で学んだことを自ら工夫して更なる学びに繋げることも可能だと思います。

5. Facebook の活動報告について

愛知県立大学の日本語教育実習は Facebook アカウントを持っています。各回で Facebook の担当を決め、授業後に文章を投稿してきました。書く内容は授業内容とその授業で学んだことや感想についてです。授業後すぐに作成するので、授業で学んだことを整理・アウトプットすることができ、得た知識が定着します。また、全世界に発信するものなので、誰が見ても分かりやすい文章を書く練習にもなり、自らのスキルアップにも繋がる活動だったと思います。

愛知県立大学日本語教育実習 Facebook ページ

URL: <https://www.facebook.com/kendainihongo>



2. ITM 日本語学習支援活動

太田梨理香・清水優花・寺澤百香

2020 年度の日本語教育実習の最初の活動は、ベトナムにある ITM 日本語センターで日本語を学ぶ学習者への支援活動でした。技能実習生として日本に派遣される予定だった彼らは、新型コロナウイルス感染症の流行によって日本への渡航が延期となっていました。そんな状況の中でも今できることをやってみよう！と、この活動が始まりました。

1. ITM 日本語センターについて

ITM 日本語センターは、ベトナム・ハノイを拠点とする日本語教育機関です。技能実習生、技術者、留学生、企業社員への日本語・マナー・文化教育や、大学と連携した日本語教育などを実施しています。運営元の株式会社 ITM は人財事業も行っており、2006 年の設立以降、延べ 1 万人以上の技能実習生を日本企業に派遣するなどの実績を残しています²。

2. ベトナムの日本語教育事情

近年、ベトナムにおける日本語教育は急速に拡大しています。国際交流基金の発表によると、2015 年度、日本語教育機関数は 219、教師数は 1,795 人、学習者数は 64,863 人でした。それが 2018 年度には、機関数が 818、教師数が 7,030 人、そして学習者数は 174,521 人と、大幅に増加しました。学習者数が全体に占める割合も 1.8%から 4.5%に増大し、世界で 6 番目に日本語学習者が多い国となっています³。

3. 学習者との活動について

基本知識を学び、活動計画を立てた後、いよいよ学習者を交えた活動に入りました。活動日は、2020 年 5 月 27 日、6 月 3 日、6 月 10 日の 3 日間です。Zoom を使用して、各回 1 時間程度行いました。学習者は、主に技能実習生として来日予定のベトナム人学生 45 人です。日本語学習歴 1 年未満の人が中心でした。最初の 2 回は実習生 2~3 人、学習者 4~5 人 1 グループで 10 グループに分かれ、会話中心の活動を行いました。そして最後の回に、学習者による発表大会を開催しました。テーマは自由です。学習者個人が準備した動画やパワーポイントをグループで発表後、代表者が参加者全員に発表を行い、投票で優秀作品が選出されました。

² 株式会社 ITM ホームページ <https://jp.itmjsc.com>

³ 国際交流基金(2020)『海外の日本語教育の現状 2018 年度日本語教育機関調査より』
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2018/all.pdf>

以下、個別のグループで行った活動について紹介します。

【太田・清水グループ】

参加してくれた学習者は、初回は5人、2回目と3回目は3人でした。

<初回> 自己紹介・次回のトークテーマ決め

初対面ということで、まずは1人ずつ自己紹介を行いました。話す内容を準備してくれていたようで、日中韓のポップ音楽が好きな人、3年間毎日ジムに通っている人、高校で週3回バレーボールをしていた人など、様々な人が参加してくれたことが分かりました。反省点は、場が少し堅い空気になってしまった点です。緊張もありますが、原因は進行役がターンを握りすぎて、会話の順番が進行役→学習者A→進行役→学習者B・・・と、不自然になったことだと考えました。このことから、次回は進行役の役割を大きくしすぎないようにしよう、と話し合いました。

<2回目> 「食べ物」について

前回の投票を踏まえ、全員がそれぞれの好きな食べ物を、実物や写真を用いて紹介しました。その結果、前回よりぐっと会話が盛り上がりました。視覚的な情報が加わったことで、学習者の理解度と全体の関心が高まったと考えられます。また、進行役が柔軟に対応したことで、会話のターンを比較的全体で回せるようになりました。それから、役に立ったのが Facebook です。はじめに交換しておいたお陰で、活動中に学習者が理解できなかった内容を、あとで補足・確認することができました。個人のおしゃべりにも活用できるため、良い手段だと思います。

<3回目> 発表大会

私たちのグループの学習者は、「ベトナム女性の日」、「ITM 入学前夜」、「近所の神社」について発表しました。動画でリアルな光景を切り取ったり、パワーポイントで要点を整理したりと、アプローチ方法は様々で、どれもとても興味深い内容でした。苦心したのは、学習者に伝わるように質問内容を伝えることです。一文一文を短く切る、曖昧な表現を避ける、難しい語彙を言い換えるなど、頭では分かっているけど実践できないことが多く、もどかしさを覚えました。そのような中でも、回を重ねる毎に距離を縮めて良い関係を築くことができ、嬉しかったです。

<全体を通して>

会話活動が中心だったこともあり、「日本語教育」というよりは、異文化を持つ友人とのお話タイム、という感覚でした。試行錯誤しながらも、話していて純粋に楽しくて、時間が経つのがあっという間だったように思います。互いに理解しきれないことがあっても、何とかコミュニケーションを図ろうという意思を見せることが大切なのだと学ぶことができました。

【寺澤・菊本グループ】

私たちのグループは、男性2人、女性2人の4人の学習者と一緒に活動を行いました。

＜初回＞自分の住んでいる町についての紹介

3 週にわたって同じグループで活動するというこゝで、初回の目標は学習者一人一人について少しでも多く知ることでした。日本語レベルや学習者が日本に興味を持ったきっかけについて探れるよう、活動案を作成しました。また、自分たちの気になることだけを質問攻めしても答えづらいと考え、まずは自分の話をしてから学習者の話を引き出すという意識のもとに活動に臨みました。ところが、一部の学習者が想像以上に積極的で、完全に彼らのペースに飲まれ、活動案通りに進行できませんでした。どうにかペースを取り戻そうと必死だった自分たちに気づき、次回は活動案にとらわれすぎず柔軟に対応できるように心がけようと話し合いました。

＜2 回目＞学習者の趣味をトピックにした会話活動

前回の活動を踏まえ、「料理」「音楽」「バイク」など、初回で知った各学習者の趣味に関するトピックを提示し、学習者がテーマに関して自由に話せるような活動を考えました。時間配分のみを意識すればよかったため余裕を持って進行できたと同時に、学習者の話す機会が均等になりました。活動全体はスムーズに終えることができた反面、所々でお互いに伝えようとするのが理解できない場面がありました。言い換えて伝えようすると、学習者同士でベトナム語で話し始めたため、戸惑ってしまいました。意思疎通が取れない場合に使うストラテジーについてもっと知っておく必要があると感じました。

＜3 回目＞発表大会

私たちのグループでは 2 人の学習者がムービーを作って発表してくれました。地元の町「タイグエン」と、ベトナムで流行しているミルクティー「チャースー」について紹介してくれました。彼らが実際に撮影した写真や映像を使って作られたムービーは、ベトナムの実際の様子が伝わってきてとても面白かったです。発表を聞いた後は、発表に関連するトピックを用いて全体で会話活動を楽しむことができました。前回同様に伝わらない場面や聞き取れない場面もありましたが、時に「そうですか〜、じゃあ〇〇さんはどうですか？」などと流して進めました。伝わらない時に潔く次の話題に転換していくことも方法の一つだと学んだと同時に、意思疎通ができない場合の言い換えやフィードバックの必要性も活動の目的に応じて変わるのだと気づきました。

＜全体を通して＞

媒介語がない中で初級の学習者とうまく会話ができるか不安でしたが、積極的に話そうとしてくれる学習者のおかげでとても楽しい活動となりました。3 週連続の活動だったので、反省点を次回に活かして改善していくことができた点も、達成感に繋がりました。また、3 回の活動を通じて同じグループの学習者とより親しくなることができました。実際には会えなくても遠く離れた場所にいる人と親交を深めることができ、オンラインの可能性を感じた活動となりました。

4. ITM の日本語教師へのインタビュー

会話活動が一通り終わった後には、ITM 日本語センターで日本語を教える先生方にお話をうかがいました。各グループに 1 名の先生が入り、「あなたと日本のきっかけ」を中心に 30 分間イン

タビューを行いました。

ここでは、太田・清水グループのフン先生へのインタビュー内容について紹介します。フン先生は、ITM に勤めて 2 年目の先生であり、7 歳と 3 歳のお子さんを育てているお母さんでもあります。とても緊張していたインタビューでしたが、とても明るく気さくな方で、インタビュー時間があっという間に感じられました。以下、質問とその回答です。

質問「二人のお子様を育てるお母様ということで、教師と子育ての両立は大変ではないですか。」

とても大変です。実は子供が生まれてから日本語の教師になりました。子供を学校へ送り出してから教師として働いています。実は、前職から日本語を使う仕事をしていて、ベトナムにある日本の建築会社で働いていました。

質問「なぜ日本語教師になられたのですか。」

(フン先生の) 母も教師をしており、幼い頃から「教師」になりたいと感じていました。日本語を学んだ後には、いつか日本の会社で働きながら日本語の先生になりたいと思っていました。

質問「なぜ日本語を学んだのですか。」

高校を卒業し、大学受験を失敗してしまいました。しかし、早く自立したいと思いハノイにある日本の専門学校への入学を決めました。卒業後は条件のいいベトナムにある日本の会社に就職しました。

質問「日本へ行ったことはありますか。」

会社の研修で 6 ヶ月間鳥取県へ行きました。日本での研修を通して日本語がとても上達しました。研修後には日本語能力試験にも合格しました！

質問「日本語教師として働く中で大変なことはありますか。」

高校を卒業してすぐ日本へ技能実習生として行く生徒も多く、勉強が得意でない生徒が多いので、その様な生徒や日本に行きたいだけの生徒もおり中々勉強に身が入らない、やる気のない生徒に教師としてどう、やる気を出させるかが難しいなと感じています。

5. コロナ禍のオンライン実践で感じたこと

新型コロナウイルス感染症の影響で、対面での実習活動難しくなった今年、「オンライン」だからこそ「繋がる」ことができ「来日前のベトナム人技能実習生」と活動することができました。この活動は今年だからこそできた活動だと感じています。以下、感じたことを記します。

オンラインで難しいと感じた点

通信環境によって、音声聞き取れなかったりビデオの再生が上手くいかず、完全に参加できなくなってしまった学習者もありました。通信環境によって活動自体が左右されてしまう場合があり、もどかしく感じてしまうこともありました。また、非言語情報を得ようとしてもデバイスの

画面のみが頼りで、学習者が本当に理解しているのか読み取るのが難しいと感じました。他にも、鶏の鳴き声や周囲の会話など、生活音が入って活動に集中し辛いことがありましたが、それを会話のネタにして繋げることができました。

オンラインだからこそできたこと

オンラインツール（チャット機能や画面共有）などを用いて幅広い活動を行うことができました。また、実習生のほとんどが自宅から参加しているため、レアリア（お菓子などの実物教材）など授業で用いる教材を気軽に準備することができました。そして冒頭でも述べたように、オンラインだからこそ来日前のベトナムにいる学習者と活動ができたと感じています。

オンラインでの活動は、私たちも初めてのことで戸惑う反面、世界中全ての人と「場所」を選ばず活動を行うことができるという可能性に気づかせてくれました。

6. 活動を通して学んだこと



(太田)

今までの活動、学生生活の中で自分がいかに「正解」を探して活動していたのかを実感しました。学習者との活動の準備の際にも「どういった活動にしたいのか」よりも「どうするのが良いのか、どうしたら活動がうまく行くのか」ばかりに焦点を当てていました。しかし、活動を通して「私は学習者と何をしたいのか、学習者とどういった関係性になりたいのか」など既存の正解を探すのを辞め、より主体的に行動する大切さをこの活動を通して改めて気付かされました。

初級の学習者と活動を行う際でも、こちらの工夫次第で内容の濃い会話ができるということに気がつきました。学習者が話しやすいトピック（身の回りのことなど）を選択したり、学習者が答えられる質問を積み重ね（清水）ったり、文字や写真を補足的に使ったりと、様々な工夫を試みるのが大切だと感じました。また、学習者一人ひとりに合わせた教室活動を行うのは、とても難しいと実感しました。最大5人の学習者と活動しましたが、性格も趣味も年齢もバラバラでした。そのため、皆が関心を持てる活動とは何かを常に考えながら、学習者全員に平等に話を振れるよう意識しましたが、なかなか上手くいきませんでした。



(寺澤)

計画通りに授業を進行するのがとても難しいことであると学びました。学習者が想像もしていないところで話し始めたり、質問しても黙り込んでしまったりする場面が何度もありました。与えられた時間の中で用意した内容をこなすには、柔軟な対応が求められると感じました。他にも、発話が少ない学習者でも関心のある話題になると、積極的に会話活動に参加してくれることに気づきました。学習者が思わず発話したくなる様な話題提供も大切だと学びました。

3. 日本語教育実習生と修了生のつどい

近藤来夢・寺田葉菜

1. 「日本語教育実習生と修了生のつどい」とは

毎年6月下旬に「日本語教育実習」の授業として開催しているイベントで、主に日本語教員課程を修了した先輩方をお招きしています。今年度は2020年6月27日（土）、初めてのオンライン開催となりました。おかげで、青森や長野、そしてベトナムからも参加していただけることになりました。

ピンチをチャンスに、ポジティブに！

「日本語教育実習生と修了生のつどい」の全体の流れ

- | | |
|------------|-----------------------------|
| ・宮谷先生からの報告 | 1年間の現地研究を経た、ベトナムにおける日本語教育事情 |
| ・芹澤さんのお話 | 日本で暮らす技能実習生への支援の事例紹介 |
| ・実習生からの報告 | 2020年度の日本語教育実習活動報告 |
| ・グループセッション | 実習の日本語支援（遠隔ベトナムプロジェクト）紹介と交流 |
| ・松浦さんのお話 | ベトナムの日本語学校における課題 |

2. ゲスト講師によるお話

今年度は、卒業生ではないゲスト講師として2名の方にもお話しいただきました。ここからは私たち実習生の目線から、それぞれのお話をご紹介します。



芹澤 恵美さん

JICA 国際協力(アフリカ) の経験などを経て、現在、長野県阿智村でゲストハウスを経営しながら地域の外国人技能実習生の支援活動を行う。

ゲストハウス経営と一口に言っても、芹澤さんの活動はとても幅広いものです。

宿泊業 + こども食堂、スマホ教室、凸凹の会、はぐカフェ、にほんごカフェ …

これらの活動の共通点は、地域に根差していることです。

ゲストハウス「みんなのいえ」という名前の通り、地域住民にも広く開かれた空間には多様な人々が足を運びます。そんな環境で「にほんごカフェ」に通う技能実習生の存在が徐々に知られ、彼らへの理解や支援の輪が広がっていくという仕組みが作られています。

芹澤さんは阿智村のご出身ではなく、日本語教師の経験者というわけでもありません。

しかし「知らない」からこそ周囲に頼りながら、ラフにタフに、活動を進めていくパワフルさがあるのだと感じました。

芹澤さんは日本語学習者としてではなく地域に暮らす仲間として技能実習生と関わり、彼らと地域との橋渡し役となっています。そんな芹澤さんの活動は多文化共生を体現する存在で、大変感銘を受けました。

感染症が落ち着いていたら、夏休みに合宿に行きたかった…。(近藤)



松浦 真理子さん

ベトナム・ハノイの日本語学校で、技能実習生派遣前教育に携わる。
(前期の授業「ITM との会話活動」でもお世話になりました。)

修了生のつどいでは、最後に松浦先生からベトナムの日本語教育の課題についてお話がありました。

まず、今の日本語教育は、暗記が中心の活動となっています。例えば、会話の練習では、台詞を暗記しそれを感情関係なしに言うだけ。会話のテストでも教師と学習者が1対1で、一問一答形式で行われます。これも、覚えた台詞を言うことができればOK。また、ベトナムの日本語教育は「軍隊方式」で行われています。授業のはじめには、全員そろって大きな声であいさつをし、お辞儀の角度も全員きれいに揃ってします。言葉で聞くと、日本の小中学校で当たり前の光景のように思うかもしれませんが、実際動画を見てみると、自衛隊員のようなキレのいい動きをしていました。正直そこまでしなくても…と思ってしまうほどです。

ではなぜ、このような形で日本語教育が行われているのでしょうか。

- ・受け入れ側の日本人がこれをよしとする
- ・指導するベトナム人教師も同じ指導を受けてきたため、疑問を抱かない
- ・指導にあたる日本人が日本語教育の知識や経験に乏しい

暗記中心で軍隊方式の教育となってしまうのには、以上の3つの理由が挙げられます。

ここから見えてくる課題として、松浦先生は以下の2点を挙げていました。

- ・求められる日本語能力が「就職」や「実習」を基準にする傾向がある
- ・教師が口頭能力を伸ばす授業をしない、できない

このお話から、私は、ベトナムの日本語教育が内容よりも形式にとらわれてしまっていると感じました。それと同時に、日本の教育も同じなのではないか…とも気づきました。私は、日本語教員課程と併せて、教職課程も履修しています。修了生のつどいで学んだこと、気づいたことは日本の教育にも当てはまる課題だと思うので、教育を提供する側の問題として捉えることで、形式にとらわれない教育を提供していかなければならないと感じました。

(寺田)

4. 大阪大学授業見学と京都産業大学とのディスカッション

高木史佳・後藤未奈

1. 7月7日 大阪大学授業見学

今回の授業見学は、大阪大学日本語日本文化教育センター(CJLC)の協力により実現しました。CJLCは、大阪大学の外国人留学生のための日本語教育を行っている機関で、50もの国・地域からの留学生が約200名学んでいます。今回の授業見学は、「日本語・日本文化教育研修共同利用拠点」事業（平成28年度～平成32年度文部科学大臣認定 教育関係共同利用拠点）によるオンライン日本語授業見学の枠組みで実施されました⁴。

【活動内容】「初級後半の会話授業」の見学

教師：松岡里奈 先生

参加協力者：大阪大学 大学院生5名（学習者役）

出身国内訳：タイ2名、ルーマニア、中国、シリア、各1名

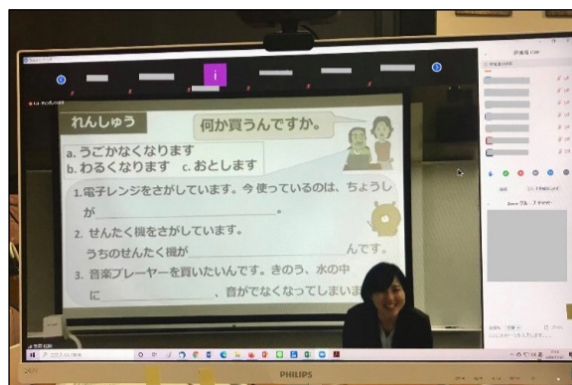
学習者役の留学生の専門分野：日本語学、日本語教育学

授業の設定：大阪大学 留学生向け選択科目のうちの一つの授業〔初級後期〕

見学した授業の内容

導入	「どんなとき電気せいひんを買いますか？（イラストを見せながら）」 《回答》 ・引越しのとき・持っているものが壊れたとき 「欲しい電気せいひんはありますか？」 「インターネットで電気せいひんを買いますか？」
今日の ゴール設定	× 文型が使えるようになる ○ 「今、何を、どうして買うのか話します！」
単語の覚え方を提案	書く、読む、クイズレット
モデル会話の確認	
リスニング「聞きましょう」	
文型『Vなくなりました』の 確認	例) うごかなくなってしまったんです →うごかなくなりました ⇒ 『Vなくなりました』 「Vない + なくなりました」
文型『Vなくなりました』で リピート練習	
再度、モデル会話を聞く	

⁴ 大阪大学日本語日本文化教育センターweb サイト <https://www.cjlc.osaka-u.ac.jp/japanese/>



見学後の松岡先生への質疑応答

見学者が質問したい項目を挙げ、投票制で気になる人が多い質問から答える形式で質疑応答を行いました。

(例)・人数が多くても一人ずつ指摘するのか

回答) できるだけ多くのチャンスを与えるために、全員指名するようにしています。

・誤用はどのように指摘するのか

回答) 自然と言いなおす方法(リキャスト)をよく用います。本人が自ら間違いに気づく可能性があるときはあえて「指摘しない」という選択肢を選びます。

・学習者が教師の質問に答えられていない場合はどう対処するのか

回答) どこでつまづいているのか確認するために説明しなおすか、言葉の頭出しをして学習者の発言を促します。

私たちが注目したポイント

授業の見学に入るにあたり、実習生はグループに分かれて、以下4点に注目して見学しました。

- ・学習者を教室活動に引き込むテクニック
- ・誤用の指摘方法
- ・学習者に対する働き掛け
- ・教具の使い方

私(後藤)は、学習者を教室活動に引き込むテクニックとして、主に①教師の表情、②話し方(声のトーンなど)、③身振り手振り、④授業の最初の掴み方、⑤学習者への声掛け、これらのポイントに絞って見学しました。以下、観察から気づいたことを述べます。

①教師の表情 ②話し方 ③身振り手振り

これらのポイントについては、単語を説明する際に違いがよく見られました。例えば、「今日はジメジメしていますね。」の“ジメジメ”を表現する際に、ムッとした表情、低い声のトーン、身振り手振りで表現していました。このように英語などの媒介言語を使わずとも、学習者に意味を伝えることの重要性を感じました。身振り手振りについては、学習者に回答を求めるときに耳に手を当てている点も印象的でした。

④授業の最初の掴み方

授業にいきなり入らず、ウォーミングアップをすることで授業の雰囲気作りに繋げていました。今回の授業では、「今日の天気」について話していました。学習者の緊張が解けているように見えましたし、みんなが話せるテーマであったので学習者一人一人が積極的に発言している姿が印象的でした。

⑤学習者への声掛け

学習者の性格などから、あまり発言しない人にどのような声掛けをするのか注目しました。基本的に学習者全員が自由に発言していましたが、問題を解くような場合は発言が少ない人を指名していました。また、学習者の答えが間違っている場合でも、教師は発言を完全には否定せず、「あー、確かにそうですね。」と言って何でも答えやすい雰囲気作りをしているように感じました。

2. 7月14日 合同ディスカッション

7日の授業見学を終えた後、7月14日は、グループに分かれて愛知県立大学、京都産業大学、大阪大学の合同ディスカッションを行いました。各グループに学習者役として参加した大阪大学の留学生が参加しました。このディスカッションでは、意見の共有、留学生に対する質問などを行いました。

実習生が気づいた点として、教師の表現力（表情、話し方など）が豊かであるという点が第一に挙げられました。私も授業を見学してみて、声に感情を持たせているように感じました。また、授業の目標を提示することで、学習者の集中力アップに繋がっているのではないかという意見もありました。実際、集中していない様子が見られる学習者はいませんでした。さらに、前回の授業で学んだことを復習する時間がとても重要であるという意見がありました。私も授業を見学してみて、ただ与えられたテキストをこなすのではなく、ゆっくり身につけていくことが重要なのだと思いました。

ディスカッション後半では、留学生への質問が盛り上がりました。私のグループにいた留学生はルーマニア出身の学生でした。教師との距離感を感じるかという質問に対して、「距離感は感じなく、緊張をせずに授業を受けられるので学んだことが記憶に残りやすい。」と答えていました。教師が作る授業の雰囲気や工夫一つで学習者が伸び伸びと学習できるのだということが分かりました。



3. 感想

今回の活動を通じ、地域日本語教室での活動とはまた違った日本語教育の現場を見学することができました。今回は、松岡先生や大学院生の皆さんの協力を得て模擬授業を見させていただい

たため、私が注目していたポイントである「実際の誤用の場面やその指摘方法」を見ることは難しかったのですが、日本語教師としての学生たちに対する向き合い方や雰囲気作りの方法、授業内での工夫など様々なことを学ぶことができました。特に「(初級は特に) 学生たちの“できた!”を増やすことで自信をつけてもらう」という松岡先生の言葉が心に残っているのですが、その言葉通り、授業内でもポジティブフィードバックを多く行われていたのが印象的でした。今回の活動は、自分の中の目指すべき理想の日本語教師像を見つめ直すきっかけになる有意義な時間でした。(高木)

この授業見学で最も印象的だったのは、学習者の答えを完全に否定しないという点でした。教師も含め教室にいる学習者みんなが持つ価値観はそれぞれ違います。学習者一人一人の答えを受け止め、価値観や考え方を尊重することが重要だと感じました。また、答えを完全に否定することで学習者のモチベーションの低下に繋がってしまいます。私も中国語の授業で先生に答えを完全に否定されることがありますが、自信をなくしてしまい、発言するのに躊躇してしまうことがあります。完全に否定するのではなく、学習者に配慮して正しく教えることが重要だと感じました。将来日本語教育に携わる機会があるときにここでの経験を活かしたいです。(後藤)

5. 地域日本語教室調査

中村千咲

1. 調査先日本語教室一覧

実習生 19 名、それぞれが調査した日本語教室とその市町村について以下の表に示しました。愛知県内の日本語教室を調査した実習生が 17 名で、残りの 2 名は県外の日本語教室について調査を行いました。（網掛けが愛知県外の教室）

氏名	調査先日本語教室	
	市町村	教室名
吉田 夕華	名古屋市北区	黒川日本語教室
原 優花	豊橋市	にほんごきょうしつ・豊橋ふれあい日本語教室
寺澤 百香	名古屋市港区	国際留学生会館 日本語学習会
後藤 未奈	日進市	日進市国際交流協会 日本語教室
中村 千咲	長久手市	ウェルカム日本語教室
内野 雄斗	豊田市	豊田市国際交流協会 TIA にほんごひろば
高木 史佳	富山県射水市	ワイワイにほんご・たいこうやま
鈴木 陽香	新城市	新城市日本語教室
清水 優花	名古屋市中区	あいち国際プラザ にほんご教室
菊本 悠未	碧南市	碧南市日本語教室
宮本 笑莉	名古屋市千種区	名古屋ろう国際センター日本語教室
近藤 来夢	小牧市	ひよこの会日本語教室
若山 拓生	犬山市	特定非営利活動法人シェイクハンズ
太田 梨理香	犬山市	犬山日本語教室
小林 明日香	豊川市	豊川市国際交流協会 日本語教室
花井 美咲	三重県四日市市	四日市市多文化共生サロン
吉野 愛菜	東郷町	東郷町日本語教室(入門・初級コース)
稲垣 葵	小牧市	にわとりの会
寺田 葉菜	みよし市	みよし市日本語講座

2. 事前準備

地域日本語教室の調査に向けて、授業では、まず地域日本語教室の多様性、課題、地域日本語教育のあり方など、「地域における日本語学習支援」について、これまでに学んだことを踏まえて、再度学習しました。授業を通して地域日本語教室についての理解を深めた後、実習生一人一人が、調査する日本語教室を決定しました。

本調査を行う前に、インターネットを使った予備調査を行いました。それぞれの地域日本語教室について、インターネットからわかった情報、さらに調査すべき項目・詳しく知りたいことを、授業内で事前に発表を行いました。発表後は、実習生同士で意見を交換し、本調査に向けて準備を行いました。

3. 本調査

調査は、夏季休暇中の9月に、実習生が各自で地域日本語教室と連絡を取り、実施しました。コロナ禍での調査となったため、訪問調査だけではなく、電話を用いた聞き取り調査やメールを用いたアンケート調査など、調査方法は実習生ごとに異なりました。

私は、事前にメールでアンケート調査を行い、基本情報について伺いました。後日、日本語教室を訪問し、学習者とボランティアの雰囲気や活動形態など、教室活動の様子を肌で感じることができました。

4. 調査後の活動

調査結果については、後期の授業内で、3回にわたって実習生ひとりひとりがパワーポイントを用いてオンラインで発表を行いました。1人5分程度で発表を行い、その後質疑応答の時間が設けられました。発表会には実習生だけではなく、協力してくださった地域日本語教室のボランティアの方にも参観していただきました。発表後には、それぞれの発表に対して、実習生同士が質問をすることで、他の実習生が調査した日本語教室についても、理解を深めることができました。

5. 参観者からのコメント

10月の授業で発表会を行いました。発表会に参観された方からは、発表会終了後、「インタビューや見学に基づいた発表というのが何よりよかったですし、一度に複数の機関についての話を聞けたので、愛知の中でも地域差があることが実感できました」「コロナの影響で、ほかの教室では運営方法が変わったのか、また、学習者・ボランティアの数は変化があったのか気になったので、わかる範囲で聞けてよかったです」といった感想をいただきました。

6. 協定大学の留学生対象クラスの授業見学

花井美咲・鈴木陽香・稲垣葵・若山拓生

1. はじめに

私たち日本語教育実習生は11月の1ヶ月間、本校の協定大学の交換留学生向け授業の見学・参加をしました。今年度はコロナウイルスの影響もあり、授業はオンライン形式を主として実施されています。未だ来日できていない留学生も多く、母国からオンラインで参加するなど例年とは異なる形式での授業となっていました。クラスは初級、中級、上級の3レベルに分けられており、日本語能力（聴く・話す・読む・書く）を身につけるための総合日本語のクラス、ディスカッションやプレゼンテーション、文章の書き方などを学ぶ授業が各レベルで開講されています。実習生は各クラスに1人から5人がオンラインで見学・参加しました。

2. 見学・活動報告：初級

Discover Japan

学習者の出身国や日本の生活文化を知り、考えを深めること、文化についてわかったことや気づいたことを自分の言葉で話したり書いたりできるようになることを目指すクラスでした。授業では、観光地、ファーストフードなどのテーマからどれを話すか全員で決めました。そして、それについて1週目は、グループで自分の国にどんなものがあるか話し合いました。2週目には、友達にインタビューをして、3週目に発表をしました。実習生は、グループに分かれた時に留学生と一緒に話をしたり、発表の時にコメントをしたりするなどして授業に関わりました。

総合日本語 I

さまざまなトピックについて、読んだり話したりしたことをもとに「書く」ことができるようになることを目指したクラスでした。教科書のテーマに合わせて文法を学習し、問題を解きます。そして、グループに分かれて示されたトピックについて会話を行います。最後に、全体に戻って、話した内容の共有と作文の練習を行います。今年は、オンライン授業ということもあり、書く練習の時には、Teamsのチャット欄を使って文章を送り、チェックするという方法がとられました。実習生は、見学させていただいた4回のうち前半2回は、見学という形で授業のサポートを行いました。具体的には、グループに別れた時の会話や学習者の書いた文章のチェックです。後半の2回では、実際に授業をさせていただきました。トピックに沿って、授業構成や教具などを考えました。

日本語実践

留学生が日本の地域社会とつながることを目的に、身近なトピックについて話すことを行いました。最初に、復習として前回学習した内容をクイズ形式で問題を出して答える時間がありまし

た。その後、決められたトピックについてグループに分かれて会話をしました。また、ビデオレターを作る活動も行いました。僕が参加した回では、復習の後、授業内で好きなアーティストについてグループに分かれて話をしました。ビデオレターでは、日本の大学の担当の先生に向けてのメッセージを撮影したものを見て、間違いがないかなどを確認したあと、もう一度撮影を行いました。

3. 活動報告：中級

日本語文章表現

このクラスでは日本語の文章の構造の理解、要約、文章の組み立てなど書き言葉に関する基礎的な知識を学習し、さまざまなタイプの文章が書けることを目標としています。受講者は中国、ロシアの留学生 4 名でした。実習生は留学生とペアになり、ディクトグロスという活動を実施しました。留学生は読み上げられた文章をメモし、自分のメモから文章を再構築していきました。実習生は文章再構築のサポートを行いました。見学を通して学習者とのコミュニケーションの取り方、授業の進め方など多くのことを学ぶことができました。またオンライン形式の授業ではジェスチャーや表情を対面式の授業より強調して行うなど、コロナ禍ならではの工夫も見られました。

総合日本語Ⅱ

このクラスでは、さまざまなトピックについて「読む」「話す」活動を通して自分の考えを「書く」ことを目標としています。受講者は中国、ロシアの留学生 4 名でした。トピックに関するテキストを読み、意味や語句を確認したのち、留学生や実習生がそれぞれの考え、経験を出し合い、授業の最後には自分の意見を文字に起こし、その添削を先生や、実習生が行いました。授業内では留学生が知らないような単語をチャットに書き込んだり、留学生が言ったことをわかりやすく言い直してリピートしたりなど先生の工夫をたくさん見つけることができました。

4. 活動報告：上級

総合日本語Ⅲ

このクラスでは、「書く」学習活動を通し、留学生活での経験やそこから感じた・学んだことなどを、クラス内で共有することで、文章を作成する際の思考力を身につけるという学習を行います。具体的には、作成したエッセイを新聞社に応募する活動や、クラスの学習者全員（4 名）で一冊のブックレットを作成する活動などを行いました。いずれの学習者も、ブラジルのサンパウロ大学からの交換留学生で、上級レベルの「書く」活動をメインとした授業であるため、文章を推敲する際や、構成を考える際には母語であるポルトガル語の使用を認めていました。内容を考える際には、まず母語で全体像を組み立ててから学習言語で執筆する方が、質の高い文章を作成しやすいからです。クラスはオンラインによる授業で、学習者が作成した文章を事前に教師が添削し、その訂正部分や、学習者による共通した誤用などを授業で確認するという流れで進めます。本クラス見学における実習生の立ち位置は「見学者」でした。学習者からアドバイスや意見を求

められた時のみ、個人としての見解を述べるようにしました。

文章中にみられる文法の誤用や、意味が伝わりづらい部分については、教師が一方的に訂正を加えるのではなく、学習者と意味や意図を確認しながら修正作業を行っていました。学習者は上級レベルであるため、文章化したい単語や自分の考えを口頭で補足しながら伝える補償ストラテジー能力が備わっていて、文章の修正作業は、日本語での会話練習にもなっています。また、オンライン画面上で「パワーポイントを使ったマインドマップ」を作成するなどの工夫がされていました。共有画面を全員同時に閲覧できる点は、オンラインの強みを生かしているといえます。さらに、一人の学習者の文章を修正する様子についても、画面共有で見ることができるため、そこから自身の学びを得ることもできるとオンラインならではの長所を活用していました。

5. 授業見学のふりかえり

協定大学の授業見学・参加が終了した後、授業の中でグループに分かれ、一人一人の気づきをシェアしながら話し合いました。自分が参加しなかったクラスの特徴や雰囲気も知ることができ、授業の方法にはさまざまなバリエーションがあるということを知ることができました。

何人もの先生の授業を見学させていただき、それぞれの先生がどうやって授業を作っているのか、またどうやって学習者の方と関わっているのかを実際に見ることができた。石川先生の授業では実習を行わせていただき、自分で授業を作ったことで見学の時では気がつかなかった部分にも目を向けることができた。ディスカッション中では、「初級クラスでは選択肢を与えていた」や「学習者同士の助け合いが見られた」など自分では見られなかった部分もシェアしてもらえてよかった。(高木)

自分が会話クラスあるいは中上級レベルの学習者が参加するクラスばかりに参加していたため、まずはブレイクアウトセッションで学習者の発話機会を確保してから全体共有、という流れが基本だと思い込んでいた。だが、初級の文法クラスなどでは、常に全体グループで進行し、教師がリードしていく形の方が、正しい文法を身につけるという面でも、学習者の日本語レベルでも教室が成立するという面でも有効であることに気づけた。(清水)

協定大学の振り返りでは、さまざまな工夫を知ることができた。Zoom のチャット機能や Google Document を活用した板書方法、ブレイクアウトセッションの機能を活用したグループワークや少人数の会話というのはオンラインでの授業ならではの方法だった。教師が学習者に関わる際、名指しで指名し、学習者に均等に発言の機会を与えるというのは多くの授業で取り入れられているということがわかった。この方法は学習者をひとくくりとして考えるのではなく、一人ひとりとして捉えることで、学習者が話しやすく参加しやすい雰囲気を作ることにつながっていると分かった。会話のトピックや学習者の問いかけについても、学習者の関心のある内容や、正解のない意見を取り上げることで、積極的に授業に取り組むことができると分かった。(吉野)

6. 感想

オンライン授業の強みを生かし、前向きに授業に取り組む姿勢が大切だと感じた。今年は例年通りの授業活動ができなかったクラスも多いと思うが、逆に新たな試みや工夫を行う良いきっかけになったと思います。私は、オンライン授業における画面共有の可能性の高さに気付かされました。一人の学習者による発言内容や、文法の訂正場面などを、クラスの全員で共有することができるため、指導もしやすくなると考えます。現在のこの状況を、うまく好転できるような工夫がさまざまな場面で垣間見ることができ、大変勉強になりました。(花井)

協定大学の授業見学・参加をし、実習生同士で意見交換したことで、多方面からの気づきがありました。運営上の工夫としては、オンラインならではのルームやチャット機能での運営、ゴールを明確にすることで見通しを立てることが分かりました。教師と学習者とのかかわりとしては、話しやすい雰囲気づくりや学習者を「一人の人」として見て一人一人とコミュニケーションを取っている姿が印象的でした。また、学習者は興味のある話題や自分の誤用について積極的になる傾向があることが分かりました。これから、自分が教師となって関わる時は、ここで学んだことを活かしていきたいです。(稲垣)

協定大学の授業見学・参加を通して、留学生と関わっていく中で、多くのことを学ぶことができました。オンライン授業ということで、チャットや画面共有の活用の仕方など、この時期ならではのスキルはもちろんのこと、日本語教師としての授業構成の工夫や学習者との関わり方などさまざまなことを学ぶことのできた時間でした。具体的には、話しやすい雰囲気を作るために学習者の興味のあるトピックを選ぶようにしたり、説明がわからない時には具体例を出しながら補足したりするなどです。この機会に得たことを忘れず、将来教師として関わる時には活かしていきたいです。(若山)

今回の協定大学の授業見学・参加を通してオンライン形式の授業の可能性に気づけました。チャットや、ルーム機能、画面共有などオンラインだからこそできる機能や、海外からリアルタイムで参加できるという点は今後コロナが収まってからも生かせるのではないかと思います。発言回数を平等にしたり、授業の前に学習者と会話をし、言葉をわかりやすく言い換えるなど、学習者が学びやすい雰囲気作りや、学習者とのコミュニケーションの取り方などを学ぶことができました。今後、自分が教える立場に立った際には今回の活動を通して学んだことを活かしたいと思います。(鈴木)

7. TNN 日本語ボランティア研修

吉田夕華・吉野愛菜

私たち実習生は、東海日本語ネットワーク（TNN）主催の「TNN 日本語ボランティア研修」、TNN と公益財団法人名古屋国際センター（NIC）主催の「TNN 日本語ボランティアシンポジウム」に参加しました。

東海日本語ネットワークとは、東海地域（愛知県、岐阜県、三重県、静岡県）に在住する外国人の日本語の学習を支援している個人、団体による情報交換、共同学習を促進するための連絡組織であり、主に東海地域でボランティア活動をしている個人や団体によって構成されています。今年度は、研修・シンポジウムともに新型コロナウイルスの影響により、ウェブ会議ツール「Zoom」を用いての開催となりました。以下、日本語ボランティア研修・日本語ボランティアシンポジウムの順に紹介します。

1. TNN 日本語ボランティア研修～開かれた地域社会を目指して～

私たち実習生は、9月12日、10月10日の計2回、TNN 日本語ボランティア研修のお話を聞く会に参加しました。

9月12日 第5回お話を聞く会「入管の中の受入環境調整担当官」

名古屋出入国在留管理局で受入調整担当官として活躍されている川上さんより、名古屋入管で行われている取り組みや在留資格の種類、在留カード、新型コロナウイルス感染症による出入国手続きの変更についてのお話を聞きました。川上さんは「受入調整担当官」として、地方公共団体との窓口となって外国の方を支援する団体との交流や自治体の情報提供を行い、日本に住む外国人との共生社会の推進を行っています。お話を聞いて、これまでなんとなく聞いたことのあった「在留カード」は来日された外国人にとってとても大切なものであるということがよくわかりました。付与されたカードの基準を満たす生活をしなければならないという点においては、長期で滞在する人ほど正しい知識を持っていることが重要であると感じます。そのため、川上さんの行っている、外国人を身近でサポートする幅広い立場の人に対して、入管にまつわる知識の周知を図る活動は大切だと思いました。そして港区にある名古屋入管の本局では災害時の情報や自治体ごとの情報提供が多言語で行われるなどの工夫がされていると知りました。川上さんの「正解はないけれど、どのように工夫すればよいのかは日々模索している」という言葉にも表れているように、常に相手の立場に立って支援内容や方法を工夫することの大切さを学ぶことができました。（吉野）

10月10日 第6回お話を聞く会「新しい生活様式での多文化共生コミュニティ」

公益社団法人トレイディングケアの設立者であり、日本に住む外国人と地域の人々との交流に尽力されてきた新美純子さんより、新美さんが今までやってこられた活動の一部を紹介していただき、多文化共生について考えていきました。

元々看護師として働いていた新美さんは、外国人の患者との意思疎通に苦労した経験から、初めて外国の人との関わりを持ちました。その後、経済連携協定外国人看護師候補者のサポートを行うことで多文化共生活動に興味を持ち始めました。さらに外国人技能実習生との出会いを通して、外国の介護人材を日本で正しく受け入れたいと考えトレイディングケアを設立しました。以降、外国人と地域住民との交流活動を行ってきましたが、昨今の新型コロナウイルス感染拡大により、これまでのような活動ができなくなってしまったことから、今後の多文化共生のあり方として、ディスタンスを保ちながらも、外国の人に一步寄り添う姿勢が大切であるとおっしゃっていました。

お話を聞き、改めて日本に住む外国人への支援が日本語を教えることだけではないと感じました。日本語教師ではなくても、全然関係ない仕事をしていたとしても、多文化共生のために自分にできることがあるのではないかと思います。「トライ＆エラー やらないことは選択肢にない。」という新美さんの言葉がとても心に響いたので、この言葉を忘れずにこれからさまざまなことに挑戦していきたいです。(吉田)

2. 12月5日 TNN 日本語ボランティアシンポジウム2020

日本語でつながろう！ ～今、私たちにできること～

私たち実習生は12月5日に行われたTNN日本語ボランティアシンポジウム2020に参加しました。新型コロナウイルス感染症の拡大により、地域の日本語教室が新たな形態での実施を求められている中で、日本語学習の機会を持つことのできない外国人に対し、日本語ボランティアができることを事例紹介や、交流会を通じて考えました。本報告書では、事例紹介とオンライン交流会について紹介します。

事例紹介：日本語学習の機会を拡げる工夫

①「子育てを通して学ぶ日本語」 大塚ますみ氏（江南市国際交流協会 ふくらの家）

江南市国際交流協会の事例紹介では、市内に住む外国人の中でも、「ママ目線」での支援・対応を行う「多文化子育てサロン」についてのお話を聞きました。この活動では、さまざまなイベントを通じ、日本人親子と外国人親子が国籍に関わらず子育てを楽しむ場所を提供しています。さらに行政や他機関との連携事業を通じて、子育てにまつわる多くの情報を共有する機会が豊富に設けられていると感じました。特に印象に残ったのは「赤ちゃんふれあい体験」という地域の中学生との交流会です。この体験に参加している中学生の中には、これまで江南市国際交流協会の活動に参加していた、外国にルーツを持つ子どもたちもおり、多文化紙芝居を日本語と母語を使い行ったそうです。このように外国にルーツを持つ子どもたちが日本の学校でのびのびと生活している様子が乳幼児を育てる外国人の親に伝わることで、今後も安心して江南市で子育てを行

うことにつながるのだと思いました。コロナ禍においてはオンラインでのビデオ通話を活用し、安心して参加できる機会を提供しているとのことでしたが、実際に施設に足を運んだり、体験を行ったりするイベントが充実している活動だと感じたため、1日でも早くこれまで通りの活動形態に戻ることができるようお願いしたいと思います。(吉野)

②「日本語を学んだことのない定住者への学びの機会創出」 松田章子氏(NPO 法人トルシーダ)

愛知県豊田市にある保見団地は外国人の方(特に南米出身者)が多く住む住宅団地で、中にはスーパーマーケットやジムなどがあり、そこでの表示はポルトガル語であるため、日本語ができなくても十分生活できてしまうほどです。ただそのせいで日本語を勉強したことがなかったり、地域の日本語教室へ行くことに不安を抱えている方が多くいました。そんな方たちのため、トルシーダは週2回日本語教室の開催を始め、簡単な履歴書の作成やカタカナの練習など学習者に合わせたサポートを行っています。教室では「日本語が話せないのは恥ずかしいことではない」雰囲気作りを心がけていることを知り、私たち実習生も実習でさまざまな日本語学習者の方と会話活動を行う中で、話しやすい雰囲気作りがいかに大切であるかを実感していたため、実習での学びが実際の現場で生きてくることに改めて気づきました。また学習者のニーズに応えるため、教室の朝7時開催という前例のないことに取り組むほど学習者の方たちのことを熱心に考えるボランティアの方々の姿に感動しました。このように地域日本語教室ならではの良さである、地域にあった日本語教育の提供を実践している素敵な教室のひとつがトルシーダの日本語教室です。(吉田)

③「オンラインでの対話型活動」 田中琢問氏(一般社団法人磐田国際交流協会)

静岡県磐田市にある LaLa 日本語教室は「ららぽーと磐田」というショッピングモールの中にあり、施設内の店舗や総合案内所と連携した実践的な学習ができることが特徴です。2020年6月からはコロナウイルスの影響で Zoom を使ったオンライン教室も開催されています。オンラインでは、進行役の他にブレイクアウトルームに分けるなどの操作を行う TS(テクニカルサポーター)を設置したりなど、対面に比べてより多くのボランティアが必要となるため大変ではあるものの、遠くに住んでいて物理的に来られない人も参加が可能であったり、オンラインに慣れた若者の参加率が上がったりなど、オンラインならではの良さも発見出来たそうです。

お話を聞き、まずショッピングモールの中というありそうでなかった教室の形に衝撃を受けました。しかしすぐに実践ができる点はもちろん、お買い物ついでに気軽に参加できるなど利点が多くて良いと思いました。またオンラインでの活動について、私たち自身もこの1年間オンラインで授業を受けてきて、オンラインだからこそできることがたくさんあると分かったため、今後コロナウイルスが収束したとしても、オンラインと対面それぞれの良さを活かした授業や活動が当たり前になるようになると良いと思いました。(吉田)

オンライン交流会：今、私たちにできること

シンポジウムの最後には、オンライン参加者が Zoom のグループセッション機能を活用し、1グループ4人程度で、「コロナ禍の今、私たちにできること」と題して交流を行いました。私のグル

ープには名古屋市、幸田町で日本語教室ボランティアとして活動されている方々がいらっしゃいました。交流会ではそれぞれの教室の現状について、私自身は日本語教育実習の活動内容について話をし、さまざまな情報交換を行いました。コロナ禍において、全ての教室でオンラインツールを導入していることがわかりましたが、学習者のインターネット使用状況の把握が困難であったり、高齢のボランティアの方が使用方法に戸惑ってしまったりしているという話が多く出ました。しかし、ある教室の方はコロナ禍初期の段階で、やむを得ず日本語教室がお休みになってしまっていた時期を活用し、ボランティア同士でオンライン導入に伴う研修会を行ったことで、スムーズにオンライン化を進めることができたという経験を話してくださいました。新型コロナウイルスの影響でこれまでとは異なる形態での教室運営が求められる中で、まずは丁寧に準備を整えることの大切さを学ぶことができました。このような交流会の場を通じて、地域ごとに異なる現状や課題点を共有し、他の事例から効果的な解決策を取り入れることができると強く感じました。(吉野)

8. 子どもの日本語教育

原優花・菊本悠未

1. 授業概要

松本一子先生(2020年12月9日)

松本一子先生の授業では、外国にルーツを持つ子どもたちのさまざまな現状について教わりました。外国人の在留資格のうち、永住者が増えている今、日本生まれの子どもも増加しており、日本語指導が必要なのは"外国籍"の子どもだけとは限りません。そのことに加え、就学前の子どもたちに対する支援の必要性や、国による教育制度や学校文化の違い、母語教育の重要性といった多様な切り口から、国のさまざまな受け入れ施策や、愛知県・市・町のさまざまな取り組みについて学びました。

川崎直子先生(2020年12月16日)

川崎直子先生の授業は、子どもの日本語教育の中でも特に「困り感」のある子どもの日本語教育を中心とした内容でした。まず始めに、日本語指導が必要な児童生徒の現状について学びました。次に、「困り感」がある子どもに対する日本語指導についての講義があり、それを踏まえて教材「たんけんたいすごろく」を用いた授業の運営方法についてグループディスカッションを通して考えました。その際、すごろくという道具を使う授業を「遊びではない」とどう意識させるかや、ファシリテーターという役割をどう活かすかなどさまざまな点について議論しました。

2. グループディスカッションで話したこと(2020年12月16日)

教材「すごろくたんけんたい」を用いた授業活動についてアイデアを話し合いました。

①ルール説明の仕方

事前に講義の中で、「走らない」→「歩きます」といった否定のワードを使わないほうが良いと聞いていたため、そこを意識しました。また、遊びではなく学習であるということをどう伝えるか、という話もあったため「言葉を探します」や「考えます」などといった学習に使うような言葉を使って説明するように考えました。

②「おたすけカード」のルールとその説明方法

ルールについては、勝手に一回しか使えないものだと思います、そのように決めました。今考えれば、一度しか使えないのは厳しすぎると感じます。説明方法では、日本語指導が必要な小学生でもわかりやすい表現を考えることにかなり苦戦しました。特に、おたすけカードを使って助けてもらう相手を「指名する」と言いたいところをどう言い換えるかや、「助けてあげる」「助けてもらう」などのやりもらい文を使うべきか否かなど、細かい部分の調整が難航しました。時間も限

りがあったので、想像以上に難しかったです。

③「テーブルファシリテーター」の役割

このテーマについては、筆者二人のいずれの班も議題に選びませんでした。テーブルファシリテーターという役割自体をその時初めて知ったので、答えを出すのが最も難しいテーマだと考えた結果だと思います。

④ゴールの際のルールをどうするか

ゴールの前のマスには必ず止まって、そのマスの問題に答える（計算問題など）や、例えば「偶数」の目がでたらゴールなどといったルールを考えました。最後のマス目が繰り返して止まってしまうため、対策として例えば付箋のようにしてマスに書いてある問題を変えていくことや、そのマスは、別にトランプの山のようなものを用意してそこから一枚引いたお題を答えるなどの案ができました。

3. 授業を通しての感想

松本先生の授業では、日本語指導が必要な児童生徒やその家族をとりまくさまざまな問題についてのお話を伺いましたが、初めて知る事が多く驚きました。私は保育園の頃からクラスに何人も外国にルーツを持つ児童生徒がたくさんいるのが当たり前の環境で育ったにも関わらず、学校の制度の違いで困る人が多くいる事や、家族の中での共通言語がなくなってしまうという問題が起きている事などは講義を聞くまで知りませんでした。こういった事実を教育の現場で働く教員や日本で育った日本語母語話者である生徒児童が想像するのはきわめて難しいと思うので、もっと周知する必要があると感じました。

川崎先生の授業では、「困り感のある」児童生徒について話を伺いましたが、そのような視点から切り込んで日本語教育を考える機会は初めてだったので、考えさせられることが本当に多かったです。特に衝撃を受けたのは、「困り感のある」児童生徒と出会ったとき、その原因が日本語能力にあるか発達に問題があるかといった判断をしなくていいし、する必要がないとする考え方で。なにが原因かよりも、話しやすい雰囲気づくりをはじめとした、目の前の児童生徒のための取り組みをしていく事が大切だと学んだし、それは日本語教育に限らずさまざまな活動で活かせる、活かすべき考え方だと感じました。

どちらの授業も新しい発見ばかりで、大変実りあるものでした。（原）

松本先生の授業では、子どもの日本語教育の現状について深いお話を聞くことができました。その中で、「外国にルーツを持つ子ども」という単語が特に印象に残っています。単に「外国籍の子ども」と一言で言い表せない、いろいろな立場の子どもに日本語指導が必要であり、その子どもたちが抱えている問題もそれぞれであるとわかりました。また、生活言語が不十分な児童だけではなく、学習言語にも考慮が及ぶようになっていたり、単純な児童数の増加など、どんどん日本語指導がより求められるようになっていきます。日本語指導担当教員の上限を増やすことや、下学年への受け入れなど、さまざまな新しい施策が生み出され、問題に対応していく一方で、日本語が

できないと入学を断ってしまう事例も未だにあると聞きました。施策だけではなく、現場に情報がいきわたること、対応ができるだけの人員の確保など、実際の現場にどう働きかけていくのが今後の課題だと感じました。

川崎先生の授業では、「子どもの日本語教育」に関してより現場の様子について深く知ることができました。以前、外国人児童に障がい者が多いと聞いたことがあります。私はその話を聞いたとき、判断が難しいけれどもその判断が重要なのだと思っていましたが、先生が区別をつける必要がないとおっしゃったことが目から鱗で、とても印象に残っています。判断が重要なのではなく、その子どもが抱えている「困り感」を推理して、その子どもにあった支援をすることが重要という話は、日本語教育に限らず、どの教育現場にも通じる考えだと思いました。また、活動の一環で、先生が使用している「すごろくたんけんたい」の内容をグループワークで考えました。使う際の説明の仕方や、すごろくのマスに何を入れるかなど、その一つ一つに配慮があることがわかりました。これまで教材を手にとって深く考える機会があまりなかったのですが、授業の計画をたてるにあたり教材を知することは重要なことであると思ったため、良い経験をすることができました。

子どもの教育についてはもともと関心がある分野でしたが、二人の先生の貴重な話を聞く体験ができてとても良かったです。(菊本)

9. ジェンダーと日本語教育

小林明日香・宮本笑莉

1. 活動概要

12月23日の授業では、トロント大学東アジア学科准教授で日本語教育に携わる有森丈太郎先生のご指導のもと、性の多様性を踏まえた日本語教育に関する活動を行いました。日本語教育の場では、教員養成課程ではあまり扱うことのない様々な問題に直面することがあり、そのような問題についての考えや理解を深めるために、有森先生をはじめとした現役教師の方々が実際に経験した事例を集めた教材の作成が行われています。23日の授業では、その中の「性の多様性を踏まえた日本語教育」を使用し、ジェンダーやセクシュアリティの観点から多様な学習者との向き合い方について考えました。実習生は日本語の男女差に関するケースを読み、事前にセクシュアリティやジェンダーと日本語の関連に関する課題に取り組んだ上で、授業内でグループディスカッションと全体での共有、そして授業後の課題を通じてインクルーシブな日本語教育についての理解を深めました。(宮本)

2. 事前課題での取り組み

授業前の事前課題として、まず、自称詞、性別と言葉遣いの関係、教科書や教材の中で違和感を抱いた表現や設問という3つについて考えました。その後、実際に問題が起こった日本語の男女差に関するケースを読み、ケースの登場人物の考えや問題が生じた原因について考えた上で、日本語の男女差の取り上げ方、性的マイノリティに対するイメージ、性的マイノリティへの学習上の配慮、性別にふさわしい自称詞や話し方などについて考えました。

使用したケースは、留学生を対象とした中級日本語のクラスにおいて、男性語・女性語を扱った学生のプレゼンテーションの中での「オネエ言葉」に関する話題で笑いが起こったことで、他の学生から、LGBTをバカにしているような感じがした、日本語は男性と女性で話し方が違って大変、といった意見が挙がり、教師が日本語の男女差の教え方に悩むというものでした。このケースを読みながら、私だけでなく多くの実習生が、これまでの実習では扱われなかった日本語の男女差そのものの難しさと、それを多様な学習者に教えることの難しさを感じたと思います。授業前の事前課題ではありましたが、性の多様性という観点からの日本語教育について、実習生それぞれが非常に多くのことを考えることができました。(宮本)

3. グループディスカッション

グループディスカッションでは6つの質問があり、グループごとに話し合いたいテーマを決めてディスカッションを行いました。私のグループではまず初めに性的マイノリティに対するイメージについて話し合いました。グループメンバーは身近に性的マイノリティの方がいないため、

テレビで活躍するオネエタレントを思い浮かべる人が多かったです。そのため元気で生き生きとしたイメージを持っているという意見が出ました。しかし一方で、就職活動の場面で差別的な対応をされた性的マイノリティの方がいるという話や、自分自身が笑いを取るために意図的に女言葉を使ったことがあるという話もでて、自分たちが意識していないだけで偏見を持ってしまっているのではないかと気づかされました。さらに偏見や差別をしているつもりはないが、尊重した言動がどのようなものか明確に思い浮かべることは困難だという意見もありました。

次に日本語の男女差を授業でどのように扱うべきかについてディスカッションをしました。その中で様々な用法を選択肢として提示し、どれを使うかは学習者にゆだねるのが良いという意見が出ました。しかし一步間違えると誇張されたステレオタイプや偏見を生み出しかねないため、扱いには十分な配慮が必要です。ただし学習者のレベルによっては伝え方の難易度が異なるため、初級学習者においてはある程度画一的な伝え方になってしまっても仕方がないのではという意見もありました。しかしその際も学習者が感じる違和感には十分配慮しなければならないという結論になりました。(小林)

4. 事後課題での取り組み

授業後、有森先生から性の多様性と日本語教育における問題、インクルーシブな学習環境についての解説資料をいただきました。それを読んだ上で、授業内で話し合った内容について自分自身でもう一度考えを深め、インクルーシブな学習環境のために何が重要なのか自分の意見をまとめました。解説資料の中で最も印象に残ったのは女ことば・男ことばを、女性が使う言葉、男性が使う言葉として考えるのではなく、アイデンティティを表現するための手段として扱うということです。多くの人が性的マイノリティの方々が社会に存在すると認識していながらも、日常生活においてはその存在を忘れ、性別は男女の2つしかないと思わせてしまうような場面が多々存在します。性を含めたアイデンティティは顕在化しにくいものが多く、本人が表明しない限り気づくのが難しいことが多いです。しかしそこに甘えるのではなく、常に自分の考えや経験、価値観とは異なる人々と共存していることを意識する必要があると思います。それによってどのような言葉遣いをしている、それをマイナスイメージと結び付けることなく、その人のアイデンティティとして扱っていける社会になるのではないのでしょうか。

また学習者を思うが故に、社会規範としての言葉遣いを押し付けてしまう可能性があるとも書かれていましたが、変わらなければいけないのは学習者ではなく、日本社会全体であるため、教師は日本の未来も視野に入れてこれらの項目を扱うべきだと感じました。(小林)

5. おわりに -授業を通して学んだこと・発見したこと-

この授業を通して、性的マイノリティの方を始め自分の周りにはない意見や感性、経験を持った方についてはイメージをしづらいたということがよくわかりました。しかしその想像力不足で知らぬ間に人を傷つけ、差別してしまっている可能性にも気づかされました。日本語学習の場においても、ジェンダー・民族・家庭環境など様々な背景を持った人が一緒に学習している、ということを常に念頭に置く必要があると再認識しました。特に日本語においては女ことば・男ことばと

呼ばれる言葉遣いを始め、様々な言語使用に多様なイメージが結びついています。そして時にそれは社会規範においても重要な役割を担っており、人間関係や社会で生きていく上でプラスやマイナスの作用を働かせるものもあるでしょう。しかし言葉はアイデンティティの1つであり、その人個人を表す重要なものです。そのため私は社会規範よりも一人ひとりのアイデンティティや個性を尊重することの方が重要だと思いました。もちろん知識としてイメージや使用場面、使用頻度を伝えることは大切だと思いますが、最終的に学習者が自分自身で選択できるような発信の仕方が教師には求められると思います。また私自身もこれからの生活において、常に自分以外の人を理解する努力をしていかなければならないと考えさせられました。(小林)

実習や日本語教育関連の授業の中で触れたことがなく、自分自身もあまり深く考えたことがなかった日本語の性差とそれがもたらし得る問題について知り、考えることや学ぶことが非常に多くありました。グループで性的マイノリティについて考えた際に、自分は偏見はない、理解があると思いながらも、どこかで自分とは違うという線引きをしまっている部分や知識や理解が足りていない部分があることを認識できたことは、私にとって非常に大きな学びであり、インクルーシブな日本語教育についての考えを深めることにつながりました。また、非常に印象的だったのは、性別にふさわしい話し方を教えるのではなく、あくまでも学習者に選択肢を与えるべきだという先生方のご意見でした。ジェンダーに限らず、全ての話題において学習者に選択する権利を与えることは非常に重要なことであると感じました。

活動を通じて、ジェンダーやセクシュアリティだけでなく人種や信仰など様々な点においてマイノリティの立場に置かれる学習者の存在と、そういった人々を日本語教育の場で取り残さないためのインクルーシブな教育の必要性を強く認識することができました。私自身も、家庭環境がいわゆる普通の家庭と言われるものではなく、家族に関することを授業で扱う際に嫌な思いや肩身の狭い思いをすることが何度もあり、そうした嫌な記憶は今でも鮮明に残っています。こうした自分の経験からも、多様な背景を持つ全ての学習者が平等に積極的に参加できるような教室活動の設計は非常に重要であると強く感じました。(宮本)

Ⅱ 地域日本語教室調査プロジェクト

前期最終のテーマ「地域における日本語学習支援」に関する講義を経て、実習生は各自が調査対象とする日本語教室を選び、プレ調査を実施しました。その後、それぞれが夏休み期間を利用して調査、発表準備をしました。発表資料作成にあたり米勢講師のアドバイスも受けました。10月の授業を「地域日本語教室調査発表会」とし、調査対象となった教室や従来実習先としていた長久手市の教室のボランティアなど地域日本語教育に関わる方にも、参観していただきました。3回にわたる発表会では、調査内容を発表し質疑応答を行いました。発表会にとどまらず、さらに実習生間では、オンラインツール Teams を用いて、積極的に意見交換や質疑応答を行いました。

ここでは、発表会のプレゼンテーション資料を用い、調査対象とした教室について、実習生が紹介します。

黒川日本語教室（名古屋市北区）

吉田夕華

1. 調査について

この調査は、9月16日にコロナウイルス感染防止の観点から電話で行いました。調査に協力してくださったのは、ボランティア歴16年の田口さんです。

1. 調査について

- ・日時: 9月16日(水)
- ・方法: 電話
- ・相手: 田口さん(ボランティア歴16年)



2. 教室の成り立ち

黒川日本語教室は1986年に中国残留孤児に対する日本語教育を目的に開始されました。教室運営は政府（愛知県）の援助資金によりなされていたのですが、年々孤児の数が減少したことにより、2009年以降は援助打ち切りに、2011年3月末にはいったん教室は終了しました。以降は学習対象者を日本語を母語としない方にも広げ、新たな教室として再スタートしました。現在も県からの援助はなく、学習者から集める学習費で備品や教材などの費用をまかなっています。

2. 教室の成り立ち

- ・1986年、中国残留孤児に対する日本語教育を目的に開始。
- ・教室運営は愛知県の援助資金によりなされてきた。
- ・年々孤児の数が減少し、2009年以降は援助打ち切り。
- ・2011年3月末でいったん終了。
- ・以降は学習対象者を日本語を母語としない方にも広げ、新たな教室として再スタート。
- ◎現在、県からの援助はなし
学習者から集める学習費でまかなっている



3. 基本情報

場所は地下鉄名城線黒川駅から徒歩5分の名古屋市総合社会福祉会館、時間は毎週木曜18:30～20:15です。1年を前期と後期に分け、それぞれ計20回ずつ授業が行われています。学習費としてテキスト代とは別に1回250円が必要です。テキストは『みんなの日本語Ⅰ』、『みんなの日本語Ⅱ』が使用されています。

3. 基本情報

- ・場所: 名古屋市総合社会福祉会館
(地下鉄名城線 黒川駅より徒歩5分)
- ・日時: 毎週木曜18:30～20:15
- ・時期: 前期(4～9月)20回/後期(10～3月)20回
- ・学習費: 1回250円(テキスト代別)
- ・テキスト: 『みんなの日本語Ⅰ』
『みんなの日本語Ⅱ』



4. 学習者について

学習者は全部で26人、30代前後の比較的若い方が多いです。特徴としては会社勤めの方や日本人の配偶者の他、中学生の方もいます。国籍は多い順にベトナム、中国、ネパールで、その他韓国、フランス、アメリカなど様々な国からの学習者が一緒に学んでいます。

4. 学習者について

- ・人数:26人
- ・年齢層:30代前後の比較的若い人が多い
(中国残留孤児時代は年配の人が多かった)
- ・特徴:会社勤めの方、日本人の配偶者、中学生
- ・国籍(多い順):ベトナム、中国(孤児の関係)、ネパール
その他...韓国、フランス、アメリカなど



5. ボランティアについて

ボランティアは全部で30人ですが、のうち現在活動しているのは21人で、40～60代の年配の方が多いです。特徴としては現職で日本語学校で働いている方は少なく、全く関係のない仕事をしている人がほとんどで、中には教授経験が全くない方も数人います。日本語教師養成講座は約半数の方が受講済みです。

5. ボランティアについて

- ・人数:30人(このうち現在活動中の人は21人)
- ・年齢層:40～60代の年配の人が多い
- ・特徴:現職で日本語学校で働いている人は少ない
全く関係ない仕事をしている人が多い
全く経験のない人も数人
- ・日本語教師養成講座:約半数が受講済み



6. クラス分けの方法

まず、面接と『みんなの日本語』のテキストをどこまで進めたかをもとに言語レベルを見極めます。次にそのレベルに合うと思われるクラスを見学した後、正式にクラスを決定します。

6. クラス分けの方法

面接＆『みんなの日本語』をどこまでやったか



↓
見学
↓
クラス決定(*^_^*)



<http://kurokawa2015.webcrow.jp/>

7. 授業について

1クラスの人数は学習者が3～10人、ボランティアが2人です。ボランティアのうち、1人はベテラン、もう1人は新人という組み合わせになっており、新人はベテランを見て学び、いずれ1人立ちできるように工夫しています。

7. 授業について

- ・人数(1クラス)
 - 学習者: 3～10人
 - ボランティア: 2人(ベテラン1人、新人1人)
 - 新人はベテランを見て学び、いずれ1人立ちできるようにする



8. クラスについて

クラスはレベルによって4つに分かれています。中級クラスは『みんなの日本語Ⅱ』を終了した人向けで、学習者同士の会話が中心になっています。初級クラスは『みんなの日本語』を使って文型の学習や会話の練習をする講義形式の授業です。入門ではひらがなやカタカナの読み書きを習います。読み書きクラスは話せるが読み書きができない人向けに最近開設されました。

8. クラスについて

クラス(クラス数)	内容
中級(1)	Ⅱ終了した人向け 資料やテーマは準備するが、授業は学習者同士の会話中心
初級(4)	I、Ⅱを使って文型の学習、会話の練習 ボランティアが前に立って授業を行う講義形式
入門(1)	ひらがな、カタカナの読み書き
読み書き(1)	話せるが読み書きができない人向け 最近開設

9. コロナ渦における現状

4月の緊急事態宣言後、6月11日より教室が再開されました。以降対面の授業を行いつつも、人数の多いクラスは大きめの教室を使用したり、マスクの着用や消毒など、新型コロナウイルス感染防止対策をしています。オンライン授業については、ボランティアのみの運営では通信環境の整備などの問題があり、難しいため行っていません。

9. コロナ渦における現状

- ・6月11日より授業再開
- ・人数の多いクラスは大きめの教室使用
- ・オンライン授業については、ボランティアのみでの運営では、通信環境の整備などの問題があり難しいため行っていません



あいち国際プラザにほんご教室(名古屋市中区)

清水優花

1. 名古屋市に住む外国人住民⁵

2019年12月31日現在、名古屋市に住む外国人住民数は88,114人で、全市民の3.78%を占めています。この数は愛知県全体の外国人住民数の32%に相当し、第1位です。中でも、伏見・栄・市役所エリアを含む中区在住者が最多で、名古屋市の外国人住民数の12%を占めます。

2. あいち国際プラザにほんご教室⁶について

あいち国際プラザにほんご教室（以下教室）は、名古屋市中区の「あいち国際プラザ」で活動する日本語教室です。1999年に発足しました。地下鉄名城線「市役所」駅から徒歩5分という好立地で、周囲には名古屋市役所や愛知県庁、名古屋城などがあります。週5クラス運営されており、各90分、3か月1タームの3期制です。参加費は通常1期につき10回で2,000円（前納）ですが、新型コロナウイルスの影響により、2020年度第2期（10月-12月）は8回で1,600円となっています。なお、2021年2月時点で第3期（1月-3月）は中止されています。

<開催曜日と時間>

- ・火（午後）：13:30-15:00
- ・金（午後）：13:30-15:00
- ・金（夜）：19:00-20:30
- ・土（午前）：10:30-12:00
- ・土（午後）：14:00-15:30



教室（筆者撮影） 活動中は、机を組み合わせて使い、感染対策の亚克力板（奥）を置きます。

⁵ 「愛知県内の市町村における外国人住民数の状況」

<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/gaikokuzinjuminsu-2019-12.html>

「名古屋市外国人住民統計」

<http://www.city.nagoya.jp/kankobunkakoryu/page/0000080856.html>

⁶ 「あいち国際プラザにほんご教室」

<http://www2.aia.pref.aichi.jp/koryu/j/kyoshitsu/main.html>

未経験の方が語学ボランティア（以下ボランティア）として活動に参加するには、国際交流協会主催の「日本語ボランティア入門講座（以下入門講座）」を修了しなければなりません。2020年度は、10月から11月の毎週木曜 13:00-16:00 に開催され、受講料は全9回で5,000円でした。

①ボランティア未経験あるいは初心者（1年未満程度）、②全回受講可能、③県内に在住・在勤・在学かつ満20歳以上、④受講後、活動意思がある、⑤WEB対応が可能という5つの条件を全て満たす場合、受講できます。

また、経験を積んだボランティア向けに、「スキルアップ講座」も開催されています。

3. インタビュー概要

理解を深めるため、2020年9月16日、Zoomを使用して約30分のインタビューを実施しました。協力してくださったのは、教室の主催者である公共財団法人愛知県国際交流協会（以下協会）の小山豊三郎様です。あいち国際プラザで勤務し、ボランティア・学習者との連絡や、毎年の入門講座・スキルアップ講座のコーディネートなどを通して、教室運営をサポートされています。

4. 主なインタビュー結果

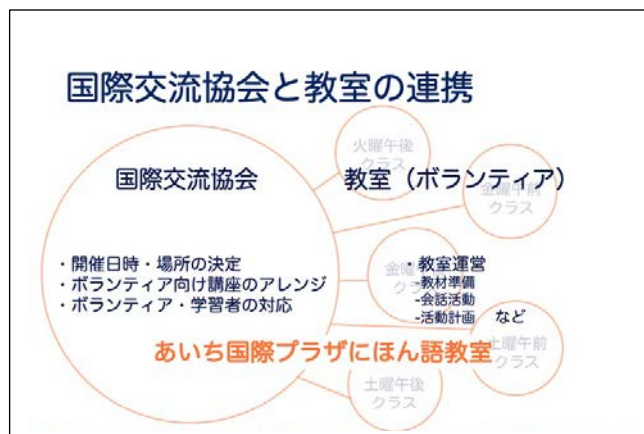
【学習者について】1期当たり全体で120~150人が所属しており、国籍も日本語レベルも経験も多様、初中級者が多めとのことでした。5~6割が2期以上に渡って継続するそうです。平日午後のクラスには駐在員の配偶者などが多く、平日夜や土曜のクラスには、働いている学習者も参加されるとのことです。名古屋国際センター（近隣の日本語教室）は活動日が日曜日のみのため、平日も参加したい学習者が2~3クラス、中には5クラス全て受講する場合もあるとのことでした。

【ボランティアについて】（インタビュー当時）55人所属されており、全員無償のボランティアでした。女性が圧倒的に多く、年齢層は定年後の方中心と比較的高めで、仕事との掛け持ちをされている方は少ないとのことです。入門講座で初めて日本語教育に触れる方もいれば、プロと呼べるレベルの経験を持つ方もいらっしゃるとのことでした。

【教室運営について】5つのクラスは独立しており、クラスによって活動内容は様々でした。ですが、共通して少人数あるいはマンツーマンで活動しているとのこと。共通テキストとして「みんなの日本語」を使用することが多いですが、相手（学習者）のレベルに合わせた教材を各ボランティアが準備されています。担当する学習者は各期で決めているそうですが、ボランティアの方が休むこともあるため、厳密ではないとのことでした。

【協会とボランティアの連携について】

日程や場所などはボランティアとの相談の上、教室の主催者である協会が決定するそうです。一方、どう教えるか、どのような教室を作るかは、ボランティアに一任されているとのことでした。ボランティアが教室運営、協会が周辺のサポートと、役割分担がなされていることが判明しました。



連携図（筆者作成）

以上から、基礎知識を蓄えた意欲あるボランティアの皆様と、国際交流協会の充実したサポートが、大規模かつ多様な教室運営を可能にしていることが分かりました。コロナ禍で見学こそ叶いませんでしたが、快くインタビューに応じてくださった小山様に、改めて御礼申し上げます。

NPO 法人名古屋ろう国際センター日本語教室(名古屋市千種区)

宮本笑莉

1. 教室概要

2011年にキム・ナムユンさんによって設立されたNPO法人名古屋ろう国際センターは、ろう者の支援を目的とした様々な事業を行っており、事業のうちの1つとしてろう者のための日本語教室を運営しています。活動は、名古屋市千種区振甫町で行われており、現在教室に参加している学習者は全員日本人のろう者です。教室は、基本的には毎週水曜日の夕方と土曜日の昼に開催されていますが、意欲のある学習者のために日曜日にも活動することがあります。受講料は週1回1時間で月に5,000円です。活動形態は、6人ほどの少人数グループでの活動を基本としており、希望する学習者に対してはマンツーマンでの活動も行っています。

1. 教室概要

<主催> NPO法人名古屋ろう国際センター(理事長キムさん)
<場所> 名古屋市千種区振甫町
<対象者> **日本人ろう者**
<日時> 水(夕)・土(昼)・日
<受講料・教材費> 週1回1時間 5,000円/月
<活動形態> 小人数グループ、マンツーマン

2. 調査概要

調査は2020年9月26日(土)13:30~16:00の教室の活動時間に行いました。当日、教室のある名古屋市千種区振甫町二丁目32番地ドルフ振甫南館102号に伺い、活動を見学させていただいた後、理事長であるキムさんと学習者6名、そしてボランティア1名にインタビューを行いました。

2. 調査概要

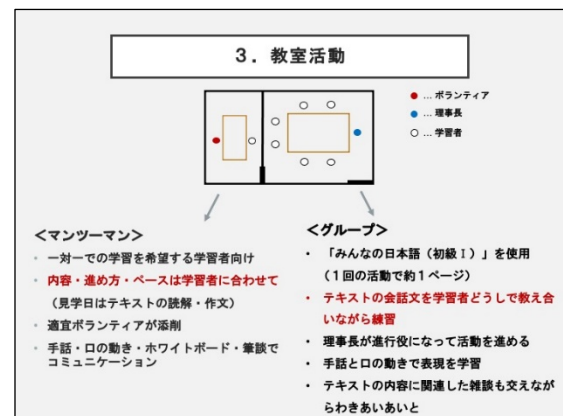
<調査日時>
2020年9月26日(土) 13:30~16:00
<調査場所>
名古屋市千種区振甫町二丁目32番地
ドルフ振甫南館102号
<調査方法>
①教室見学
②インタビュー(理事長、学習者、ボランティア)

3. 教室活動

教室活動は、小さな部屋でマンツーマン、大きな部屋でグループでの活動を行っていました。マンツーマンでの活動は、個別指導を希望する学習者に対して行っており、内容や進め方、進度など全て学習者に合わせて行う学習者中心のものでした。この日は、JLPTのテキストの読解と作文を行っており、適宜ボランティアが添削、指導を行っていました。学習者とボランティアが

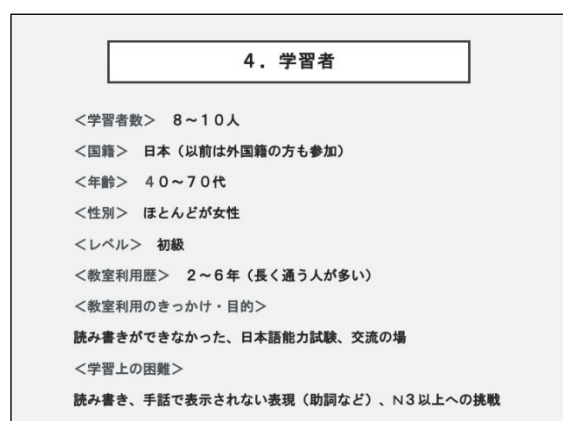
コミュニケーションを取る際には、主に手話と口の動きで意思の疎通を図り、必要に応じてホワイトボードと筆談が用いられています。

グループでの活動は、学習者 6 人と理事長が 1 つの机を囲い、「みんなの日本語（初級 I）」を使用した会話活動を行っていました。理事長が進行役となって活動を進めており、理事長がテキストの文章を解説した後、学習者どうしで会話練習を繰り返し行い、学習者どうしで教え合い助け合いながら会話を練習していました。1 回の活動でテキスト 1 ページ程度と、進度は決して速いとは言えませんが、一つ一つの内容を繰り返し練習し、着実に定着を図る様子が非常に印象的でした。グループでの活動においても、手話と口の動きで表現の細かいニュアンスや意味合いを伝えています。また、マンツーマンとは違い、テキストの内容に関連した雑談も交えながら終始わきあいあいとした雰囲気で行われていたことも印象に残っています。



4. 学習者について

教室に参加している学習者は 8～10 名で、現在は全員が日本人のろう者です。過去には外国人のろう者が参加していたこともあったそうです。年齢は 40～70 代と幅広く、8～9 割が女性の学習者です。レベルとしては、初級の内容を教室では扱っていますが、学習者のレベルは平均して初中級程度です。教室利用歴は 2 年から 6 年と長く通う学習者が多く、継続率が高いことが特徴であると言えます。教室利用に至った理由としては、日本語の読み書きができなかったことや、助詞がわからなかったこと、ろう者の友人に誘われたこと、JLPT の受験対策などが挙げられました。さらに、教室が大事な交流の場であるとおっしゃっていた方がおり、わからないことを教えあったり助けあったりすることで学習者どうしの仲が深まり、ろう者の学習者にとってこの教室が重要なコミュニティーの 1 つとなっていることがわかりました。また、学習している上で困難に感じることで、第一言語が手話であるためどうしても読み書きが難しい、手話レベルで表示されない助詞などの表現が難しい、N3 以上の合格が難しいといった意見が挙がりました。日本語を学習する上で、外国人の学習者にはない、文字を持たない手話を第一言語とするろう者特有の困難があることがわかりました。



5. ボランティアについて

現在 3 名のボランティアが教室に参加しており、この教室でのボランティア歴は平均 1 年前後と比較的歴が浅いです。長く活動されていた方が辞めるなど、最近になってからボランティアの方々の間で少し変動があったそうです。ろう者を対象とした名古屋ろう国際センターの日本語教室でボランティアをするための条件や資格は、特にないそうですが、やはり手話が少しあるいはある程度できることが望ましいそうです。見学日にお

会いした 1 名にインタビューを行い、この教室でのボランティアについて伺ったところ、名古屋ろう国際センターが運営する手話教室の利用をきっかけにボランティアを始めることになったとおっしゃっていました。手話教室で理事長にボランティアの誘いを受け、普段は日本語教師をしていることから、コミュニケーションの幅をさらに広げたいという思いでボランティアを始めたそうです。ボランティアをする中で、度々痛感するのは、口頭で伝達できないことのもどかしさと、普段のコミュニケーションの中で音声の持つ役割がいかに大きいかということだそうです。また、学習者が同じ日本人であり文化的背景が同じであるため、外国人学習者が苦勞する文化的差異でつまづくことはないが、文法は外国人学習者と同じように間違えるとおっしゃっていたことが印象的でした。この発見が、ろう学校での国語教育への興味にもつながったそうです。さらに、最も困難を感じることで、直接的な表現をする手話と曖昧な表現が多い日本語の言語的な差を指摘していました。これは、ろう者への日本語学習支援をする上で非常に大きな課題であると感じました。

5. ボランティア

<人数> 3人

<ボランティア歴> 平均1年前後

<条件・資格> 特になし（手話が少し、あるいはある程度できる）

<ボランティアを始めたきっかけ>

- ・ 普段日本語教師、コミュニケーションの幅を広げる
- ・ 同センターが運営する手話教室を利用

<ボランティアする上での困難>

- ・ 口頭で伝達できないもどかしさ
- ・ 文化的背景は同じだが、文法は外国人と同じように間違える
- ・ **手話の直接的な表現⇄日本語の曖昧な表現**

6. 教室運営について

教室運営上の工夫と困難について、理事長のキムさんにお話を伺いました。ろう者に日本語を教えるための工夫は大きく 2 つあり、1 つは手話と表情と口の動きを最大限に活用して日本語の細かいニュアンスを伝えることです。声のトーンや大きさ、話の流れなどから伝わるものが、ろう者には伝わらないため、音声以外の視覚情報を駆使して伝える努力をしているそうです。2 つ目は、非言語コミュニケーションの使用です。助詞や婉曲表

6. 教室運営

<ろう者に日本語を教えるための工夫>

- ・ 声のトーンや大きさ、話の流れなどから伝わるものが伝わらない
- **手話 + 表情 + 口の動き**
- ・ 手話にはないが日本語にはある表現
- それらを表す**非言語コミュニケーション**を手話にわざと混ぜて使用

<教室運営上の困難>

- ◎ **金銭面**（施設費、設備費等）...全て自力で運営している
- 受講料を高めに設定（最低月5,000円）+ 手話講師派遣

現などの、手話にはないけれども日本語には存在する表現を教えたり学習者が練習したりする際に、それらを表す非言語コミュニケーションを手話に混ぜて使用していました。手話と日本語の言語差を埋める努力が日本語の習得のために重要であることがわかりました。

教室運営上の困難については、やはり金銭的な部分が一番の問題だとおっしゃっていました。名古屋ろう国際センターでは日本語教室をはじめとした様々な事業を行っていますが、全て自力で運営しているため、日本語教室の受講料を月 5,000 円と少し高めに設定することや、手話講師の派遣などによって運営を維持しているそうです。

7. おわりに

調査する日本語教室を探している中で名古屋ろう国際センターが主催する教室を見つけ、私自身この時に初めて、ろう者の中に日本語学習の機会を必要としている人が多くいることを知りました。そこでろう者への日本語教育に興味を湧き、この機会に実際に見て学び、他の実習生にも共有する事ができればと思い調査を行うことにしました。実際に調査をしてみた中で、ろう者、そしてろう者への日本語学習支援について非常に多くのことを学び、考えることができました。しかし、外国人への日本語支援に比べて、ろう者への日本語支援は世間的にまだあまり認知されておらず、盛んに行われていないのが現状です。耳が聞こえる外国人のための教室は多く存在するのに、聞こえない人のための教室はごくわずかです。今後、ろう者への理解が広がり、名古屋ろう国際センターのような教室が増えることを願っています。

国際留学生会館日本語学習会(名古屋市港区)

寺澤百香

私は、名古屋市港区にある国際留学生会館において開催されている「国際留学生会館日本語学習会」について調査しました。調査は、国際留学生会館のホームページ (<https://www.nic-nagoya.or.jp/japanese/international-student-center/>)、および国際留学生会館日本語学習会日本語ボランティアリーダーの村瀬美穂さんとのメールを通じて実施しました。

1. 国際留学生会館について

国際留学生会館は1990年に名古屋市港区に設置された宿舎です。愛知県内の大学などで学ぶ留学生に対して、宿泊施設の提供、研修、相談、情報提供などの事業を行っています。2001年以降は、名古屋国際センターによって管理運営されています。

国際留学生会館には、2種類の登録ボランティア制度があります。今回調査した日本語学習会は、ボランティア制度のうちのひとつである日本語ボランティアによって主催されています。

国際留学生会館って？

沿革・施設情報

- 1990年、名古屋市港区に設置される
- 愛知県の大学などで学ぶ留学生に対して、宿泊施設の提供、研修、相談、情報提供などの事業を行っている
- 2001年以後、名古屋国際センターが管理運営

2種類の登録ボランティア制度

交流ボランティア イベントの開催・運営を通じて館内留学生と交流を深める	日本語ボランティア 「日本語学習会」を開催
---	---------------------------------

2. 「国際留学生会館日本語学習会」について

日本語学習会は、毎週土曜日の午前中に国際留学生会館で開催されていますが、調査を行った9月時点では、新型コロナウイルスの影響で休止されていました。

日本語学習会を立ち上げたのは、当時留学生会館でチューターをされていた方で、「留学生会館在住の留学生に日本語を教える」ことが発足の目的だったそうです。その後、地域の「日本語を勉強したい」という希望者も受け入れるようになり、地域日本語教室となりました。

日本語学習会の概要

教室主催者 国際留学生会館
開催場所 国際留学生会館
開催日時 毎週土曜日 午前10時～12時
受講料 無料

発足と発展

- 「留学生会館在留の留学生に日本語を教える」ことを目的にチューターが立ち上げ。
- 仕事や留学目的で来日する外国人が増加したことから、一般の外国人も受け入れるように。

※現在はコロナ禍で休止中

3. 日本語ボランティアについて

日本語ボランティアのほとんどは社会人が定年退職者で、大学生がいる時もあります。日本語教師養成講座を修了した方もいるものの、このボランティアに参加したことがきっかけで日本語の教え方を学んだ人が多くを占めています。

日本語ボランティアに特別な参加資格はありません。希望者は、まず会を見学し、3～6ヶ月の試用期間を経て正式にボランティア登録されます。



日本語ボランティアについて

参加者の属性

- ほとんどが社会人が定年退職者。大学生が参加する時もある。
- 日本語教師養成講座の修了者もいるが、ボランティアを始めてから日本語の教え方を学んだ人が多い。

採用の流れ

国際留学生会館に連絡

- 見学
- 3～6か月のお試し期間
- 正式にボランティア登録

4. 学習者について

コロナによる活動休止以前には、40名程度の学習者が参加していました。参加者の属性や国籍はばらばらであり、さまざまな背景をもつ人が集まっていることがわかります。

それゆえに学習の目的も人それぞれで、就学や検定対策、生活に必要な日本語を身につけるなど、学習のニーズが多様であることも特徴です。



学習者について
(休止以前情報)

学習者数 約40名

属性 研修生、留学生やその配偶者、技能実習生、外国人就労者やその配偶者、日本語を母語としない永住者 など

国籍 中国、ベトナム、フィリピン、ブラジル、エジプト、ヨルダン、バングラディシュ、ミャンマー など

学習目的

- 留学
- 仕事で日本語が必要(日本語検定受験希望)
- 日本で生活するため など

5. 活動について

多様なニーズや日本語レベルに応じられるよう、細かくクラス分けされているのが国際留学生会館日本語学習会の運営上の特徴です。随時学習者を受け入れているため、その度にクラス編成が変動します。

そのため、初級以外のクラスは一回完結型で行われる場合が多いです。初級は基本『みんなの日本語』に沿って進められますが、それ以外は担当ボランティアがコースデザインを行うので、ボランティアの裁量が大きいですといえます。



活動について

活動形態

- レベル別、目的別にクラス分け
- 随時受け入れをしているため、その時の学習者に応じてクラスの数や種類は変動
- クラスの例：留学生向けの1年で終わるコース、日本語検定受験希望者向けの検定クラス、検定合格者も参加する中上級クラス など

教材

- 初級のメインテキストは『みんなの日本語』
- それ以外は担当ボランティアがコースデザインを行う
- 初級では基本的にテキストに沿って学習するが、入門や中上級クラスでは1回完結型が多い

6. 調査をしてみよう

今回の調査を通じて、地域日本語教室の一例を知ることができました。在住の留学生のために立ち上げられた会が、在日外国人の増加という時代の変化に応じて地域に開放したという流れを知り、地域日本語教室といっても単に地域に根付いているのではなく、社会の動きに合わせて発

展してきたものであると知ることができました。その土地に合わせた教室が作られているという点で、地域日本語教室の意義はとても大きいと改めて認識しました。

調査で知ることができなかった点としては、教室が開催されていることをどのように地域に知らせているのかが気になりました。私自身、国際留学生会館に訪れたことは何度かあったものの、日本語学習会の存在については全く知りませんでした。今回の調査のように自分から知ろうとするきっかけがない限り、日本語教室が開かれているということ自体が気付かれにくい現状にあるのではないかと感じました。これは、他の地域日本語教室で多く挙げられているボランティアの人員不足にも繋がる点であると思われ、国際留学生会館日本語学習会に限った課題ではないと考えられます。地域日本語教室のよりよい運営を考えるにあたって、地域住民がその存在についてどれほど認知しているのか、地域日本語教室の広報がどのような方法で行われているのか目に向けることも大切な視点であると気づくことができました。

今回、実際にクラスに参加して場の雰囲気を体感することができなかったのが悔やまれますが、状況がよくなった後、機会があることを期待します。

犬山日本語教室（犬山市）

太田梨理香

犬山市にある犬山日本語教室について調査を行いました。

教室の主催者は犬山市の国際交流協会と後藤さんを代表とする地域のボランティアの方々です。約 9 名から 15 名のボランティアの方々と犬山市国際交流協会が協力して毎週日曜日の 10 時から 11 時 45 分まで犬山市国際交流センター「フロイデ」で活動を行っています。学習者は原則教科書を自ら準備し、毎回、参加費として 100 円を支払います。

犬山日本語教室は 1991 年に、「外国人に日本語と日本文化を教えると共に相互理解・交流を図る」ためにボランティアによって設立されました。常に教室としてより良い学びを学習者に提供するため、奇数月の第二日曜日にボランティア同士の打ち合わせを行ったり、外部から講師を招きボランティアへの指導を行ったりしています。また、コロナ禍での Zoom を用いたイベントや犬山警察と共に活動を行うなど積極的にイベントも実施しています。

犬山日本語教室には 5 つのクラスがあります。クラスは学習者がボランティアの方と相談し決定します。基礎から文型を順番に学びたい学習者には、3 つのクラスが設けられています。

初級前半の学習者を想定した「ゆめ」（みんなの日本語初級Ⅰ、8 課から 25 課を学習します。）初級後半の学習者を対象とした「つき」（みんなの日本語初級Ⅱ、26 課から 50 課を学習します。）そして初中級を対象とした「ほし」では読解問題が中心となり、学習者のレベルに合わせてさらなる高みを学ぶクラスとなっています。

一方、日本人と話したい学習者や生活に必要な情報が欲しい学習者には、ゼロ初級者も対象とし「まるごと」を使用した日常生活での簡単な発話を学ぶ「つぼみ」、そして、学習者の「会話をもっとしたい！」という声から生まれた、少人数で会話を行う「ゆき」が昨年 10 月から新設され

①教室の基本情報

教室主催者：犬山国際交流協会/ボランティア 後藤代表
複数名のボランティア（9～15名）+犬山市国際交流協会で運営

開催場所：犬山市民交流センター「フロイデ」2階、3階

開催日時：毎週日曜日 10:00-11:45

設立：1991年、外国人に日本語と日本文化を教えると共に
相互理解・交流を図るためにボランティアによって開始

参加費：1回 100円

※奇数月の第二日曜日にボランティア打ち合わせ会がある。
その他、交流イベントなども実施

基礎から順番に文型を学びたい人	日本人と話したい人、生活に必要な情報が欲しい人
ゼロ初級者は つぼみから参加 ゆめ（初級前半） 「みんなの日本語」初級Ⅰ（8課～25課） ゆきクラスは10月から新設！ 学習者の「会話をもっとしたい！」 というニーズからの試み。 ボランティア一同模索中。 つき（初級後半） 「みんなの日本語」初級Ⅱ（26課～50課） ほし（初中級） 読解練習中心	つぼみ（入門） 初めて日本語を学習する人、 日常生活での簡単な発話を学ぶ。 「まるごと」を使用 ゆき（2～5人の少人数で行う） 日本人と話したい、聞いて発話の練習をする。 ※クラスで行う授業ではない、その日のテーマを決めて話し合いを行う。相手をするボランティアは決まっていない。

ました。このクラスでは学習者とボランティアが自らの興味のあるテーマを決定し、授業を行います。

ベトナム、インドネシア、中国、ブラジル、フィリピンなど約 30 名の学習者が共に学んでいます。学習者は技能実習生の方々が多く、彼らのほとんどが本国で日本語を学習しているので「ゆめ」や「つき」クラスからの参加が多くなっています。彼らの多くが日本語能力試験合格を目指し教室に通っています。そのため犬山日本語教室では、先に記載した通り、文型積み上げのクラスや試験対策のクラスが充実しています。また、彼らの中には実習先の企業が交通費や参加費を負担し犬山日本語教室に通うように言われ通っている学習者もいます。

③学習者について

学習者：ベトナム、インドネシア、中国、ブラジル、フィリピンなど約 30 名

技能実習生：元々の基礎を本国で学習しているため、ゆめクラスやつきクラスからの参加が多い

日本語能力試験合格を目指す学習者が多い＝
文型積み上げ、試験対策のクラスが充実している

実習先の会社の方から、日本語教室に通うように言われている場合もある。

(参加費は企業負担)

教室の特徴としては以下 6 つが挙げられます。

1. 教室のボランティアや国際交流協会の職員が一方的に日本語を教えることが目的ではなく、学習者同士が仲良くなることを望んでいることです。実際に文法のクラスでも学習者同士が教え合ったり、日本語で会話をしたりと学習者同士の交流が多く見られます。

2. 「いつでも受け入れる」という理念の元、ターム制のない通年開催で授業を行っています。そのため、常に新しい学習者が気軽に参加することができます。

3. 先に述べた通り、犬山日本語教室には技能実習生の学習者の方が多く、特に男性の学習者が多くなっています。

4. 実際に日本語指導の経験が長い経験豊富なボランティアの方々が在中しています。(私はクラスにサポートとして入らせて頂きますが、常に勉強になることばかりです。)

5. 犬山国際交流協会と協力してイベントを行います。新型コロナウイルスの影響で中止となってしまいましたが、各国料理講座などイベントを企画し実行しています。

6. ボランティアの方々はチームティーチングを行なっています。そのためボランティア自身も無理なくボランティアを継続することができます。

④教室の特徴

- 1 日本語を教えるだけが目的ではなく、教室で学習者同士が仲良くなることを望んでいる。
- 2 「いつでも受け入れる」という理念の元、タームのない通年開催で学習者をいつでも受け入れている。
- 3 技能実習生の学習者が多い。特に男性の学習者が多い。
- 4 経験豊富なボランティアが在中。
- 5 犬山市国際交流協会と協力して、イベントの実施を行う。
(「多文化交流カフェ online」)
- 6 ボランティアはチームティーチングを行なっている。

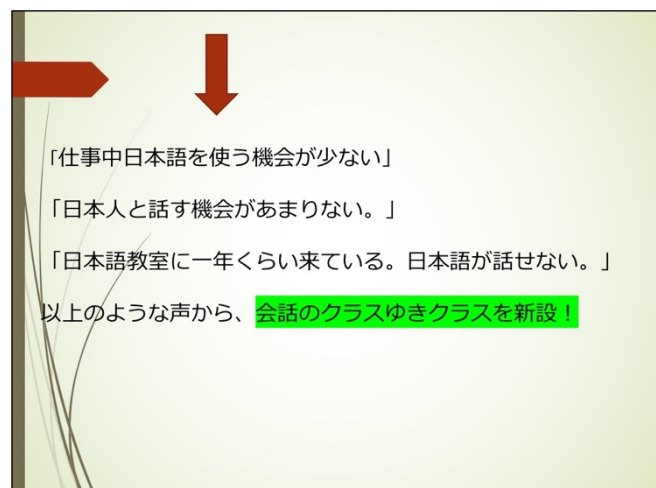
8月にオンライン（Zoom）で行われたイベントです。国際交流協会が「多文化交流カフェ」をオンラインで行いました。ゲストスピーカーとしてベトナム人のホアンさんが参加してくださいました。日本語教室に通っている学習者の方々が、日本語学習の方法や日本での生活について学びを深めていました。先に述べたように、犬山日本語教室では日本語教室の開催以外にも、国際交流協会と協力してコロナ渦でもイベントをできる範囲で開催しています。

ここからは私が実際に犬山日本語教室に参加し発見した教室の特徴を述べます。



犬山日本語教室は「学習者とボランティアの距離が近い」事が挙げられます。学習者ボランティア一人一人が積極的に関わることによって「学習者のニーズ」が分かります。

実際に学習者の「仕事で日本語を使う機会が少ない。」「日本人と話す機会がありません。」「日本語教室に一年くらい来ている。日本語が話せない。」などの学習者の声から、先に述べたように2020年10月に会話の「ゆき」クラスを新設しました。ゆきクラスでは学習者の興味があるトピックで会話活動を行うと共に、日本の文化が学べるような授業が行われています。



最後に、私はこの調査活動をきっかけとして日本語教室でボランティアを行っています。ボランティアとして学習者、先輩ボランティアの方々と関わる中で日々自身の学びを深めています。これからも多くのことを学び、少しでも役に立てるよう務めたいと思っています。

特定非営利活動法人シェイクハンズ(犬山市)

若山拓生

僕は、犬山市にある地域日本語教室、特定非営利活動法人シェイクハンズの調査を行いました。

シェイクハンズで行われている主な多文化共生の活動は、6つあります。1つ目は、おかえりなさい塾です。これは、放課後の居場所づくり事業として行われています。2つ目は、にじいろ寺子屋です。日本語学習支援を中心に行われています。3つ目は、いぬやまの寺子屋です。多様な困難を抱える子の学習支援を行なっています。4つ目は、プレスクールです。就学前園児と未就学児の就学準備を行なっています。その他にも、教育・進路ガイダンスや大人の日本語教室・みんなの日曜塾が行われています。

主な多文化共生の活動

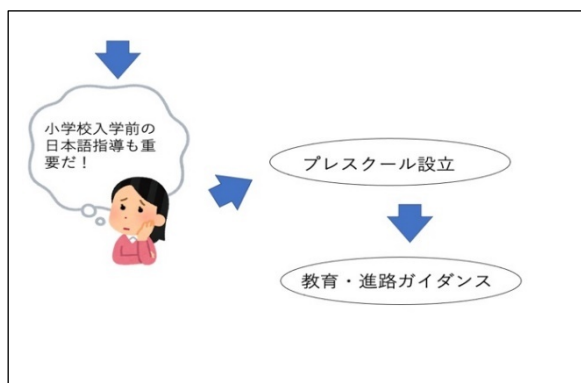
1. おかえりなさい塾（放課後居場所作り事業）
2. にじいろ寺子屋（日本語学習支援中心の場）
3. いぬやまの寺子屋（多様な困難を抱える子の学習支援）
4. プレスクール（就学前園児・未就学児の修学準備）
5. 教育・進路ガイダンス
6. 大人の日本語教室・みんなの日曜塾

これらの教室を設立した経緯についてです。代表の松本様は、犬山市内に小学生向けの日本語教室がないことを心配していました。市の担当者に相談しても進展があまり見られなかったため、自分たちで教室を作ってしまうと思ったところから始まりました。

そこで、最初におかえりなさい塾を設立しました。その後、リーマンショックが起き、時間にゆとりのできた大人たちに向けてみんなの日曜塾を設立しました。そして、中学生以降も引き続き支援がしたいと思い、にじいろ寺子屋といぬやまの寺子屋を設立しました。さらに小学校入学前の日本語指導の必要性にも気づき、プレスクールを設立しました。最後に、教育・進路ガイダンスも行うようになりました。

以上が、6つの教室を設立するに至った経緯です。

教室設立の経緯について



ここからは、僕が調査したおかえりなさい塾についてです。活動日時は、毎週木曜の放課後から 18 時までです。活動場所は楽田ふれあいセンターです。生徒数は、曜日によって異なりますが、約 30 人くらいです。職員・ボランティア数は全体で 10 人弱です。小学生・中学生向けの学習支援が主な活動です。

次に、おかえりなさい塾で行われている指導についてです。

主に、学校の宿題の援助のような学習指導を行なっています。実際に、親からのニーズも日本語指導よりも宿題の指導の方が多くなっているそうです。指導形態は、個別指導に近い形で行われています。僕が見学させてもらった時も、スタッフ 1 人に対して子ども 2～3 人程度で指導を行っていました。小学生には、日本語の書き順の正確さを重視して教えていました。

課題には、日本語指導が少ないこと、学校の授業の後追いの指導になってしまっていること、ルーツや背景など多様化した学習者への対応の 3 つをあげられていました。

次に連携についてです。学校との連携には、教室のチラシを配ってもらっているそうです。学校からの SOS が来ることもあり、宿題の確認の連絡など、積極的に連絡を取り合っています。ただ、校長先生が変わると一から関係を作り直さなければならないことや、先生の中には活動に理解を示してくれない人もいるという課題もあります。

市との連携については、委託事業として運営させてもらっていることや、担当課である地域協働課との連携をとっています。また、他の日本語教室との連携では、さまざまな情報の共有やネットワークの形成を行なっています。他にも、外国人集住地域にある日本語教室との協力や、翻訳・通訳ボランティアの交換などの連携をとっています。

基本情報

- ・活動日時：毎週木曜の放課後～18時
- ・活動場所：楽田ふれあいセンター
- ・生徒数：約30人くらい（曜日によって異なる）
- ・職員・ボランティア数：全部で10人弱（全体で）
- ・主な活動：小学生・中学生向けの学習支援

指導について

- ・学校の宿題の援助などの学習指導がメイン
→親からのニーズも宿題の指導が多い
- ・個別指導に近い
- ・小学生には書き順など正確さを重視。

<課題>

- ①日本語指導が少ない
- ②後追いの指導になってしまっている
- ③多様化した学習者への対応

連携について

①学校との連携

- ・学校にチラシを配ってもらう
- ・学校からのSOSがあることも
- ・宿題の確認など連絡を取り合っている
→積極的に連携を取っている

<課題>

- ・校長先生が変わると一から関係を作り直さなければならない
- ・先生の中には理解を示してくれない人もいること

連携について

②市との連携

- ・委託事業として運営
- ・担当課（地域協働課との連携）

③他の日本語教室との連携

- ・情報共有・ネットワークの形成
- ・外国人集住地域にある日本語教室と協力
- ・翻訳・通訳ボランティアの交換

次に指導者についてです。

スタッフは、シェイクハイズ全体で約 10 人います。10 人で子どもたちの指導にあたっています。加えて、コロナでアルバイト先が見つからないベトナムからの留学生にもボランティアとして参加してもらっているそうです。スタッフの中には、日本語教師の資格を持った人が少なく、長年の経験や塾の講師だった人、学生などで指導しています。課題には、ボランティアの確保をあげられていました。

生徒については、現在、ペルー人が 1 番多いです。最近では、フィリピン人が増えてきており、今後、技能実習生の関係でベトナム人が増える可能性が高いそうです。周辺の学校以外にも隣の市から通ってくる子どももいます。これは、送迎の車や駅から近いことと関係しています。

最後に、今後やりたいことについてです。

3 つ挙げていただきました。1 つ目は、子どもたち一人一人に合わせた日本語指導を行いたいということです。2 つ目は、スペイン語の母語指導です。3 つ目は、ボランティアの確保とスタッフを増やすことです。これによって日本語指導をもっと行いたいということでした。

指導者について

- スタッフ約10人
- ベトナムからの留学生にも助けてもらっている
- 日本語教師の資格を持った人が、少ない。
→長年の経験や塾の講師だった人・学生などで行なっている
- <課題>
 - ボランティアの確保

生徒について

- ペルー人が多い
→最近ではフィリピン人が増えてきている
→今後、ベトナム人が増える可能性大
- 周辺の学校以外にも隣の市から通ってくる子どもがいる
→送迎の車や駅から近いことが関係

今後やりたいこと

- 子どもたち一人一人に合わせた日本語指導を行いたい
- スペイン語の母語指導
- ボランティアの確保/スタッフを増やす
→日本語指導などを行いたい

ひよこの会日本語教室（小牧市）

近藤来夢

1. 調査結果

愛知県小牧市の小牧小学校向かいで、民間団体「ひよこの会」が主催する日本語教室が開かれています。この教室が対象とするのは、日本の学校に通う外国人児童生徒のみなさんです。

今回の調査結果は、メールでのやりとり（2020年9月）や自作アンケートへご回答いただいた内容を中心として得られたものです。

教室の位置する小牧市は、国内有数の外国人集住都市として知られています。そのため市内には、多くの日本語指導を必要とする児童生徒が暮らしています。

立ち上げの中心である小牧小学校区のお母さんたちは、学校や子ども会の行事を通して、外国につながる子どもたちの苦勞を間近で見てきたといいます。

※「国際教室」：小牧市内の学校における取り出し学級のこと。

背景・環境

小牧市 国内有数の外国人集住都市 ※県内5番目
人口の6.5%が外国につながる市民
市内のほとんどの学校に「国際教室」

ひよこの会



学校や子ども会の活動を通して、外国につながる子どもたちの苦勞を見してきました。

●例えば
「中学卒業資格がとれない。」

学習者 6名 小牧小学校区在住
(ブラジル、ベトナム、ペルー)
ボラ 6名 お母さん中心
(教師経験者、近隣住民の方も)

教室では、

- ・学校の宿題補助
- ・学校の授業で分からない箇所のサポート
- ・「にわとり式」漢字教材を用いた学びを中心とした学習が展開されています。

中でも、NPO法人「にわたりの会」開発の漢字教材を活用した学びが特長です。教材の機能を活かし、母語教育にも力を入れています。

学習内容



『NPO法人にわたりの会 | 開発教材』HPより



日本語に対応する母語を耳で聞き、発声するトレーニング

→母語も大切に育てていく

この教室の特色の1つ目は、「母語も大切に育てたい」という思いを持った教室活動です。

特色の2つ目は、「目の行き届く」団体であることです。

保護者との密接な関わりや学校側との連携など、その活動は日本語指導にとどまりません。

特色

◆ 日本語を学ぶとともに 母語を大切に育てたい

教材

「にわとり式かんじカード」の活用

◆ 小さい町ならではの「目の行き届く」団体

保護者との関わり

中学卒業と高校入学をあきらめないよう、両親を説得。

学校との連携

国際教室や、担任の先生と連絡を取る場合も。

3

2. 調査を終えて

今回「ひよこの会」日本語教室を調査しようと考えた決め手の1つが、教室のボランティア募集欄でした。そこにはボランティア募集条件として、「「教える」ではなく、「共に育つ」思いを持つ方」という一言が添えられていました。

このような姿勢で学習者の方と関わる教室についての興味が募り、調査依頼のメールをするに至りました。

実際に調査を進めていくと、母語も大切にするという方針や、広すぎない活動域だからこそできる目の行き届いた支援など、様々な特長が見えてきました。と同時に、このような活動の存在やその意義を、広く社会に知ってほしいという思いが芽生えていました。

授業内での発表は限られた時間でしたが、このような報告書としてまとめられることで、今後も活動の輪が広がっていくことを願っています。

最後に、「ひよこの会」事務局担当者様より頂いた実習生へのメッセージです。

「学習支援は、同時に生活支援でもあります。日本語学習支援のみならず、行政や学校と連携してサポートする力を、ぜひ蓄えてください。」

2020年度の実習生として、この調査に参加できたことに感謝しています。今後も多文化共生社会実現のための1つとして、日本語学習支援・生活支援に関わっていきたいと思います。

「ひよこの会」 Facebook

<https://www.facebook.com/hiyokonokai.komaki/>

NPO 法人にわたりの会（小牧市）

稲垣葵

私は、小牧市の「NPO 法人にわたりの会」の活動について調査をしました。ふらっとみなみというコミュニティセンターで活動しており、丹羽典子さんが代表を務めています。活動年数は、直接指導が 4 年目、漢字カードづくり活動からは 10 年目の団体です。にわたりの会の目的として、①外国人児童生徒の学習言語の習得、②無限の可能性のある子どもたちをダブルリミテッドにしないという 2 点を掲げています。

にわたりの会は、小学校教員であった丹羽さんの発見から始まりました。小学校 2 年生の漢字でつまづく児童生徒が多いことに気が付き、小学校の教育漢字ができれば中学でも対応できるという仮説の元、漢字カードを作成したそうです。そして、勤務先の小学校で活用したところ、評判がよく、その実験室としてにわたりの会が立ち上がりました。

教室は小学生クラスと中高生クラスの 2 つがあります。小学生は水曜日の 17 時から 19 時の 2 時間で、1 か月 3000 円となっています。中高生クラスは、月、水、金曜日の週 3 回で、時間は小学生クラスと同じ 17 時から 19 時です。科目の難しさや受験などを考慮して週 3 回に設定しているそうです。受講料は月 5000 円です。受講料に関しては、両親の所得に応じて減額や免除などの方法をとっているそうです。

2. 教室基本情報

▷主催：NPO法人 にわたりの会
▷場所：ふらっとみなみ
▷代表：丹羽典子
▷活動年数：4年目

目的：① 外国人児童生徒の学習言語の習得を応援する
② 無限の可能性のある子どもたちをダブルリミテッドにしない

2.1 設立の経緯

- 発見 小学校2年生の漢字でつまづく児童生徒が多い
- 仮説 小学校の教育漢字ができれば中学でも対応できる
- 実行 漢字カードをつくってみた
- 実践 勤務先の小学校で漢字カードの活用
- 立上 実験室としてにわたりの会を立ち上げた

3. 教室紹介

○小学生

・曜日→水
・時間→17:00～19:00
・受講料→3000円（月払い）

○中高生

・曜日→月 水 金
・時間→17:00～19:00
・受講料→5000円（月払い）

※受講料は、親が低所得の場合には減額・免除あり

学習者は、小学1年生から高校3年生までの18人が学習しています。ペルー、ブラジル、ベトナム、フィリピンにルーツを持つ児童生徒で、滞在歴は多岐にわたります。日本語レベルは、日常会話はできるが学習言語が分からない学習者が多く、学校の宿題が解けるようになる、テストの点数を上げる、高校に合格するというニーズを持っています。

スタッフは15人が活動できる時に支援をしています。教員免許保持、愛知県国際交流協会の研修参加、にわとり式漢字カード使用法の研修参加のいずれかを満たしている方が活動しています。スタッフの仕事は、大きく2種類です。教室に通う一人一人のサポート、個別カリキュラムの作成の直接児童生徒に関わる仕事。にわとり式漢字カード教育漢字1026字と小学校の学習内容の関わりの研修、外国につながる子どもの心理状態についての研修です。

教室の特色として「にわとり式漢字カード」と「個別カリキュラム」の2点があります。漢字カードは、教育漢字1026字を網羅したものを音の出るペンでかざすことで、視覚と聴覚を使って覚えることができます。音声も6か国語あり、母語保持にも役立ちます。カリキュラムは学習指導要領に沿って作成され、到達度を測るために、入会時と4か月ごとに小テストを行います。

漢字カードを使用したことにより、漢字が読めるようになった児童生徒が多くいます。本人のモチベーションによって差はあるものの、1日10枚の学習を3か月続けることで、日本語の読み書きの基礎となる、小学校1、2年の大体の漢字を読むことができるよ

3.1 学習者

- ▷年齢：小学1年生～高校3年生
- ▷人数：18人
- ▷国：ペルー、ブラジル、ベトナム、フィリピン
- ▷滞在歴：日本生まれの児童生徒から来日1～2年の児童生徒まで多岐にわたる
- ▷日本語レベル：日常会話はできるが学習言語が分からない
- ▷ニーズ：学校の宿題が自分の力で解けるようになる
テストの点数を上げる
高校に合格する

3.2 スタッフ

- ▷人数：15人（来れるときに）
- ▷資格：①小・中・高いずれかの免許を持っている方
②愛知県国際交流協会の研修を受けた方
③にわとり式漢字カードの研修を受けた方
- ▷仕事：1人1人のサポート、カリキュラムの作成
にわとり式漢字カード教育漢字1026文字と
小学校の学習内容の関わりの研修
外国につながる子どもの心理状態についての研修

3.3 教室の特徴

▷にわとり式漢字カード

- ・教育漢字1026字
- ・ペンでかざすと音が出る
- ・6か国語で母語保持にも
- ・個人のペースで進む
- ・国語の単元とは関連していない

▷個別カリキュラム

- ・学習指導要領に沿った目標
- ・学年の到達目標に追いつくことが目標
- ・学校で実施されたテストを参考
- ・入会時、その後は4か月ごとに必要に応じ小テストを実施

4. 学習の効果

- ・漢字カードの使用で、漢字が読めるように

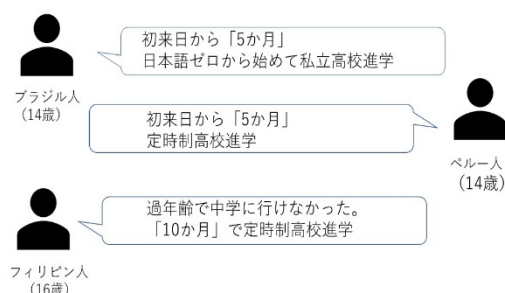
1・2年の漢字カードを1日10枚行う。
27日で1周り取り組む。
3か月で、大体読めるように

（本人のモチベーションにより個人差あり）

うになるそうです。27日で1周することができます。

漢字カードを活用し、高校に進学した例もあります。日本語ゼロの状態で来日して5か月で私立高校に進学したブラジル人の生徒。同じく5か月で定時制高校に進学したペルー人の生徒。過年齢で中学には行けなかったものの、10か月で定時制高校に進学を果たしたフィリピン人の生徒がいます。

4. 学習の効果



にわたりの会は、小牧市との関わりももっています。1つは、個人懇談会への出席です。必要に応じてですが、希望者には個人懇談会に出席するそうです。また、2020年度より、小牧市教育委員会とも協働を始め、小牧市が活動場所や経費を供給する代わりに、にわたりの会は、外国人児童への指導経験を小牧市に還元しています。

5. 小牧市との関わり

- ① 学校の個人懇談会（必要に応じて）
- ② 2020年度より小牧市の教育委員会と協働を始めた



にわたりの会は、コロナ渦でも、教室活動を行っていました。本来は対面で行っていた教室を、一部児童生徒にオンラインで実施しました。施設が休みの中でオンラインという形で授業ができたという良い点があった一方、オンライン授業ができなかった児童生徒は、授業開始時に遅れが見られたという反省点もあったそうです。これらを踏まえ、今後は全員にオンライン授業を提供することを目標としているそうです。

6. コロナ渦での教室活動

▷実施内容：一部生徒に自宅からオンラインで授業



▷効果

- 施設が休みの中でオンラインという形で授業ができた。
- ×できなかった子は、学校再開時に遅れが見られた。

▷目標：全員にオンライン授業を保証。

にわたりの会の調査をし、漢字学習の重要性や一人一人の児童生徒に向き合って支援することの大切さを学びました。この調査経験を活かし、これから外国人児童生徒と関わっていきたいです。以上で、小牧市の日本語教室「NPO 法人 にわたりの会」についての報告を終わります。

ウェルカム日本語教室（長久手市）

中村千咲

1. 調査概要

私が今回調査したのは、長久手市にある「ウェルカム日本語教室」です。調査は、事前にメールで行ったアンケート調査（2020年9月29日）と訪問調査（2020年10月3日）の2つの方法で行いました。

- ◆調査方法
アンケート調査、訪問調査
- ◆調査日時
アンケート調査(2020年9月29日)
訪問調査(2020年10月3日)
- ◆調査相手
長久手市国際交流協会

2. 基本情報

加盟団体は、「長久手市国際交流協会」で、場所は「長久手市役所西庁舎3階公民館」です。日時は毎週土曜日の10時～11時半で、月に4回、通年で全40回開催されています。今年度は、コロナウイルスの影響により、17回の予定となっています。ボランティアが22名、学習者が40名（調査当時）。2月9日現在は、ボランティアが21名、学習者が24名です。初級（A1・A2・A3・A4）、中級（B）、上級（C1・C2）の全7クラスに分かれています。

①調査対象教室の基本情報

- ・ウェルカムにほんご教室(2020年度)
- <主催団体> 長久手市国際交流協会
- <場所> 長久手市役所西庁舎3階公民館他
- <日時> 土曜日 10時～11時半 月4回
- <学期> 通年(全40回)
- <受講料> 1,000円/年(教材費は別)
- <教室規模> ボランティア22名 学習者40名
- <コース> 初級・中級・上級(A1～C2まで全7クラス)

3. 学習者について

学習者は40名（現在24名）。男女はほぼ同数で、高校生から60歳くらいまでと幅広い年代の方が利用しています。在留資格は、留学生や技能実習生、主婦、大学教員など様々です。国籍についてはベトナム人が1番多く13人（6人）、次に中国人が7人（6人）、バングラデシュ、フィリピン、スリランカと続き他全11カ国の方が登録しています。学習者の日本語レベルは、初級が15

②アンケート調査概要と結果

学習者について

- <人数> 40名
- <性別・年齢> 男女ほぼ同数、高校生～60歳くらい
- <在留資格> 留学生、技能実習生、主婦、大学教員他
- <滞日期間> 数か月～10年以上
- <国籍> ベトナム13人、中国7人、バングラデシュ4人、フィリピン、スリランカ各3人、シリア、マレーシア他
- <学習目的> 地域社会での交流、日本語能力試験受験
- <レベル> 初級15人、中級14人、上級11人

人（8人）、中級が14人（5人）、上級が11人です。

4. ボランティアについて

人数は無償ボランティアが22名。ボランティア歴は、数ヵ月の人から10年以上の人までおり、多様です。日本語教師経験はない方が多数で、420時間の日本語教師養成講座を修了したボランティアが何名か在籍しています。「一方的に教えるだけではなく、異文化による生活習慣の違いを尊重し、学習者からも学ぶという謙虚かつ対等な姿勢で接する」ことを意識しているそうです。

講師、ボランティアについて

<人数>	無償ボランティア22名
<ボランティア歴>	多様(数ヵ月～数十年)
<日本語教師経験>	ない方が多数 420時間の日本語教師養成講座を 修了したボランティアが何名か

[一方的に教えるだけではなく、異文化による生活習慣の違いを尊重し学習者からも学ぶという謙虚かつ対等な姿勢で接する]

5. 教室活動について

学習内容はクラス別の指定の教科書を進める形式で、おおむね1年で教科書1冊を終えることを目標としています。

学習者の参加率について、初級の参加率はあまり高くなく、中上級になるにつれて参加率は比較的高くなる傾向にあります。

コロナ禍で活動を中止していましたが、9月に教室を再開し、現在は通常通りの活動形態で行っています。

教室の活動について

<学習内容>	クラス別指定の教科書 上級クラスは自由教材で、担当のボランティアが教材を選定
<カリキュラム>	概ね1年で教科書1冊終える
<学習者の参加率>	初級の参加率はあまり高くない 中上級者の参加率は比較的高い傾向 毎年1回、学習発表会を実施。 課外授業でリニモ工場見学など
<現在の活動状況>	通常通りの活動形態。 9月に教室を再開し、徐々に学習者が教室に戻りつつある状況

6. 活動形態について

一つの教室の中にいくつかの島があり、それぞれがクラスになっています。

1クラスにボランティア2名から4名、学習者2名から4名程度で行っています。

ボランティアひとりが進行役となり、他数名が補助をし、クラスごとに教科書を進める形態となっています。

活動形態

A1・A2・A3・A4・B・C1・C2(初級・中級・上級)の7クラス
1クラスにボランティア2～4名、学習者2～4名程度
各クラスごとに教科書を進める
ボランティアは1人が進行役となり、他数名が補助をする

● 学習者
● ボランティア
○ 空席



今回の調査で、初めて日本語教室を訪問し、教室の雰囲気を肌で感じることができ、とても良い勉強になりました。ありがとうございました。

日進市国際交流協会日本語教室（日進市）

後藤未奈

1. 基本情報

私は日進市国際交流協会日本語教室を調査しました。調査方法は電話にて奥村恵子様にお話を伺いました。教室はにぎわい交流館にて、毎週水曜日午前 11 時から 12 時 30 分まで行っています。

（2021 年 1 月から 10:00～11:30、11:30～13:00 に変更）4 月から 9 月、10 月から 3 月の二学期制で、各 17 回の授業が行われています。

授業料は一学期 1000 円です。学習者は約 15 名程度です。使用テキストは基本的に『みんなの日本語』、『いっぽにほんごさんぽ』を使用しています。

2. 活動目的

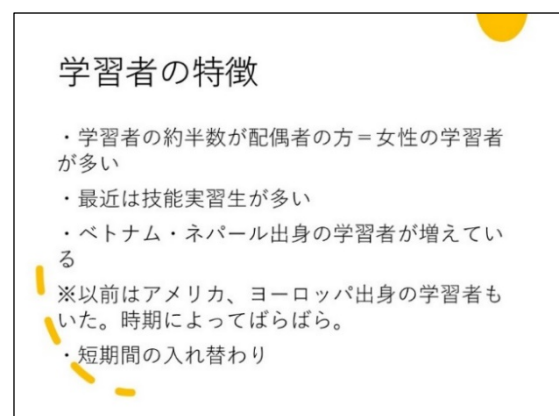
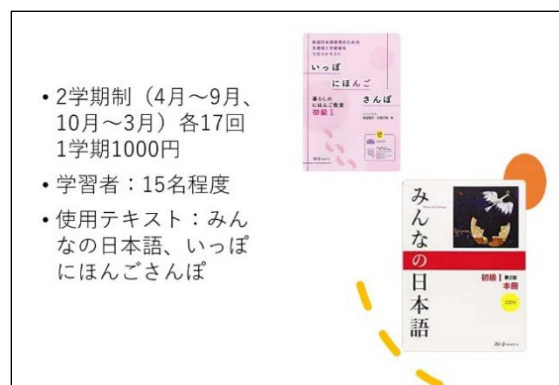
学習者に日本語を教えることで国際交流に寄与することです。また、同時に地域の情報を提供すること、生活相談をすること、それらを通して親睦を深めることです。

3. 活動内容

学習目的に応じてレベル別の授業を行います。主に、会話、文法、読み書き、日本語能力試験の対策、文化交流などを行います。文化交流として年に 2 回交流会を行っています。過去には書道や世界の料理教室を行いました。また、日本語教室とは別に毎年日本語ボランティア養成講座を行っており、多くの参加者が受講されます。

4. 学習者の特徴

学習者の半数が日本人の配偶者の方です。そのためこの教室は女性が多いという特徴が挙げられます。教室に増えている学習者の国籍はベトナム・



ネパールの方です。滞在資格として増えているのは技能実習生またはその配偶者で、中国・ベトナム・フィリピン出身の学習者が多く、短期間で学習者が入れ替わるそうです。

5. 学習方法

基本的にテキストに則して学習しています。ボランティアの入れ替わりが多く、ボランティア未経験の方でも教えることができるからです。現在はボランティアの数が学習者より多いため、マンツーマンで教えています。テキストは『みんなのほんご』を中心に使用しています。このテキストは母国でも使用したことがある学習者が多いため、学習途中の箇所から教えることも可能です。

学習方法

- 基本的にテキストに則して学習
 - ①ボランティアの入れ替わりが少なくないため
 - ②ボランティアの経験がない人でも教えることができるため
- マンツーマン（ボランティアの数が学習者より多いため可能）
- 基本的にテキスト「みんなの日本語」→母国で使ったことがある学習者が多い

6. 地域との交流

2019年は、にっしん市民まつりにて「外国人おしゃべりサロン」というブースの展示があったそうです。英語のカードゲームでコミュニケーションをとったり、簡単なネパール語の語学レッスンなどを行ったりしたそうです。また、名古屋外国語大学の学生との交流イベントや、スポーツフェスティバル、異文化交流会などの日進市国際交流協会主催のイベントに参加し、地域住民との交流を図ることができるそうです。

地域との交流

日進市国際交流協会主催の交流

- にっしん市民まつり 「外国人とおしゃべりサロン」
- 名古屋外国語大学の学生と交流
- インターナショナルデイ NIA SPORTS FESTIVAL
- 異文化交流会（うどん作り体験）

7. 求める地域情報・生活相談

私は学習者が日本語教室に通う中で、地域の情報や生活の相談などを求めているはずだと思っていました。しかし、この教室では学習者の入れ替わりが速いということもあり、あまり相談などはされないそうです。教室に通う目的として、同郷の人や同じ境遇の人と交流をするため、日本語能力試験を受けるためなどであり、情報を得るためや相談をするためではないからです。しかし全く相談がないのではなく、例えば子供の学校の通

学習者が求める地域情報・生活相談

過去の事例

- 学校の通知の文章の解説
- 子どもの進学について
- 子どもの習い事の情報
- 交通事故の対処

同郷の人・同じ境遇の人と交流したい！
検定を受けたい！



知の解説のお手伝いや、子供の進学、習い事についてなどの相談が寄せられるそうです。また、交通事故に遭った学習者に相談された事例もあるそうです。

8. コロナ禍の運営

コロナウイルスの影響を受け、しばらく運営を休止していましたが、2020年9月から再開されました。コロナウイルスの影響を受け、約15名の学習者を二つのグループに分け、対面の授業を実施しています。また、検温、マスク着用、除菌清掃などの感染防止対策を行っています。希望者はオンライン授業を受けることも可能です。しかし、ボランティアはご高齢の方が多く、パソコン操作が難しいなどの問題があるため、オンライン授業へシフトの予定は今のところないそうです。

みよし市日本語講座(みよし市)

寺田 栞菜

1. みよし市 外国人のための日本語講座について

私は、9月26日に地元であるみよし市の日本語講座に調査に行ってきました。教室が開催されている時間に伺い、実際の授業を見学しながら、ボランティアの塚崎さんにお話を聞きました。

まず、事前調査で分かったみよし市の日本語講座についての基本情報を紹介します。日本語講座は、みよし市が主催しています。場所は、みよし市役所の近くにある市民活動センターです。この教室は、毎週水曜日と土曜日の午前10時から11時30分に行われています。

この教室は、みよし市内在住、在勤、在学の16歳以上の外国人を対象に開かれているものです。この教室に通う学習者は90人です。そして、日本語を教えるボランティアは39人います。みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ、中級を使い、少人数グループでの授業を進めています。

みよし市では多文化共生事業を行っています。「言葉はもちろんのこと、互いの文化や風習を理解する」

「外国人も含めたすべての市民が安心して暮らせる」

ための取り組みとして、みよし市の日本語講座は開かれています。

調査について

- ◆調査日時：9月26日（土）
- ◆調査方法：日本語講座を実際に見学
- 日本語サークル 塚崎さん

基本情報①

- ◆主催者：みよし市
- ◆場所：市民活動センター
- ◆時間：毎週水曜/土曜 午前10時～11時30分

基本情報②

- ◆受講資格：市内在住在勤在学 16歳以上
- ◆講師ボランティア：39名
- ◆学習者：90名
- ◆使用テキスト：みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ、中級
- ◆教室形態：少人数グループ

教室を開いている目的

【みよし市 多文化共生事業】

みよし市には以前から多くの外国籍の住民が暮らし、リーマンショック後の世界的な経済減退により、一時的に外国人住民が減少したものの、近年は再び増加傾向に転じており、さらには平成31年4月の改正入管法の施行により、今後ますます増加することが予想されます。

地域で日本人と外国人が共存していくためには、言葉はもちろんのこと、互いの文化や風習を理解することが大切です。

外国人も含めた全ての市民が安心して暮らしていけるよう、多文化共生社会の実現を目指します。

(みよし市ホームページ<https://www.city.aichi-miyoshi.lg.jp/kyodo/tabunka/tabunkakayouseinitsuite.html>より)

2. 見学からわかったこと

みよし市日本語講座でのクラス分けは、以下の図のようになっています。クラスの決め方はまず、学習者が初めて教室に来た時に、簡単なアンケートに答えてもらいます。その回答をもとに、ボランティアがクラスを決めます。はじめのクラスが決まり、学習を進めていきますが、その後は学習者本人の希望に合わせてクラス変更することもあるそうです。

ここからは、それぞれのクラスの様子を紹介します。

まずは、初級Ⅰグループです。見学した日は、フィリピン人学習者 2 人とブラジル人学習者 2 人が学習しに来ていました。日本語がほぼ分からない学習者向けなので、ボランティアの自己紹介の時から、頻繁に英語を挟みながら話していました。

初級Ⅱグループは、文法中心のクラスです。この日は、中国人学習者、フィリピン人学習者、フィリピン人と日本人のハーフの学習者、の 3 人が学習に来ていました。授業は主に、ボランティアが説明し、単語や例文をリピートして読むという流れで行われていました。

初級Ⅲグループでは、この日 5 人の学習者が来て授業を受けていました。このレベルでは、教科書に載っている内容と関連させた雑談を、ボランティアと学習者の間で交わしている場面も見受けられました。

中級のクラスでは、ボランティア 1 人と学習者 1 人という、1 対 1 の形式で授業が進んでいました。そのため、他のクラスと比べると、学習者の発言や発話の場面が多くありました。また、文法説明が書かれた掲示物を使って、初級Ⅱクラスでの学習内容を復習しながら、新出語句や表現を学んでいました。

これまで紹介したクラスは、文法学習中心のクラスでした。

初級Ⅰグループ

◆教科書

みんなの日本語Ⅰ 赤帯
1課～13課（前半）

◆学習者：4人

◆ボランティア：3人

- ・ほぼ全く日本語が分からない学習者向け。
- ・説明は英語を交えて行っていた。

初級Ⅱグループ

◆教科書

みんなの日本語Ⅰ 赤帯
14課～25課（後半）

◆学習者：3人

◆ボランティア：2人

- ・説明はほぼ日本語だがたまに英単語も用いていた。
- ・説明→リピートの流れで授業が進んでいた。



初級Ⅲグループ

◆教科書

みんなの日本語Ⅱ 青帯

◆学習者：5人

◆ボランティア：4人

- ・説明は日本語のみ
- ・教科書の内容に関連した話題を交えながら授業を進めていた。



中級

◆教科書

みんなの日本語 中級Ⅰ

◆学習者：1人

◆ボランティア：1人

- ・1対1なので、発言の場面が多かった。
- ・初級Ⅱの内容を復習しながら、授業が進んでいた。



会話クラスは、名前の通り会話を行うクラスです。これまで紹介した他のクラスとは少し違い、教科書にあまり頼ることなく授業が進められていました。この日は、学習者4人とボランティア1人の5人で活発に会話や議論が繰り広げられていました。見学のために会話クラスの教室を訪れた際、私自身も話す機会をもらいました。簡単に自己紹介をした後、学習者のみなさんからの質問に答えました。学習者4人の日本語レベルにばらつきがあるように感じましたが、どの方も熱心に話を聞いてくれ、楽しく一緒に話をすることができました。

上級のクラスも、文法学習のクラスとは違った形で授業が行われていました。このクラスの特徴は、教科書を使わないことです。教科書の代わりに、授業者（ボランティア）が新聞や雑誌などから探して教材を用意します。この日は学習者3人とボランティア2人で議論を交わしていました。

3. 調査から見えてきた課題

今回の日本語講座の調査では、教室の実際の姿を見ることができましたが同時に、さまざまな課題が見えてきました。

中でも大きいのは、「学習者1人1人のニーズが違うため、それに対応しきれない」ということです。みよし市日本語講座のようなボランティア主体の教室では、学習者が毎回来る保証がありません。加えて今年度は、コロナウイルスの影響で、教室が3か月間中止されてしまいました。そのため、ニーズに対応するよりも、スケジュール通りに学習を進めることを優先せざるを得ません。この課題は、教室を運営するボランティアだけでは解決は難しいので、主催のみよし市と共同して教室システムを改善する必要があると感じました。

会話

- ◆教科書
会話クラス独自のテキスト
- ◆学習者：4人
- ◆ボランティア：1人
- ◆文法ではなく、会話することに重点を置いたクラス。
- ◆学習者4人の日本語レベルにばらつきがあるように感じた。

上級



- ◆教科書 なし
→授業者が新聞や雑誌などから教材を探して、事前にPCで配布
- ◆学習者：3人
- ◆ボランティア：2人
- ◆何か1つの話題について議論をするためのクラス。

見えてきた課題

- ◆学習者一人一人のニーズが違う
 - ・1人1人に合わせるときりがない
 - ・毎回来るとも限らない
 - ・コロナウイルスの影響で3ヶ月間中止となった



スケジュール通りに学習を進めるしかない
少人数制のため個人に重点を置くことができるが、それでも対応できないこともある

東郷町日本語教室（愛知郡東郷町）

吉野愛菜

1. 調査方法

今回の調査活動では、東郷町日本語教室代表の原田一郎さんにメールにてアンケートをお送りし、お答えいただきました。

調査方法

◎調査日時 9月21日(月)

◎調査協力 東郷町日本語教室 代表: 原田一郎さん

◎調査方法 アンケート調査

2. 基本情報

東郷町日本語教室は、東郷町と東郷町国際交流委員会(ティア)による教室です。

場所はイーストプラザいこまい館2階の町民活動センターと会議室です。

毎週日曜日の午前 10 時から 11 時半の時間帯で開講されています。

基本情報

主催: 東郷町、東郷町国際交流協会(TTIA ティア)

場所: イーストプラザいこまい館 2階
(町民活動センター、会議室A,B)

日時: 毎週日曜日 午前10:00~11:30



写真出典: https://www.town.aichi-togo.lg.jp/kurashi/kyodo/kyouiku/bunka/ikokusaikouryuu/nihongo_2019.html

3. 基本情報(2)

東郷町日本語教室は、2008年1月20日に東郷町より委託され、始まりました。

教室の対象者は、16歳以上の東郷町在住・在勤の外国の方で、受講料は教科書代のみです。

基本情報(2)

設立: 2008年1月20日 (東郷町の委託を受け実施)

対象者: 16歳以上の東郷町在住・在勤の外国人

学期: 前期(6月~10月)15回・後期(10月~2月)15回

受講料: 教科書代のみ(『みんなの日本語 初級1または2』(各2,750円))

4. 学習者

学習者については、出身国別に見ると、10年前にはブラジル出身の方が最も多かったのに対し、現在はベトナム出身の方が最も多いです。学習者がそれぞれ1名の国は年度によって変化しているそうです。

世代別に見ると、20代30代の学習者のほとんどは日本企業への実習生で、40代以降は定住者の方が多いそうです。

学習者(人数内訳)

〈出身国別〉
・ベトナム(15)
・インドネシア(6)
・中国(4)
・ブラジル(2)
・カンボジア(1)
・ウガンダ(1)
・トルコ(1)
・パラグアイ(1)

〈世代別〉
・20代(18)
・30代(7)
・40代(3)
・50代(3)
・60代(2)

※上記人数は実出席者数(登録者数は64人)

5. クラス分け

東郷町日本語教室は3クラスに分かれて授業が行われます。クラス分けは申込時のインタビューを通して行われます。判別が困難な時には簡単な筆記テストを行ったり、授業に入ってから担当教師間で調整が行われることがあります。

クラス分け

◎A・B・Cの3クラス制

申し込み受付時にインタビューを通してクラス分けを行う。

BかCかの判別が困難なときは、簡単な筆記テストを行う。

授業に入ってから、担当教師間で調整を行うこともある。

6. 授業内容

授業内容はクラス別で内容が異なります。ひらがな、カタカナから始まり、クラスが上がるにつれ、会話中心の内容に変わります。また、東郷町日本語教室では初級内容を取り扱っているため、日本語能力試験3級以上の対策の希望者には中級を教えているボランティア教室を紹介しています。

授業内容(クラス別)

授業内容:基礎的な日常会話・読み書きの演習

◎Aクラス:ひらがな・カタカナ、日常挨拶、時間や場所等の聞き方

◎Bクラス:形容詞・動詞の活用、基本的な文法+正しい言葉の形

◎Cクラス:会話中心、語彙の幅を広げる

7. 文化交流活動・生活相談

東郷町日本語教室では日本語学習以外にも、様々な文化交流活動を通じて、学習者に日本の文化や暮らしを知る機会を提供しています。こうした活動を通じて、教師の方々も日ごろの授業では得られない一体感を覚えられるそうです。また、日本に来たばかりの学習者からは病院や避難場所、役場に関する書類について等、様々な相談があり、可能な限り対応しています。

文化交流活動・生活相談

・文化交流活動による、日本の文化や暮らしを知る機会の提供

例)夏祭りに参加し住民と一緒に踊る、体操祭りでゲームをする、交流会で抹茶を飲んだり、折り紙の体験をする、、、等

・学習者の生活相談

例)「子どもの歯の治療にはどの病院がいいですか。」

「住んでいるところの避難場所はどこですか。」

「この書類は役場に聞けばいいですか。、、、等

8. ボランティア

ボランティア教師の方は、子どもの世話から離れた主婦の方をはじめ、仕事を退職された方、正規の日本語教室で教える前の準備段階の方がいらっしゃいます。養成講座修了等の資格を持っていない方も、授業補佐として活躍しています。

ボランティア(人数内訳)

<ボランティア教師>

- ①愛知教育大学の卒業生 1名(設立当初より参加)
- ②日本語講師養成講座(420時間)修了者 2名
- ③地方公共団体(愛知県、日進市等)が実施する日本語教育研修
受講者 3名

<授業補佐>

- ④資格を持たない人 5名(授業補佐)

9. 教室の現状と課題

東郷町日本語教室では、教室開始時期には多くの登録者の方がいても、徐々に欠席者が増えてしまうという現状があるそうです。こうしたことから、学習者間で出席回数のばらつきが出てしまい、授業の進行に支障をきたしてしまうという課題があります。欠席の原因として、学習者の仕事が忙しくなったことや、日本の生活に慣れてしまったこと、授業内容の問題等が考えられています。こうした問題に対処するため、教室の有料化や雇用主との連携を深めるなどの意見が寄せられています。

現状と課題

◎教室の開始時期には多くの登録者がいるが、だんだんと欠席者が増える

→学習者間で出席回数のばらつきが出てしまうことで、授業の進行に支障をきたす

欠席の原因:仕事が忙しい、日本の生活に慣れてきて困らない、授業がつまらない...?

対策:有料化?雇用主との連携?

→学習者の意志次第にボランティア教室の限界がある

しかし、代表の原田さんは「熱心に勉強をして日本語を上達させていく学習者と会話をしたり、母国に帰る学習者から感謝されるときにこの活動のやりがいを感じる」とおっしゃっていました。今回の調査活動を終えても、今後の東郷町日本語教室の活動に注目していきたいと思います。

豊田市国際交流協会 TIA にほんごひろば(豊田市)

内野雄斗

私は豊田市にある日本語教室、「TIA にほんごひろば」にて調査を行いました。

教室の目的は主に3つあります。1つ目は、外国人に学ぶ機会を得てもらう。2つ目は、日本人に「外国人にとって分かりやすいコミュニケーション」の仕方を学んでもらう。3つ目は、日本語を使って交流をし、日本人・外国人にとって住みやすい地域にすること。以上の3つが教室の目的です。

教室形態についてです。日本語パートナー(ボランティア、※以下 JP)の方に加えて、プログラムコーディネーターの方が進行役として教室をリードしてくれます。学習対象者は15歳以上の日本語が全く話せない人です。プログラムコーディネーターやJPと一緒に会話をする形で日本語を勉強していきます。8/29~10/10の教室のテーマとして「日本語で自己紹介ができるようになる」を掲げています。そしてこの教室も含めた大きなテーマに「日本人との会話から、日本人が普段話す日本語を学び、地域で生活する上で、必要な最低限の日本語を身につける」があります。

先ほど教室の進行役として挙げたプログラムコーディネーターについて説明します。専門の養成講座を修了した方がプログラムコーディネーターとして活動します。役割は主に3つです。1つ目が「教室参加者をつなぐ」です。日本語教室の参加者の交流の場所づくりと日本語能力の向上を促します。2つ目が「教室関係者をつなぐ」です。教室には参加していませんが、学習者と交流がある可能性がある教室関係者(地域住民や所属企業の関係者など)と外国人学習者の交流の場をつくり出します。3つ目が「教室間をつなぐ」です。他の教室で活動するプ

教室の目的

1. 外国人に日本語を学ぶ機会を得てもらう。
2. 日本人に「外国人にとって分かりやすいコミュニケーション」の仕方を学んでもらう。
3. 日本語を使って交流をし、日本人・外国人にとって住みやすい地域にすること。

教室形態

- ▶ **参加者**：プログラムコーディネーター・日本語パートナー(ボランティア、※以下 JP)・学習者
- ▶ **学習対象者**：日本語が全く話せない人(15歳以上)
- ▶ **活動内容**
プログラムコーディネーターやJPと一緒に会話で交流しながら日本語を勉強する。
- ▶ **教室のテーマ(8/29~10/10の期間のテーマ)**
「日本語で自己紹介ができるようになる」

プログラムコーディネーター

- ▶ **役割**
 1. 教室参加者をつなぐ
 2. 教室関係者(地域住民など)をつなぐ
 3. 教室間をつなぐ
- ▶ **職務**
教室の開設・運営・評価を行い、クラス活動の進行や、学習者・JPのコミュニケーションのサポートをする。

ログラムコーディネーターとの連携をはかります。職務として教室の開設・運営・評価を行います。さらにクラス活動の進行や学習者と JP のコミュニケーションのサポートもします。

学習者について説明します。調査させていただいた時期の学習者の人数は全体で 17 名でした。国籍としては中国、ブラジル、インドネシア、マレーシア、フィリピンの学習者の方が参加していました。対象者の日本語レベルとして先ほど「日本語が全く話せない人」と紹介しましたが、これには基準が設定されています。事前に試験を行い、0 レベル（日本語を話したり聞いたりすることができない）、または 1 レベル（限られた単語を理解したり、話す・書くことができる）に該当すると判断された方が「にほんごひろば」に参加しています。

活動内容と特徴について説明します。まず市販の教科書は使用しません。その代わりに毎回決められたテーマに沿ったオリジナルの教材を用いて、学習者と JP がお互いのことを話すことで日本語を学習します。授業を通じて、あいさつや自分のことを簡単に日本語で話せることができるようになることを目指しています。そのため、正しい文法の習得や日本語能力試験などの対策を目的とした内容は扱っていません。

最後に、このスライドは私が実際に見学させていただいた日の板書です。テーマは「私の一日」でした。一日の予定を時間とともに紹介しあいました。また、当日はオンラインで参加している学習者の方もいました。クラスが終わった後は JP とコーディネーターで、その日の気づきや反省点をシェアしていました。そのようにして、クラスをよりよいものにしていくための工夫がされていました。

学習者について

- ▶ 人数は17名で、国籍は中国、ブラジル、インドネシア、マレーシア、フィリピン
- ▶ **日本語レベル**：日本語が全く話せない人

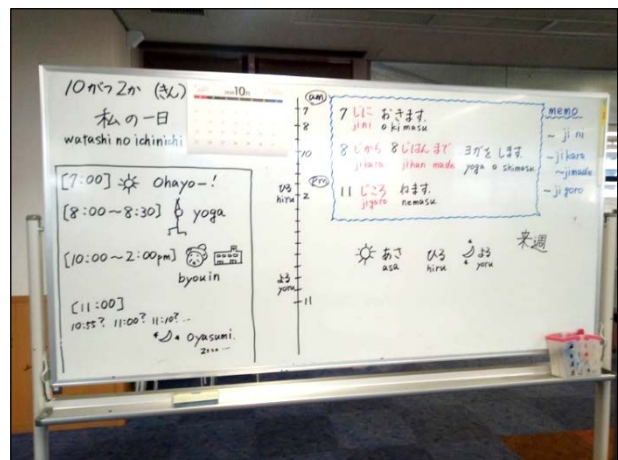
試験を行い、

0レベル※（日本語を話したり聞いたりすることができない）、
1レベル（限られた単語を理解したり、話す・書くことができる）
に該当する方のこと。

※とよた日本語学習支援システム独自の日本語レベルを測るものさしに沿ったもの

活動内容・特徴

- ▶ 教科書は使わない。
- ▶ 学習者とJPで毎回決められたテーマで会話をする形で日本語を学んでいく。
- ▶ あいさつや自分のこと・ものを簡単に日本語で話せることができるようになることを目指している。
- ▶ 正しい文法の習得や日本語能力試験などの対策を目的とした内容は扱わない。



感想

実際に見学させていただいて、学習者の皆さんが楽しみながら学習している様子をうかがうことができました。中国国籍の学習者の方が自分で日本語の教科書を持ってきて、何とか伝えようとして努力している姿が特に印象に残りました。**JP**の皆さんやプログラムコーディネーターの方も、言葉だけでなくジェスチャーなど用いて、丁寧に分かりやすく日本語を教えていた姿がとても勉強になりました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

碧南市日本語教室（碧南市）

菊本悠未

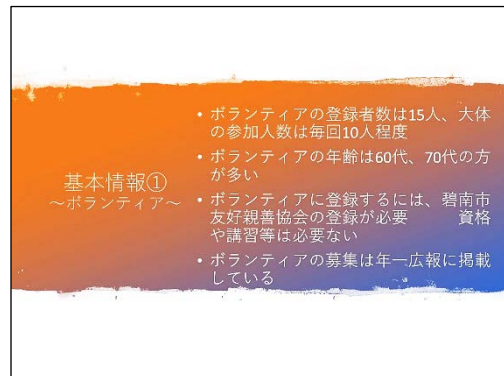
1. ボランティア

ボランティアの登録人数は15人程度ですが、そのうち毎回10人程度が参加しています。

ボランティアの年齢層は、60～70代の方が多く、若い人はあまりいません。

ボランティアに登録するには、「碧南市友好親善協会」の登録が必要ですが、資格や講習の受講等は必要ではありません。

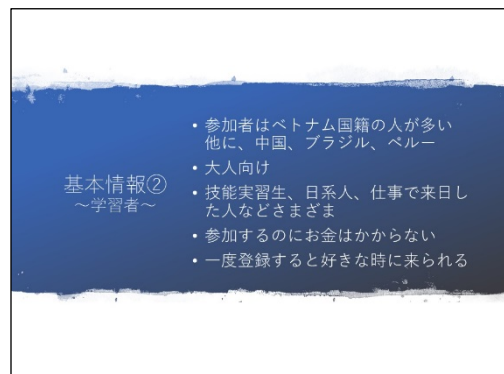
ボランティアの募集は、市の広報で年に一度募集をかけています。



2. 学習者

参加している学習者の国籍はベトナムが一番多く、他に中国、ブラジル、ペルーの方などがいます。大人向けの日本語教室なので、大人の方が大半です。子供向けの日本語教室は別で開催しています。（後述参照）技能実習生や日系人、仕事で来日している人など様々な資格で来日した方が参加しています。

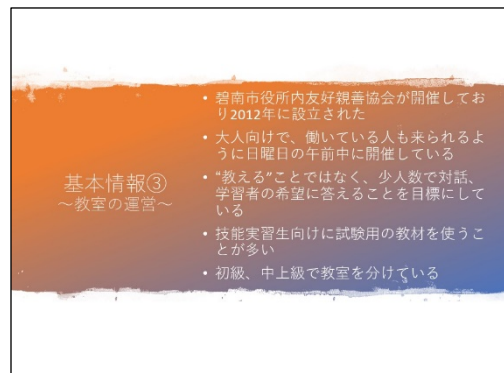
また、参加するのにお金はかからず、一度登録が完了すると好きなときに教室に来ることができます。



3. 教室の運営方法

碧南市日本語教室は、碧南市役所内にある友好親善協会の主催で2012年に開始されました。前述したように、大人向けの教室であるため、働いている人が参加しやすい時間帯である日曜日の10:00～11:30の時間で参加しています。

教室では、「教えること」に重点をおくのではなく、「居場所作り」に重点をおいており、そのため、少人数での対話を中心に行っています。また、学習者の要望や困ったことをきく場としても機能しています。



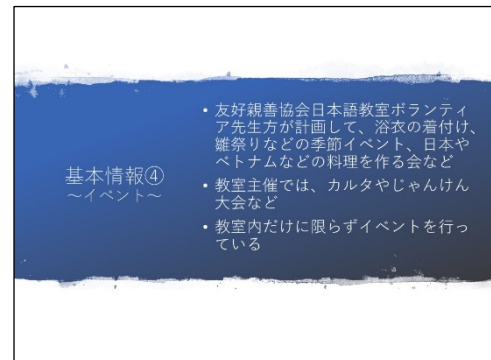
技能実習生の学習者が多いため、日本語能力試験対策の教材を使うことも多いです。教材は協会が所有しているものに加えて、ボランティアが個人で持っているものを使用しています。「みんなの日本語」を中心に学習者の要望に沿った教材を使っています。

教室は、初級と中・上級でクラスを二つに分け、2～4人ほどの学習者に対し一人の先生がつきます。

4. イベントなど

友好親善協会日本語教室ボランティアの先生方が計画して、浴衣の着付け、ひな祭りなどの季節イベント、日本やベトナムなどの料理を作る会などを例年行っているそうです。ボランティア向けに「やさしい日本語」の講座なども開催しています。

他にも教室内で、かるたやじゃんけん大会などを行うこともあります。教室の終了後、ボランティアと学習者でご飯に行くことも多々あり、交流を深める場となっています。

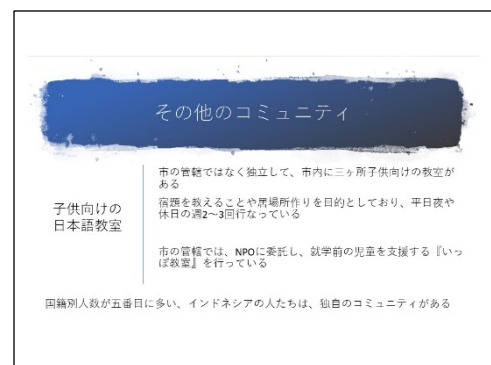


5. その他のコミュニティ

大人向けの日本語教室だということでしたので、市内にある子供向けの日本語教室についても伺いました。市の管轄ではないものの、市内に三か所の子供向けの教室があります。そこでは、宿題を手伝うことや、居場所づくりを目的としており、平日の夜や休日の週 2～3 回開催しているそうです。

市の管轄では、NPO に委託し、就学前の児童を支援する「いっば教室」が開かれています。

また、国籍別人数が五番目に多い、インドネシアの人たちは独自のコミュニティがあるそうです。



子供向けの教室のうちの一つの教室にも、見学にいきました。

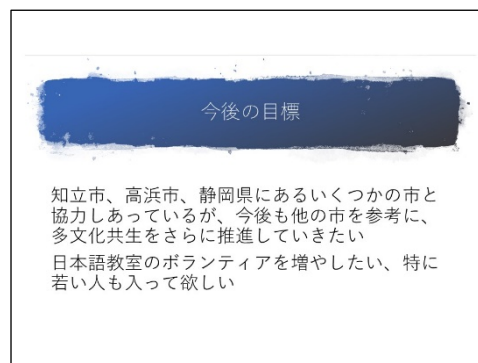
休日のクラスは親子での参加が多く、ボランティアが用意した教材やホワイトボードを用いて授業を行っていました。参加人数は大人向けより少なく全体で 15 人程度です。少人数で分かれるのではなく、全体で授業を行っていました。

平日夜のクラスは、宿題やテストなどの解説を行っていました。日本語を教えることだけでなく、中学レベルの勉強を教える能力が求められると感じました。

6. 今後の目標

現在、知立市、高浜市といった近隣の地域や、静岡県にあるいくつかの市と交流がありますが、さらに深めていくことと、他の市も参考に多文化共生をさらに推進していくことを目標にしています。

また、日本語教室のボランティアを増やすことも目標です。特に若い人の数が少ないという問題点があり、若い人がボランティアとして参加してくれる方法を模索していきたいそうです。



7. 調査を通して

地元である碧南市の日本語教室には、調査前から参加させてもらっていましたが、参加しているだけでは気づけない運営上の悩みなど、調査によって新たにたくさんを知ることができました。

特に印象深かった点は、市内にある子供向けの日本語教室の話と、教室の問題点についてです。子供の日本語教室については、今回の調査をするまで全くその存在を知らず、自分が参加している教室が大人向けだということも認識していませんでした。子供向けの日本語教室も見学させてもらったことで、さまざまな日本語教室がどういった意図でその教室の運営方法を選択しているかということにもより深く思考するきっかけとなりました。

教室の問題点は、「ボランティアに高齢者が多い」ということでした。自分も参加していて感じていたことでしたが、発表を聞き、碧南市の日本語教室だけの問題点ではなく、多くの日本語教室が感じている悩みなのだとわかりました。このことについて授業で話し合ったこともありましたが、易々と解決策がでることもなく、根深い問題なのだと感じ印象に残っています。

コロナウイルスの関係で今年度はなかなか教室の開催も難しい状況でしたが、今回学んだことを活かし、来年度も積極的に参加していきたいと思いました。

豊川市国際交流協会日本語教室（豊川市）

小林明日香

豊川市の日本語教室は公益社団法人豊川市国際交流協会によって運営されています。1996年に開始し、毎週火曜・水曜・木曜は10～12時の昼クラス、土曜は18～21時の夜クラスが豊川市勤労福祉会館で行われています。費用は1期（18回+交流会・課外活動）、1500円です。

この教室の目的は、生活者としての外国人が無事に安心して暮らしていけるような心の拠り所を提供し、楽しく元気な活動を通して日本語を学ぶことです。

豊川市国際交流協会 日本語教室

- ・主催者 : (公財)豊川市国際交流協会
- ・開催場所 : 豊川市勤労福祉会館
- ・開催日時 : 火・水・木 10～12時
土 18～21時
- ・設立 : 1996年
- ・費用 : 1期(18回+交流会,課外活動) 1500円
- ・目的 : **生活者**としての外国人が**無事に安心して**暮らしていける
——— ような**心の拠り所**を提供し、**楽しく元気な**活動を通して日本語を学ぶ

豊川市の日本語教室には14～15か国の学習者が参加しており、その大半がブラジル国籍です。しかし近年ベトナム国籍の方も増えています。

学習者は申し込みの際、在留カードの提示が必要となっており、所持していない人は参加できません。これは身元の確認をし、有事の際に連絡がつくようにするためです。

学習者

- ・14～15の国の学習者が参加
ブラジル国籍が大半だが、近年ベトナム国籍が急増
- ・申し込みの際には在留カードの提示が必要
(在留カードを持っていない人は不可)
→身元の確認、何かあった時に連絡がつくように

豊川市の日本語教室は定員が150名と多いため、クラスが20クラスに分かれています。このクラス分けは申込時に面接で決定します。難しすぎるレベルは学習者の自信を喪失させ、学習が長続きしないので、レベル分けは重要です。

以前はレベル分けのためプレイメントテストを使用していましたが、現在は本人の希望を確認した後、実際のテキストなどを用いて判断しています。

教室活動

クラスは申込時に面接でレベルを決定

レベル分けは必須

- ・定員が150人と多い
- ・難しすぎるレベル→自信を無くし続かない
- ・以前：プレイメントテスト
現在：本人の希望確認→実際のテキストで確認

レベルは入門、初級、中級、N1、N2 があり、それぞれ使用されているテキストが異なります。

入門クラスのリーダーはペルー出身でポルトガル語の分かるボランティアの方が務められています。母語が分かるボランティアの配置は学習者に安心感をもたらし、定着率の向上に繋がったそうです。

また N1、N2 クラスでは、生活者のための日本語教室という目的に沿った教室活動のため、試験対策は行わず、そのレベルに対応した学習を行っています。

ボランティアは1 期中同じクラスを担当し、ボランティアの負担軽減のためシフト制をとっています。そのため学習進度などは、同じクラスのボランティア同士で個別に連絡を取り合っています。

1 期が終了した後、研修を開催して振り返りや意見交換を行い、次期の計画を立てています。

また学習者同様、ボランティアの数も多いため、役割を決め、きちんと統制が取れる環境づくりを心掛けておられます。

ボランティア研修に関しては、スキルアップ研修、日本語ボランティア養成講座研修など最低でも年に2 回開催されています。この他にも外部の研修に自ら参加されるボランティアの方もいるそうです。

日本語教室では多文化共生の取り組みとして七夕、節分などの交流会や防災訓練、そして年に1 回ワールドフェスティバルを開催しています。食べ物や歌、ダンスなどの楽しい時間を一緒に過ごすことで、お互いを理解することを目的としています。

入門クラス

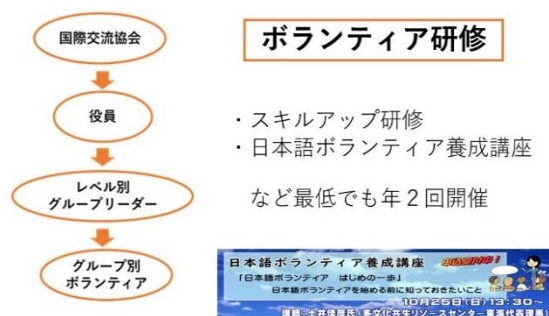
- ・母語が分かるボランティアを配置
→学習者の安心感に繋がり定着率が向上
- ・入門クラスのリーダー：ペルー出身のボランティア
(ポルトガル語)
- ・オリジナルテキストはボランティアを中心に作成

N1・N2クラス

- ・そのレベルの学習を行うというだけで、試験対策は行わない

ボランティア

- ・ボランティアは1期中同じクラスを担当し、シフト制
- ・学習進度などは同じクラスのボランティア同士で個別に連絡しあう
- ・1期終了後研修を開催して振り返りや意見交換を行い、次期の計画を立てる



多文化共生

交流会



七夕・お月見・
節分など

ワールドフェスティバル



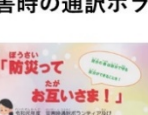
食べ物や歌、ダンス
など楽しい時間を
一緒に過ごすことで
お互いを理解する

防災訓練



その他の活動としては、ごみの分別講座や市と連携した税務相談などを行っています。

災害時の通訳ボランティア養成講座



社会福祉協議会、
穂の国ボランティアネットワークと共同で

学習者が支援される側から支援する側
になってほしいという気持ちから
日本語教室を中心に参加を呼びかけ

その他の活動

- ・ 税務相談
- ・ ごみの分別講座

豊川市の日本語教室は2020年10月3日から教室活動を再開します。基本的には対面授業で行いますが、初級2のクラスのみ先生と学習者の意向からオンラインで行われます。また感染対策のため、定員は4分の1の40名へ減らし、教室も以前より広いものを使用して授業を行う予定です。

豊川市国際交流 協会日本語教室

勉強する時のやくそく

ウイルス対策

・マスクを必ずしてください。

・体調が良くない時は、休んでください。

・手を消毒してから、教室に入ってください。

・換気してください。

・いつも名前、電話番号、体温を書いてください。

・大きな声で話さないでください。

・人の近くで話さないでください。

・離れて座ってください。

※休む時は、電話をしてください。

（公財）豊川市国際交流 協会 Tel0533-83-1571

豊川市国際交流協会日本語教室では、学習者が社会と共存していけるようなサポートとともに、心の拠り所を提供されている点が大変印象に残りました。そのため本調査によって、地域における日本語教室の重要性を再確認することができました。最後に、本調査を進めるにあたり、貴重なお話を聞く機会を下さった豊川市国際交流協会の皆様に厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表します。

にほんごきょうしつ・豊橋ふれあい日本語教室（豊橋市）

原優花

私は今回、愛知県豊橋市の豊橋市国際交流協会（TIA）が運営する2つの教室「にほんごきょうしつ」と「豊橋ふれあい日本語教室」についてお話を伺いました。

調査は2020年10月10日に電話にて行いました。ご協力いただいたのは、豊橋市国際交流協会の田中宏直様です。

調査概要

実施日：10月10日（金）14時

方法：電話取材

回答者：

豊橋市国際交流協会 田中宏直様



まず、二つの教室について概要を説明します。

一つ目の教室「にほんごきょうしつ」は、豊橋駅前のビルで行われています。時間は様々で、教科書を用いたグループレッスンを行う土曜日と日曜日の15:30から17:00、日曜日の13:00から14:00の会話クラス、主にマンツーマンで行う平日の10:00から12:00に開催されています。

二つ目の教室「豊橋ふれあい日本語教室」は、アイプラザ豊橋という施設で行われています。日時は、木曜日の10:00から11:30に開催されています。

TIAが運営する二つの教室

①にほんごきょうしつ ②豊橋ふれあい日本語教室

主催：豊橋市国際交流協会（TIA）ボランティア

場所：豊橋駅前のビル

アイプラザ豊橋（地域の施設）

日時：土日15:30から17:00

木曜日10:00から11:30

日曜13:00から14:00（会話）

平日10:00から12:00



これら二つの教室は、学習者のニーズに応えるべく設立されました。もともとTIAでは、「日本語講座」という教室が開かれていました。この教室は入門・初級レベルに対応していて、毎週土曜日に開講されていました。そこで、週末に教室に通えない学習者や、入門・初級レベルを学習し終えた学習者のニーズに応えたいというボランティアの方々の思いから、これらの教室が設立されました。

ニーズに応じて設立された教室

日本語講座（土曜日開講）入門・初級

週末に通えない
学習者のニーズ

入門・初級を勉強し
終えた人たちの受け皿

豊橋ふれあい
日本語教室

にほんごきょうしつ

それぞれの教室には、どのような人たちが参加しているのでしょうか。

まず、多くのボランティアが活動しており、およそ60名の方々が参加されているそうです。現在、高校生から7、80代の方まで、幅広い年齢層の方々が活動しています。

つぎに学習者は、ブラジルにルーツを持つ人々が圧倒的に多いそうです。最近ではフィリピンやベトナムからの技能実習生をはじめとした学習者も増えています。

・ボランティア

およそ60名が活動。
外国語力は問わない。
現在、高校生から7.80代の方まで幅広い年齢層の方が活躍中。
養成講座を受けてから活動を始める人も。

・学習者

ブラジルにルーツを持つ人が圧倒的に多い。
次いでフィリピン、ベトナム。

TIA では、定期的にボランティア養成講座も開催されています。教室で行われている活動に沿った内容のもの他に、小学校で外国人児童を対象に行われるサマースクール(夏休みの学習支援事業)にボランティアとして参加したい人向けの講座も行われています。これらの講座を受講したことをきっかけにボランティアとして教室に参加することを決める人も一定数いるそうです。

日本語ボランティア養成講座

活動のニーズに合わせた講座を開講している。

- ・教科書を用いたグルーブレッソン向け
- ・会話クラス向け
- ・サマースクール(小学校での外国人児童への学習支援事業)向け



昨今のコロナ禍における影響についても伺いました。感染拡大にともない、令和元年度の2月末からしばらくの間休講措置を取っていましたが、同年7月より教室が開講されました。入室の際の検温、マスク着用、アルコールでの消毒をはじめとした対策に加え、定員の削減も行っているとのこと。

(※緊急事態宣言発令を受け、1月18日より再度休講措置がとられています。7)

ネガティブな影響がある一方で、授業のオンライン化によって時間が出来た大学生が新たにボランティアとして参加するなど、ポジティブな変化もあったそうです。

コロナ禍における影響

- ・令和元年度2月末から休校措置⇒7月より再開。
- ・定員を5,6割に制限。
- ・大学生など、新しくボランティアとして活動する人が増えるといったプラスの影響も!



TIA の各教室が抱えている問題をお伺いしたところ、教室に参加を希望する学習者の方が多く、受け入れられないとの事でした。豊橋市は、愛知県のなかでも名古屋市について在留外国人がたくさん住んでい

現在抱えている問題

- ・学習者が受け入れきれない。
...申し込みがあっても断る場合も。
- ・ボランティアの人数不足
...土日のグルーブレッソンは、1クラス(平均8から10人)を1人でもっている事も少なくない。

豊橋市は名古屋市に次いで在留外国人が多い市

7 「にほんごきょうしつ」公益財団法人豊橋市国際交流協会

(<http://www.toyohashi-tia.or.jp/tia-new-nihongo.html?20200905>)

最終閲覧日 2021/02/02

る市なので、ボランティアが 60 人程度も活動していても、受け入れきれないほどの学習者がいます。

このように、ボランティアの人数不足も問題として挙げられていました。なかには、なかなか休めない人や、1 人で 8~10 人のクラスを持たざるを得ない人もいて、ボランティアの負担が大きくなってしまっています。

最後に、地域日本語教室を開催する意義についてお伺いしました。1 つ目に、様々な背景や動機をもった学習者それぞれのニーズに合った日本語を教えられる場所であること。2 つ目に、日本人と在留外国人の異文化交流が行える場所であり、多文化共生社会の形成に寄与することが出来ること。3 つ目に、在留外国人の「居場所」として教室が機能し、国籍や母語、宗教などに関係なく、市民として「横のつながり」が形成できる場を提供出来ること、とのことでした。

地域日本語教室の意義

- ・ ニーズにあった日本語を教えられる
： 様々な背景、目的をもった学習者の存在
- ・ 日本人と在留外国人との異文化交流
： 多文化共生社会の実現
- ・ 居場所としての教室
： 市民としての「横のつながり」の形成

感想

私は豊川市の国際交流協会が主催する日本語教室でボランティア活動をしています。他の市の教室がどのような状況かを知る事が出来る機会はなかなか無いので、隣の市であり多くの在留外国人が暮らす街である豊橋市の教室について調査を行いました。豊橋市国際交流協会が主催する教室が 2 つあるという事に驚きましたが、学習者のニーズをくみ取ったボランティアの意思で教室が開講されていたという経緯を聞き、素晴らしい取り組みだと感じました。

当初は豊川市との違いを比較してみようと思っていましたが、ブラジルにルーツを持つ人が圧倒的に多い事や、ボランティアも学習者も数が多く人数不足に困っている事、ボランティアの負担が大きくなっている事などは共通しており、相似しているところの方が多く感じました。

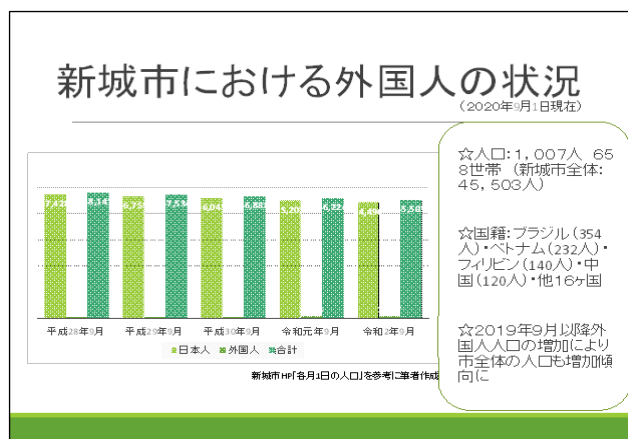
また、コロナ禍での影響をお伺いした際に、ポジティブな影響があったという回答を頂いた事がすごく印象深かったです。現在も緊急事態宣言の発令や、豊橋市や豊川市など東三河でも感染者が増加しているなど厳しい状況ですが、出来なくなった事ばかりに目を向けず、今出来る事を行っていく事が大切だと感じました。様々なお話をお伺いすることが出来、貴重な実りある機会だったと感じています。

新城市日本語教室（新城市）

鈴木陽香

1. 新城市における外国人の状況

新城市には現在 1,007 名の外国人の方がいます（2020 年 9 月 1 日時点）。この数は市の人口の約 2.2%に該当し、年々その割合は増加傾向にあります。新城市に居住する外国人人口を国籍ごとに見て見ると、ブラジル人 354 名、ベトナム人 232 人、フィリピン人 143 人、中国人 123 人、その他 16 カ国程度の国籍の方がいます。



2. 調査方法

本調査はホームページや Facebook の情報と、9 月 23 日に日本語教室の見学をさせていただいた際に実施したインタビューに基づいています。

3. 日本語教室

新城市日本語教室は毎週水曜日の 19 時半から 21 時まで勤労青少年ホームで国際交流協会が主催となり実施されています。参加費は無料で Facebook などを通して参加者を募集しています。すでに教室に通っている友人からの紹介などで日本語教室に来るようになった方もいます。

調査を実施した 2020 年 9 月時点でブラジル人、ベトナム人、中国人の計 17 名で、21 歳から 40 歳程度の技能実習生や勤務している方々が参加していました。

日本語教室に来ている学習者の目的は多様で、「仕事で日本語を話したり理解出来るようになりたい」、「日本語能力試験に合格したい」、「生活の中で日本人と話して仲良くなりたい」などが挙げられました。

授業はクラスごとによって異なります。クラスは日本語のレベルや学習者の目的(試験・会話・文法など)に応じて分けており、ボランティアの方々は 1 回で完結する内容を目指して授業を行っ

- ☆参加者: 合計17人(2020年9月現在)
・国籍: ブラジル・ベトナム・中国
・年代: 21~40歳くらい(実習生・勤務している方が大多数)
- ☆参加料: 無料
- ☆授業内容: 3つのクラスに分割
・レベルや目的別(試験・会話・文法など)
・1回の授業で完結する内容
- ☆参加者の目的
・仕事で日本語を話したり理解したりできるようになりたい
・日本語能力試験に合格したい
・日本人と話せるようになりたい

てくださっていました。使用教材は、みんなの日本語や、日本語能力試験対策のテキスト、漢字の問題など様々でした。

日本語教室に参加してくださっているボランティアの方は、日本語教授経験や資格の有無はそれぞれですが、地域の外国人と関わって日本語を教えたり、生活の悩み相談や話し相手になれたりできたらいいなという思いで参加しているという話をお聞きすることが出来ました。

ボランティア

☆年代：60歳、70歳～

☆やるきっかけ・思い

- ・生活の中で外国人と出会うことが多くなった
- ・長期間在住している外国人でも日本語を話せない方が多い
- ・生活の悩みや話し相手になれたらいいな

「日本人と外国人がかかわりあえる機会がもっと欲しい」

その他にも在住外国人の方々と一緒に学ぶ AED 講習会が実施されたり、平日の昼間にも日本語教室が開講されたりしています。昼間の日本語教室は 10 時から 14 時の間の 1 時間で時間帯は先生と相談した上で実施しています。また HP や Facebook 記事の多言語情報化がされています。

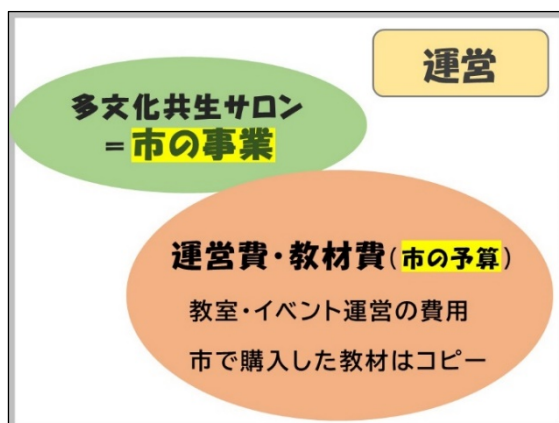
今回の日本語教室の調査を通して、日常生活の中に日本人と外国人の交流する機会がなかなかないということがわかりました。長期間日本に住んでいる外国人の方でも日本語を使用する機会がなく、日本語が上達しなかったり、困ったことがあっても相談できなかったりしているようなので、日本語教室が日本語を学ぶ場のみならず、交流する場となっていけばいいなと感じました。また日本語教室のことを外国人のみならず日本人にも知ってもらい、もっと気軽にたくさんの人々が参加し、日本人と外国人の交流が盛んに出来るようになってほしいです。私自身も今後、日本語教室に積極的に参加したいと思います。

四日市市多文化共生サロン(三重県四日市市)

花井美咲

三重県四日市市にある「多文化共生サロン」を調査しました。四日市市には、約 1 万人の外国人が住んでいて、その大部分が日系ブラジル人やペルー人であるとされています。この「多文化共生サロン」は、四日市市「四日市市多文化共生推進室」の事業であり、市の職員が主体となり「日本語学習」「日本語学習支援」や「情報提供」、また「地域住民との交流イベント」を行っています。

「日本語教室」は、「大人向け」と「こども向け」があり、四日市市内に在住・在勤する人なら参加できます。基本的に、ボランティアとのマン・ツー・マン授業を実施しています。また、地域住民に対し在住外国人への理解を促すという目的で「やさしい日本語教室」も運営しています。また、「多文化カフェ」という交流会も行っています。



「多文化共生サロン」は市の事業であるため、運営費および教材費は市の予算から支給されます。日本語教室ではプリント教材を使用していますが、市で購入したものを印刷して、学習者に提供しているそうです。

日本語教室で日本語指導を行うボランティアの方は、2020年9月現在26名いるそうです。1つの授業ごとに500円の報酬が市から支給されています。募集は、市役所やFacebookの掲示板に募集要項を投稿、また既に登録されているボランテ



ィアさんを通じた紹介の形でも募集を行っています。ボランティア研修会も定期的に実施されているそうです。

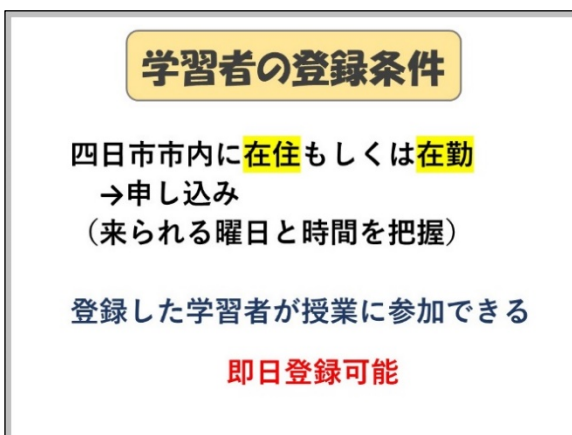
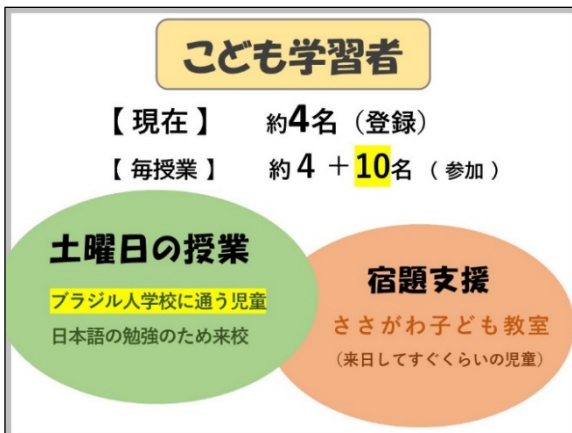
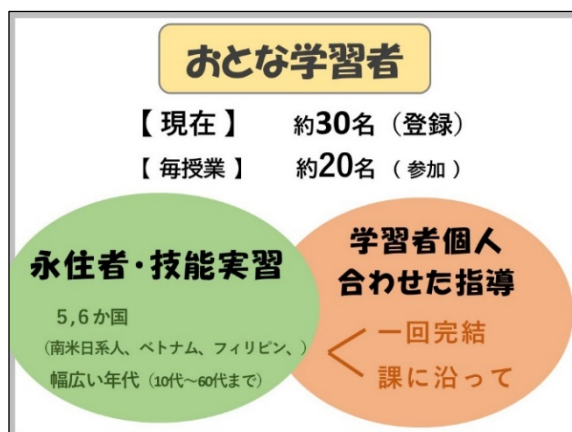
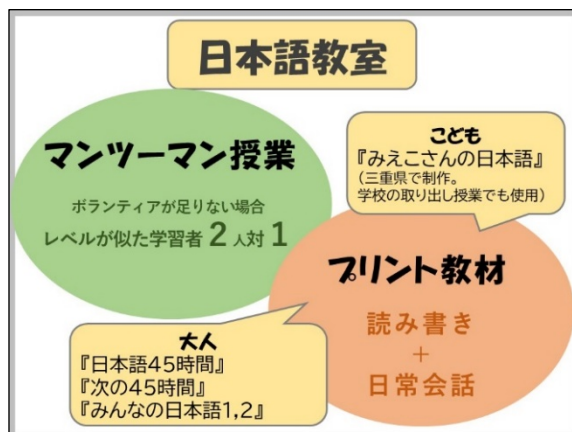
日本語教室について、授業は学習者1名に対してボランティアの方が1名のマン・ツー・マンで行います。こども向けの授業では『みえこさんの日本語』という三重県が制作した日本語指導教科書を使用し、大人向けの授業ではレベルに応じて、3種類の教材を使い分けているそうです。

大人向け授業に参加する学習者は、2020年9月現在、約30名いるそうです。毎授業、一つの教室には20名ほどが参加しています。南米の日系人が最も多く、永住者として、また技能実習生として四日市市内に勤務している人がほとんどだそうです。授業は、個人のペースに合わせ、一回完結型で進めています。

こども向けの授業には、4名の学習者が参加しています。土曜日には、多文化共生サロンの近くにあるブラジル人学校に通う生徒が追加で参加しています。日本語の指導を行うことが主となるため、学校の宿題支援は行っていないそうです。宿題支援は「さがわ子ども教室」で実施しています。

今回の授業でスムーズに学習が進むよう、学習者個人の学習進度を記入するカルテを用意しているそうです。毎回同じボランティアさんを配置することが難しいため、このような工夫されています。

また、教室に通うためには事前に登録が必要となります。条件は「四日市市内に在住もしくは在勤」している方なら誰でも登録できます。登録後、授業を受ける曜日と時間を決め、参加が出来るようになります。



日本語指導の他に、多言語による情報提供も行っています。市と連携し、公的な情報を多言語化し Facebook の掲示板に投稿しています。翻訳は市の職員が主に担当しているそうです。

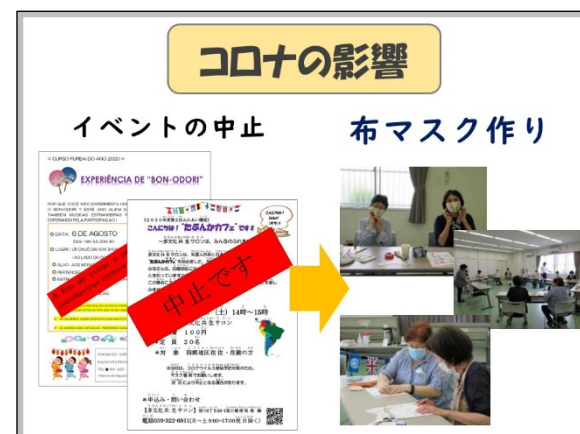
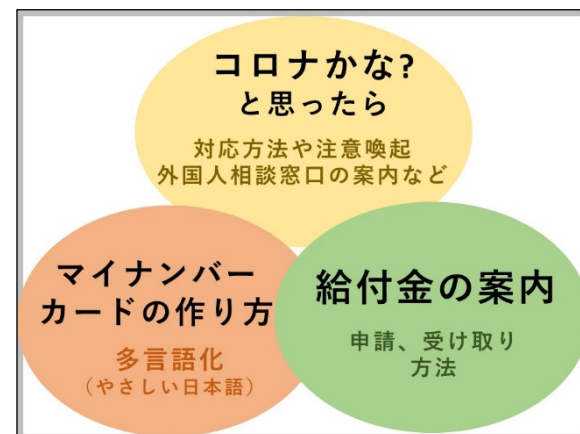
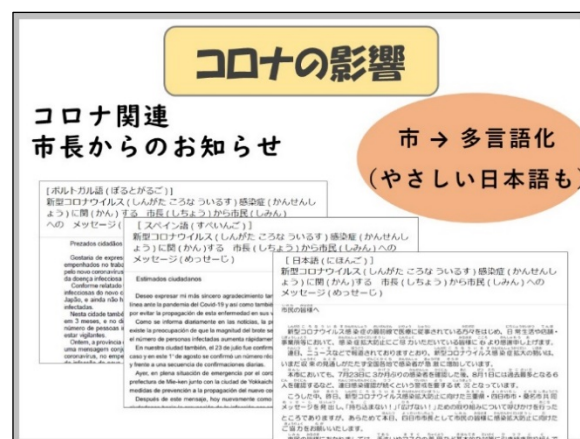
新型コロナウイルスの影響で、変更された制度や、新しく始まったサービスなどについての情報を、在住外国人の方々にもきちんと伝えるため、Facebook の掲示板を活用しているそうです。

感染の疑いがある場合に、どこに相談すれば良いのか。感染しないように、どのように予防すれば良いのか。などについてや、給付金を受け取るため・マイナポイントを受け取るために必要な「マイナンバーカード」の作り方などの情報を提供しています。

さらに、多文化共生サロンでも交流会などのイベントが中止となりましたが、布マスクを作るなどの新しい試みが行われているそうです。

新型コロナウイルスの影響で、様々な場面で良くない状況が見られていますが、前向きに捉え、新しいアイデアを考え出すのが重要だと感じました。

日本語指導だけでなく、学習者に寄り添った指導を行っている点について、今後の活動に生かして行きたいと思いました。



ワイワイにほんご・たいこうやま(富山県射水市)

高木史佳

私は、自身の出身地である富山県射水市の地域日本語教室、「ワイワイにほんご・たいこうやま」について調査しました。ビデオ会議ツールの ZOOM と電話を用いたインタビューを行いました。

1. 基本データ

「ワイワイにほんご・たいこうやま」は富山県射水市の太閤山にある地域日本語教室です。月に2回、第2・第4土曜日に活動を行っています。1998年、公益財団法人とやま国際センターの日本語ボランティア養成講座が開始されました。そして、この養成講座と富山県内の日本語教育を牽引する団体であるトヤマ・ヤポニカの支援を受け、2006年に「ワイワイにほんご・たいこうやま」が設立されました。

現在、日本語ボランティアは10名程度が参加されています。

基本データ

◎ ワイワイにほんご・たいこうやま

代表：迫田 耕治氏（太閤山日本語グループ）

活動場所：射水市立南太閤山13丁目3番地1
射水市立南太閤山コミュニティセンター

活動日時：第2・第4土曜日 19:00~20:30

2. 教室の活動目的

設立当初は、「困っている異国の入」を日本語学習支援で助けるということを目的としていました。しかし、活動を重ねていくうちに、単なる「日本語支援」だけでなく「共に学ぶ活動」をすることで、太閤山日本人住民と外国人住民との「貴重な接点」を作り、さらには両者間の「相互理解」を促すことの出来る可能性を秘めた場になりうるということに気づきました。そのため現在は、そんな役割意識を持って活動されています。

また日本語ボランティアの皆さんは上記のような4か条を意識して活動をされているそうです。これが「ワイワイにほんご・たいこうやま」の、お互いを尊重し、同等な立場で活動を行うという雰囲気につながっているのだろうと感じました。

教室の活動目的

「困っている異国の入」を日本語学習支援で助ける

▷ 「共に学ぶ活動」を通じ、
日本人住民と外国人住民との「貴重な接点」作り
▶ さらに両者間の「相互理解」へ！

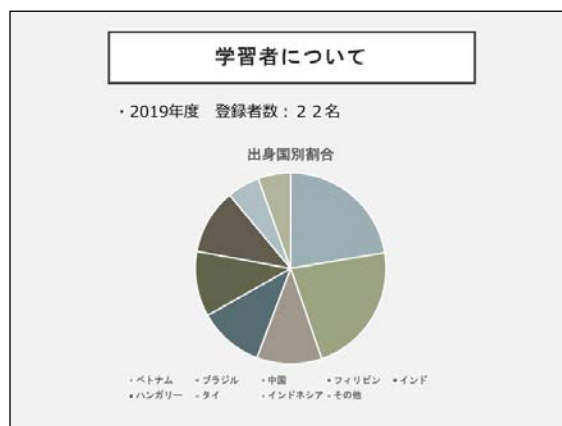
4か条 ・ 分かり合う日本語で話そう。そして互いの話を広げ、
深めよう。
・ しっかり耳を傾けて聞こう。
・ 自分のことも話そう。
・ 何より、居心地のいい場所にしよう。



3. 学習者について

登録者数は2019年度に22名いました。出身国別の割合としては、上位はベトナム、ブラジル、中国が占めていますが、国籍の幅が広いことが特徴的です。

学習者の皆さんの日本語を学ぶ動機としては、「技能実習生としての仕事のため」「在留資格取得のため」「子育て・近所付き合いのため」と人によって様々です。彼らの日本語学習における悩みとしては、日本で生活する上で起こるものが多く挙げられます。「嫁・姑問題」「子供の将来について」「家族の健康管理方法」のような日々の生活に関する悩みのほか、「役所への手続きの仕方がわからない」などと相談をされる学習者も多いそうです。その際には窓口につき添って各種手続きの手伝いをしたり、親身になって話を聞いたりするなど、学習者の悩みに寄り添い、彼らが安心して生活を送るためのサポートも行っています。特にデリケートな問題は、より慎重に扱うことを心がけ、カウンセリングなども行います。



4. 活動内容

「ワイワイにほんご・たいこうやま」には3つのクラスがあります。大人向けにはレベル別に2クラス、子供向けには1クラスあり、参加費用は大人クラスについては一回の参加につき300円、もしくは年会費として1000円、子供クラスについては無料です。

これら3つのクラスの他に、現在は中止されていますが、元保育士のスタッフによる託児保育も行っています。この保育クラスでは活動中、学習者の皆さんの子供だけでなく、日本語ボランティアの方々の子供も預けることができます。このような制度からも教室活動の参加者全員が平等であることを重視されている様子が伺えます。

活動内容

①おとな活動クラス
サポーターとの対話から普段の生活、文化・習慣、社会問題について考える。

②おとな入門クラス
日本語ができない人も、自分のことを話しながら、日本語に慣れていく。

③子どもクラス
勉強の手伝い。進学の相談にも親身になって乗る。

+ 保育 ※現在は、「保育」は中止しています
(託児。遊びながら言葉に触れる。育児の悩み・就学前の不安も話せる)

5. 教室の特性

「ワイワイにほんご・たいこうやま」の特性としては右の3つが挙げられます。1つ目は、教科書を進めるような形式ではなくコミュニケーション

教室の特性

(1) 対話型の日本語学習支援
・教師と生徒の立場は対等
・× 日本語の文法を教える → ○ コミュニケーション

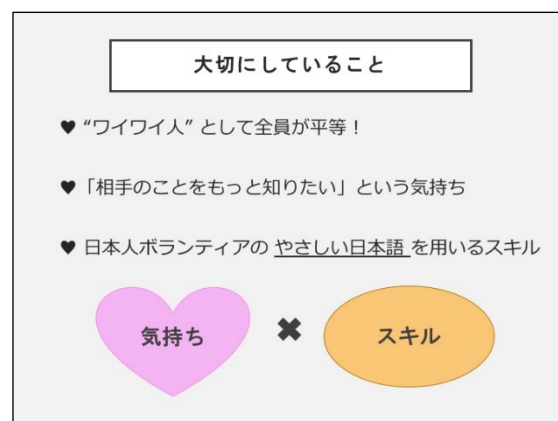
(2) 子育て支援
・保育クラス(預かり保育)の設置
・子どもが通う学校とのコミュニケーションの手助け

(3) 災害時の外国人支援
2012年、富山県内で初めて避難訓練に参加

ンを大切にする「対話型」の日本語学習支援を行うこと。2つ目は、預かり保育の実施や学校とのパイプ役になるなど「子育て支援」に力を入れていること。3つ目は、「災害時の外国人支援」に注力されているということです。2012年には、富山県内で初めて教室単位で地域の避難訓練に参加されました。

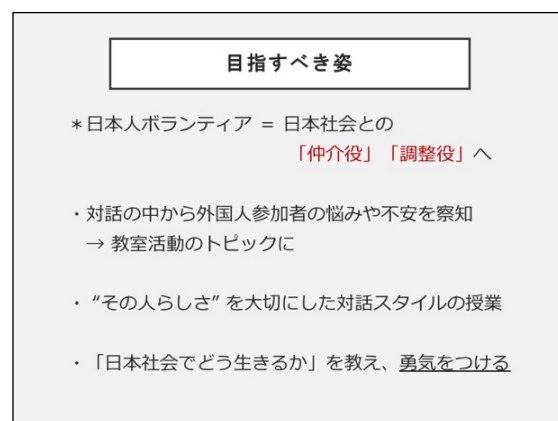
6. 大切にしていること

サポーターの皆さんが教室活動をする上で大切にしていることは、「気持ち」と「スキル」の両方だそうです。外国人、日本人というような立場の違いをなくし、参加する全員が「ワイワイ人」として活動を行うことで平等な目線でコミュニケーションを取ることができているのだと思います。また、その相手を想う気持ちを持つとともに、「やさしい日本語」を用いるスキルの習得にも力を入れておられます。この両方の要素があってこそ、参加者の皆さんに寄り添える活動ができているのだと感じました。



7. 目指すべき姿

「ワイワイにほんご・たいこうやま」では日本人ボランティアの目指すべき姿として、外国人住民にとっての、日本社会との「仲介役」「調整役」を掲げています。普段の対話活動の中から学習者の悩みや不安を察知し、それを教室活動中のトピックとして扱うことで多くの人の助けになればという気持ちで活動をされています。また、学習者全員が同じペースで進む教科書通りの授業ではなく、一人一人の「その人らしさ」を大切にした対話スタイルの授業をこれからも続けていくとのことです。そして、外国人住民に「日本社会でどう生きるか」を教え、故郷以外の場所で生きていくための「勇気」をつけるための場を目指しています。



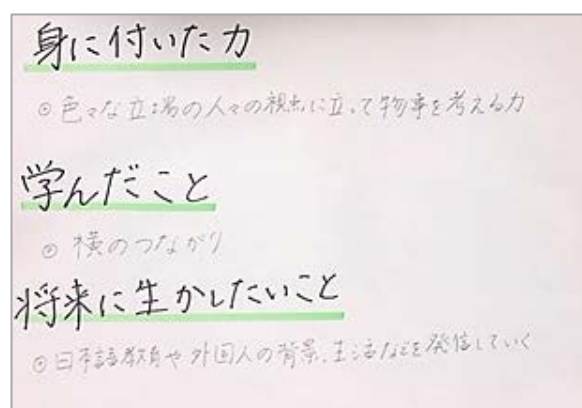
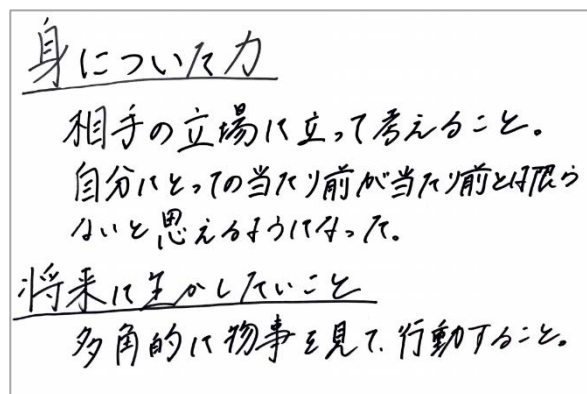
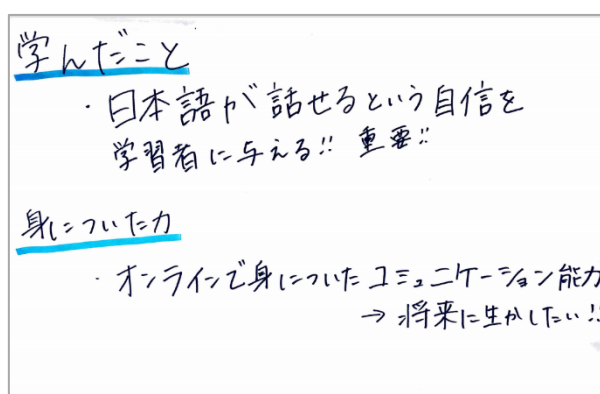
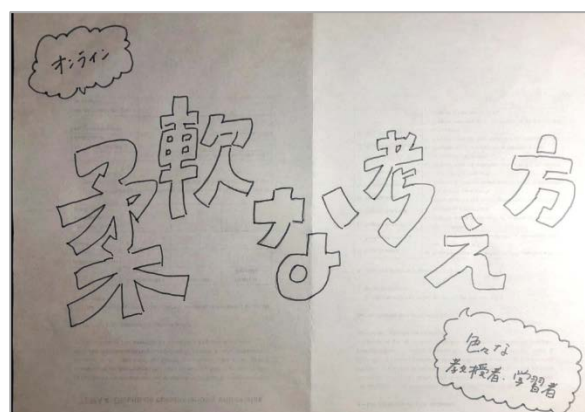
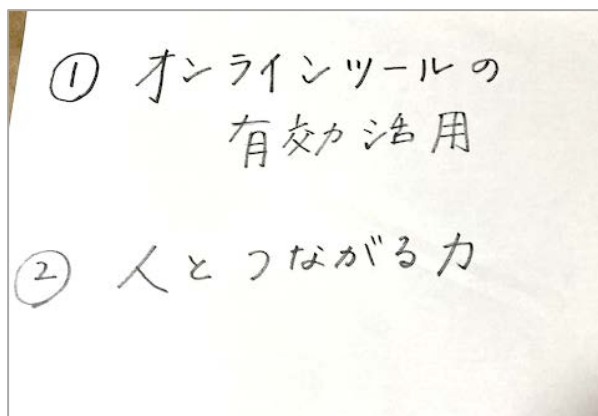
新型コロナウイルスの影響で活動を休止していた「ワイワイにほんご・たいこうやま」ですが、2020年8月22日より、マスクやフェイスシールドの使用等感染対策に十分気をつけながら活動が再開されました。

今回の調査を行い、自分の地元にも地域日本語教室があることを初めて知りました。また、学習者の皆さんは「外国人サポーター」として、自身の卒業後も仕事をしながら入門クラスでの通訳者として教室活動のサポートをするなど、「ワイワイにほんご・たいこうやま」への関わりを続ける方もいらっしゃるということです。それだけ、この教室が居心地良い空間になっているのだろうと感じました。ホームページ上の参加者の言葉の中の一つの『ワイワイは二つ目の家族です』という言葉が、それを物語っていると思います。

しかし、それだけボランティアの方々の負担も大きく、疲弊が見られるということが問題となっています。行政のサポートが入る、日本人サポーターの人数が増加するなど、今後もボランティアの良さを生かした現在のスタイルの教室活動を続けていくための解決策を模索しておられます。私自身も何かの方法でサポートができるよう、考えていきたいです。

Ⅲ 私たちの学び

最終回の授業（2021年1月27日）で、実習全体のまとめとして、1年間の活動を振り返り、「印象に残った出来事」、「身についた力」、「自身の学び」、「将来に活かしたいこと」、「後輩に伝えたいこと」から、実習生が伝えたいことを選び、1枚の紙にまとめ発表しました。実習生19名のメッセージを掲載します。



オンラインの可能性

後輩に伝えたいこと

様々なフィールドで活躍している方々から
 学べることが本当にたくさん!!
 今後の自分について考えるためにも
 ためになる刺激的な時間になる!!

印象に残った 出来事

・協定大学の
授業参加

身についた力

・言葉の伝え方

新しい気づき、視点

外国人との関わり

外国人には英語で...??
 周りの人に伝える
 → 多文化共生

〈学んだこと〉

・色々な答えがある

〈印象に残った出来事〉

・地域日本語教室への調査

〈身についた力〉

・コミュニケーション力
 ・多角的にみる意識

どんな状況でも
 自分から動かす
 意識を
 必ずある!

① 正解が
ある

学び合い

他学科の先輩
 外部の先生
 海外・国内の学習者

② 「教える」
意識

身についた力

・伝える力
 ・相手のことを考える力

後輩に伝えたいこと

・外国語(英語)ができなくてもOK
 それよりも「伝えたい」というマインド!

～キーワード～

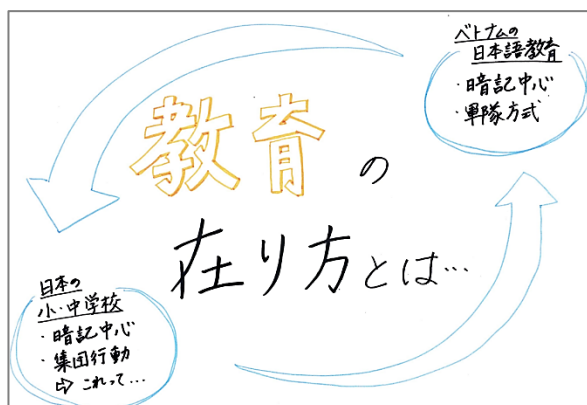
「今だからその
経験を大切に♡」

誰かのため

じゃなく

みんなのための

日本語教育を!



後輩に伝えたいこと

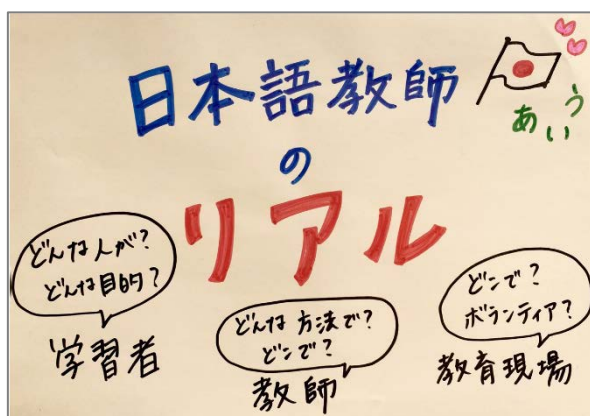
オンラインの可能性は無限大

学んだこと
日本語を教えることだけが変換ではない!

将来生かしたいこと
今回学んだことを生かして日本語教師を目指す! (ほかにも日本語教育に携わる!)

後輩に伝えたいこと
オンラインで何が出来ることもたくさんある!
今後どのように活用するかしっかり聞いて落ちこまないで!!

- * コロナ オンラインならでの学び
- * 広い視野・多文化共生
- * 様々な学び チャンス
- * 可能性 楽しいよ 😊



2020 年度 日本語教育実習（国内）報告書

2021 年 3 月 19 日発行

発行：愛知県立大学日本語教員課程

編集：東弘子・宮谷敦美

〒480-1198 愛知県長久手市茨ヶ廻間 1522-3

愛知県立大学

e-mail : nihongo@for.aichi-pu.ac.jp

本報告書は、令和 2 年度愛知県立大学実習諸経費により刊行された。